

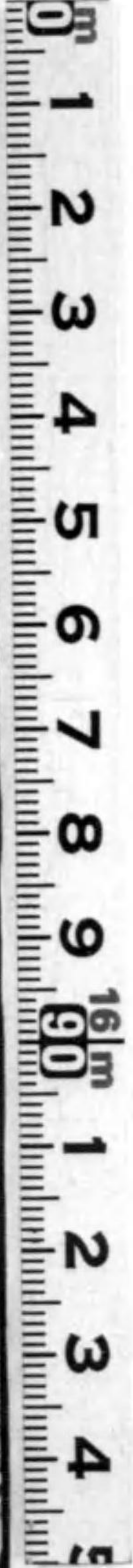
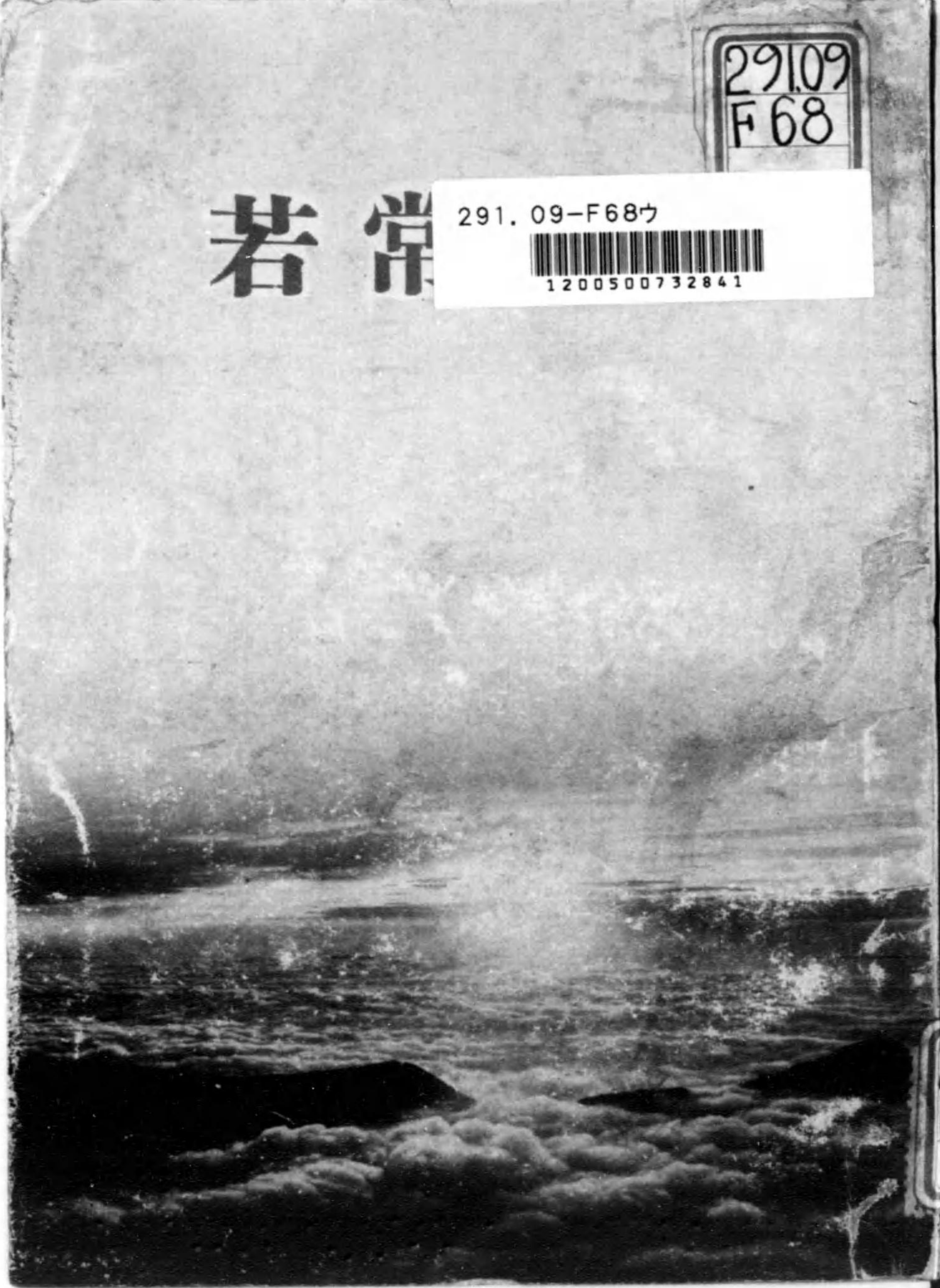
若常

291.09-F68



1200500732841

291.09  
F68



始



291.09  
F68



藤原超然著

國こく

土ど

常とこ

若わか



高日本社發行

立山の

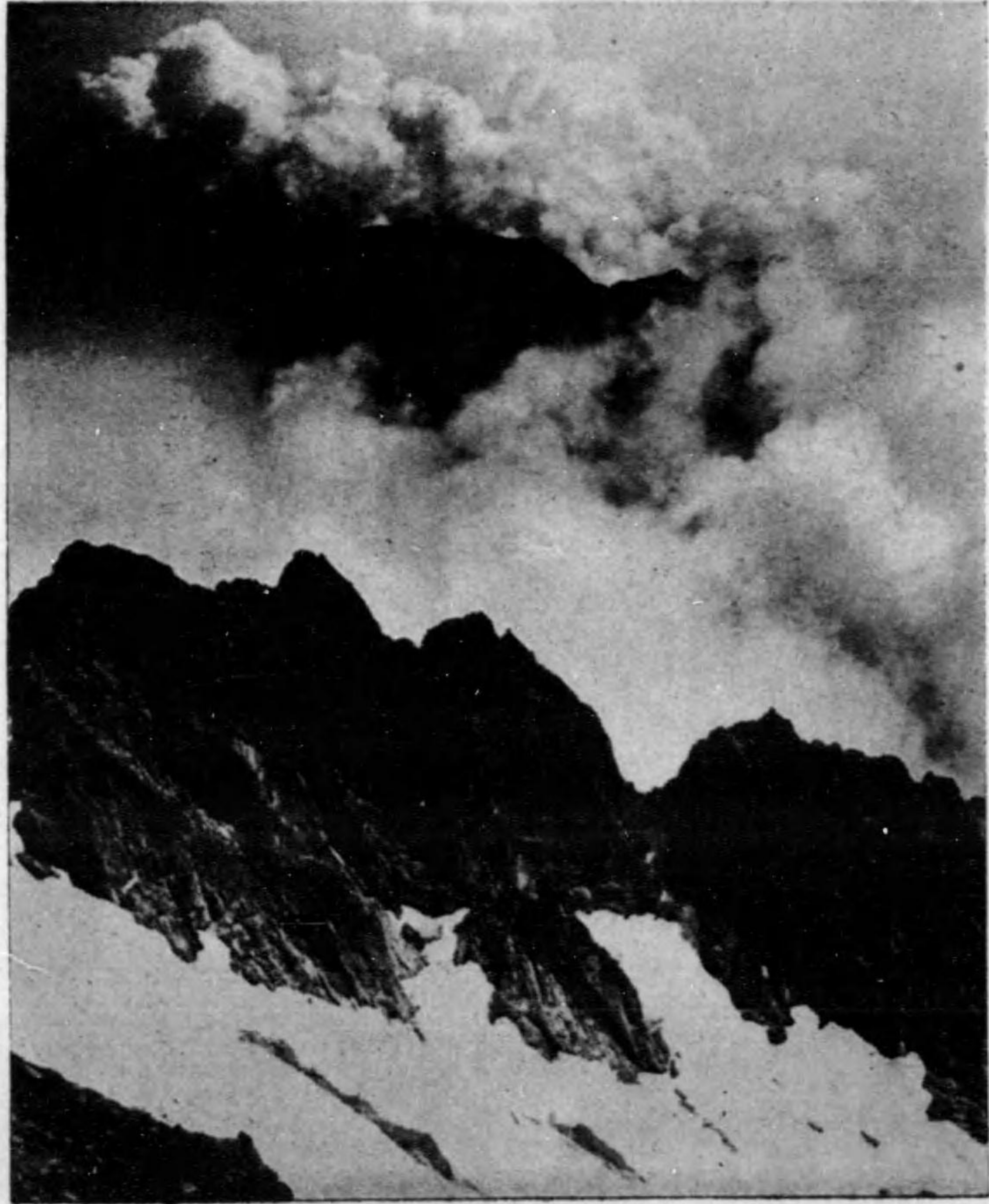
空にそひゆる

をよしさに

ならへとそ思ふ

御代のすかたも

右は 今上天皇東宮  
に在した大正十四年  
新年御詠進の御歌で  
あるが、富山縣人は  
これを立山の主峰雄  
山の頂上に謹刻して  
光榮を記念して居る  
本圖はその立山連峰  
に續く劍嶽の神秘的  
雄姿である。

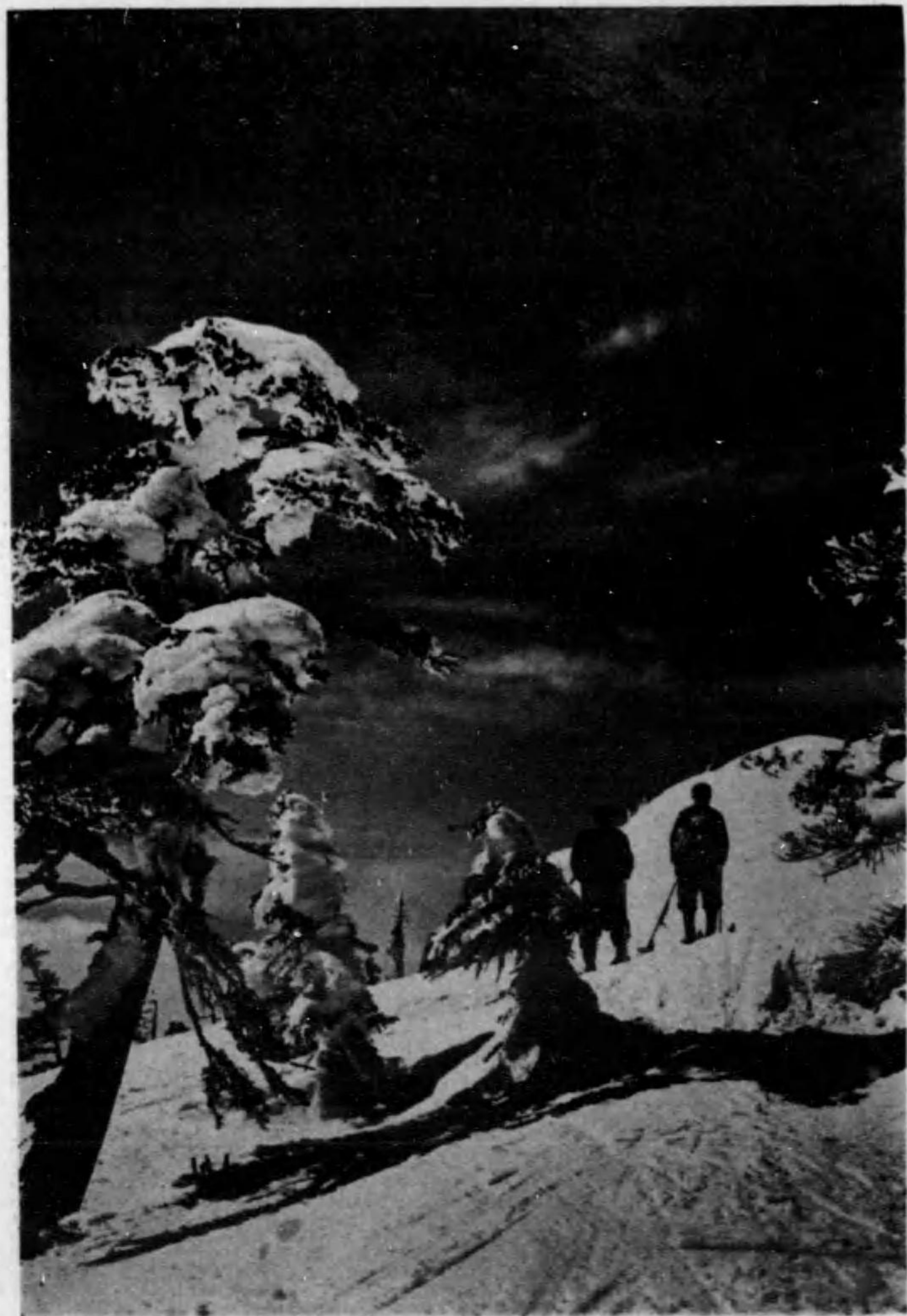




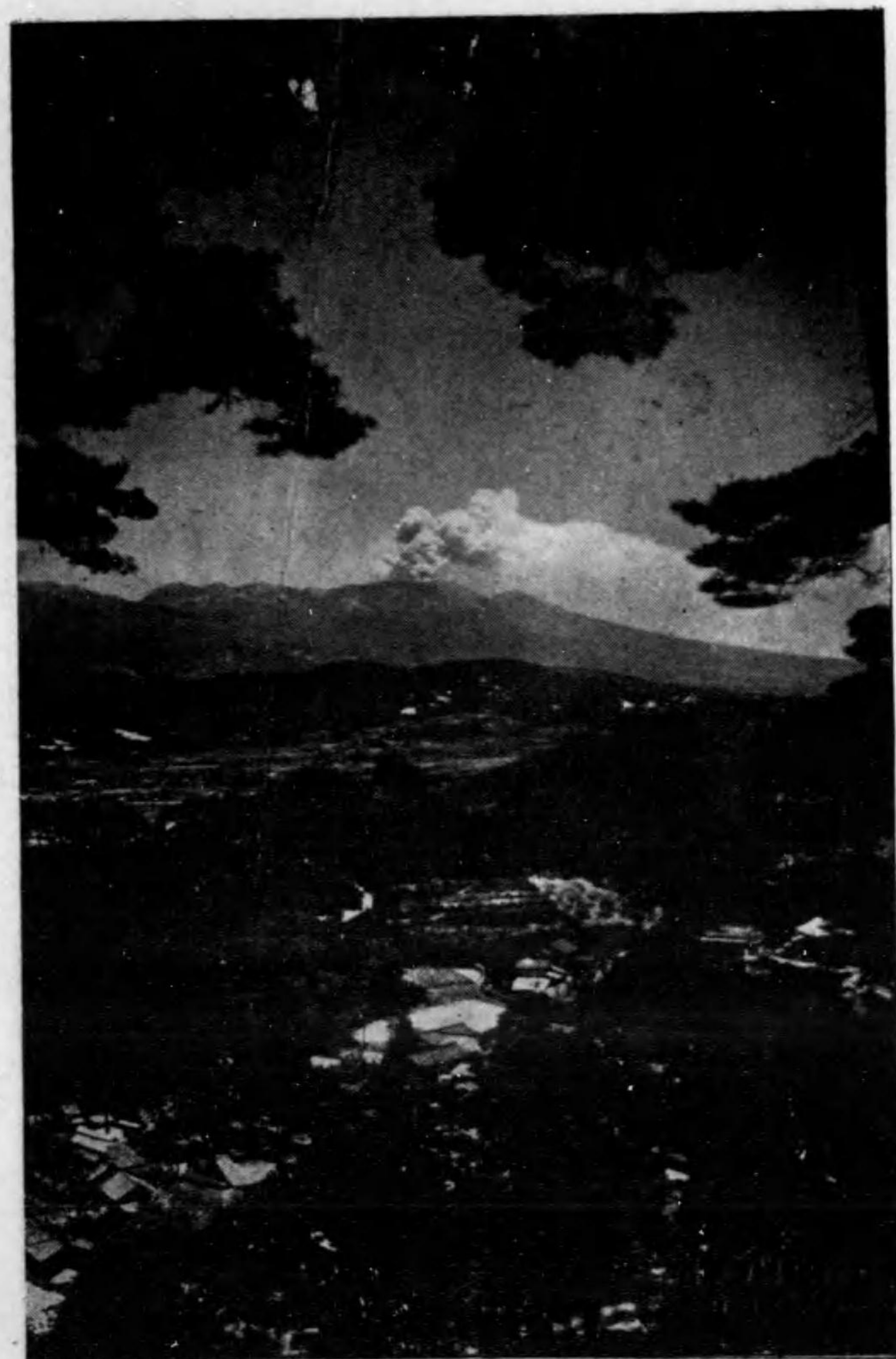
神河内(上高地)童橋の大観  
五尺旅館よ



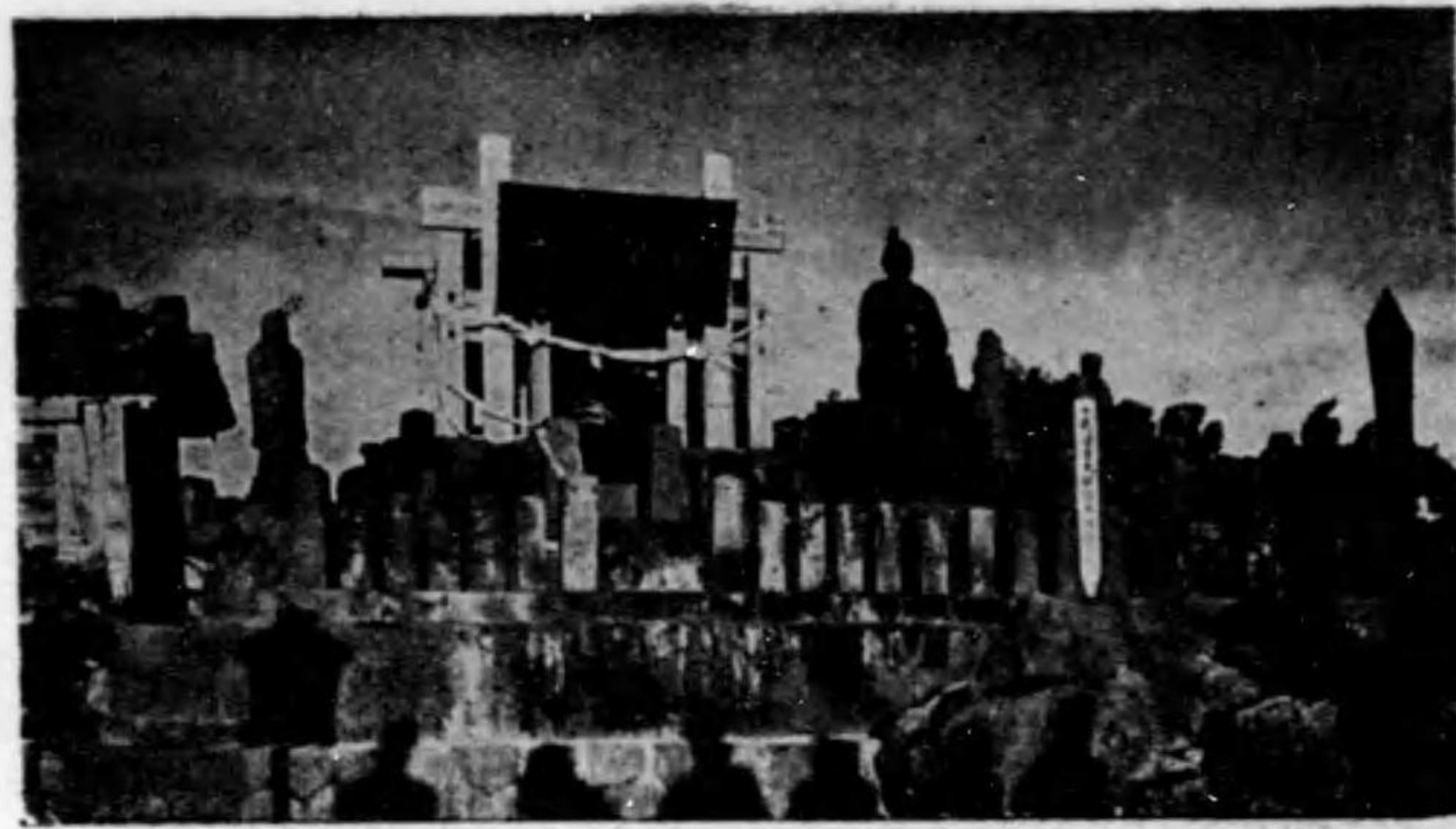
神秘境界部峡谷錦繡關



志賀高原の雪景  
平穩溫泉郷の背景



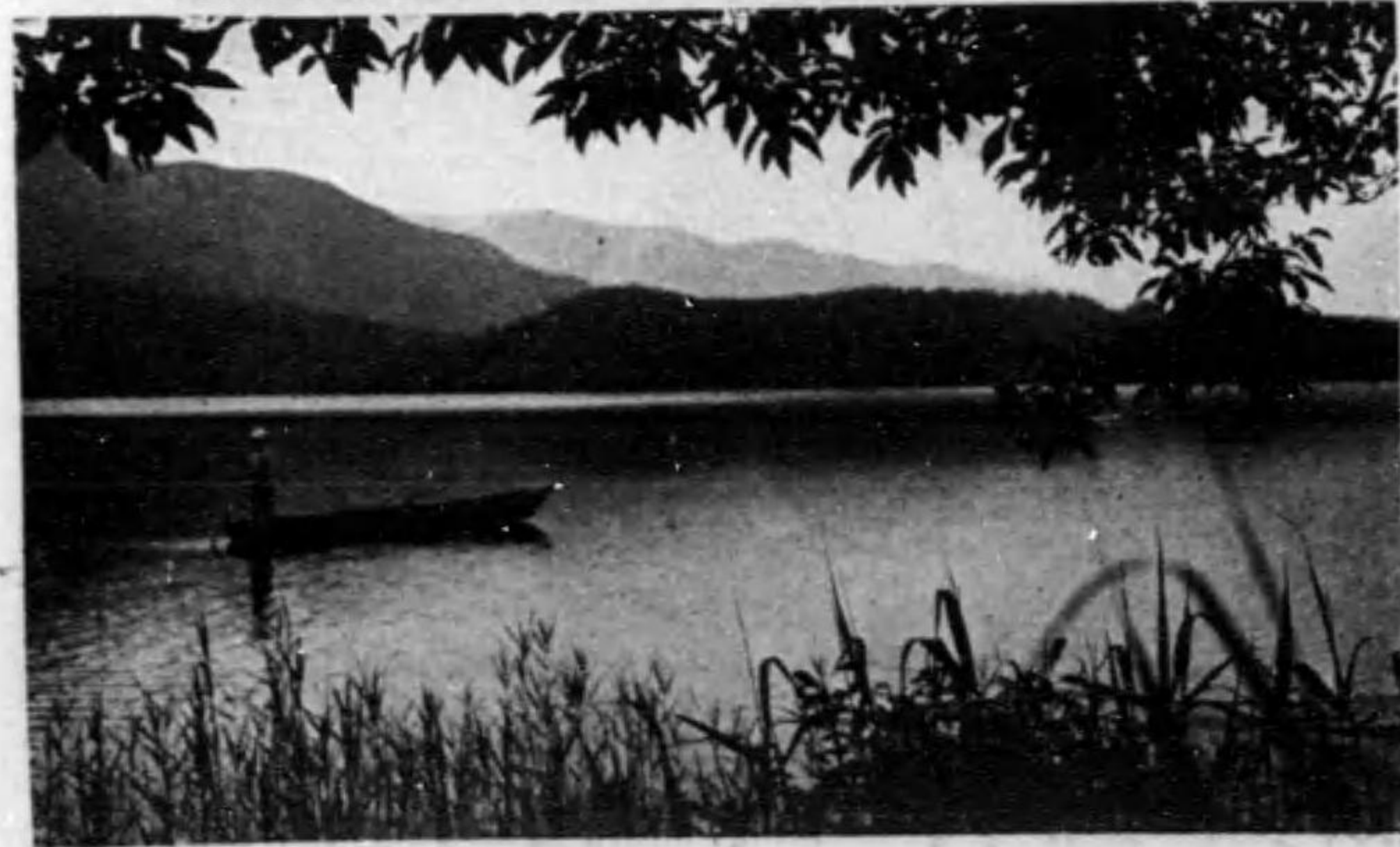
天空に白煙を吐く浅間雄姿  
別所溫泉花屋旅館より望む



御嶽山頂上縣社御嶽神社  
(長野縣東筑摩郡三岳村)



桔梗ヶ原林農園



平村木崎湖



一キス山嶽御曾木



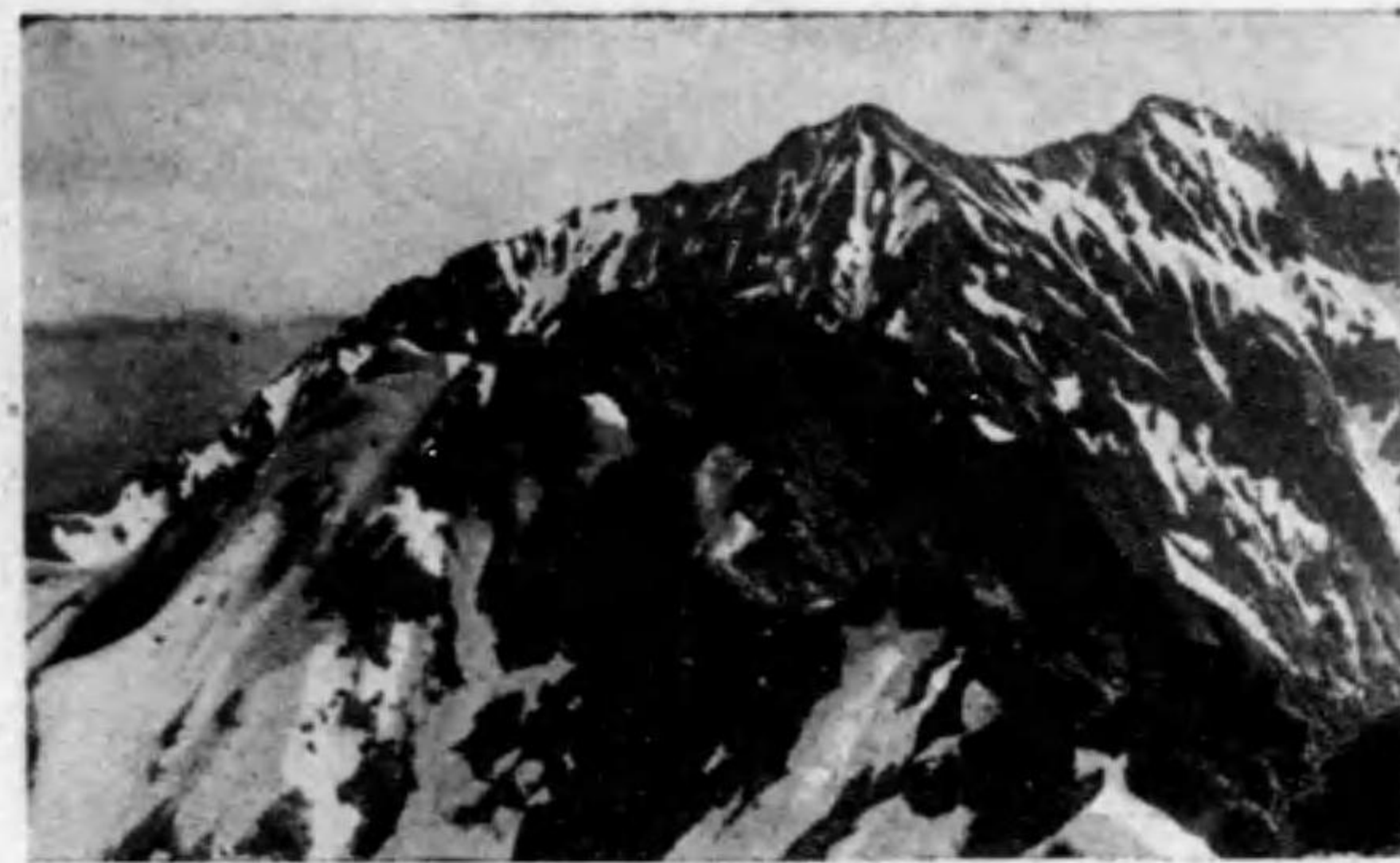
國幣小社 雄山神社 (雄山頂上)



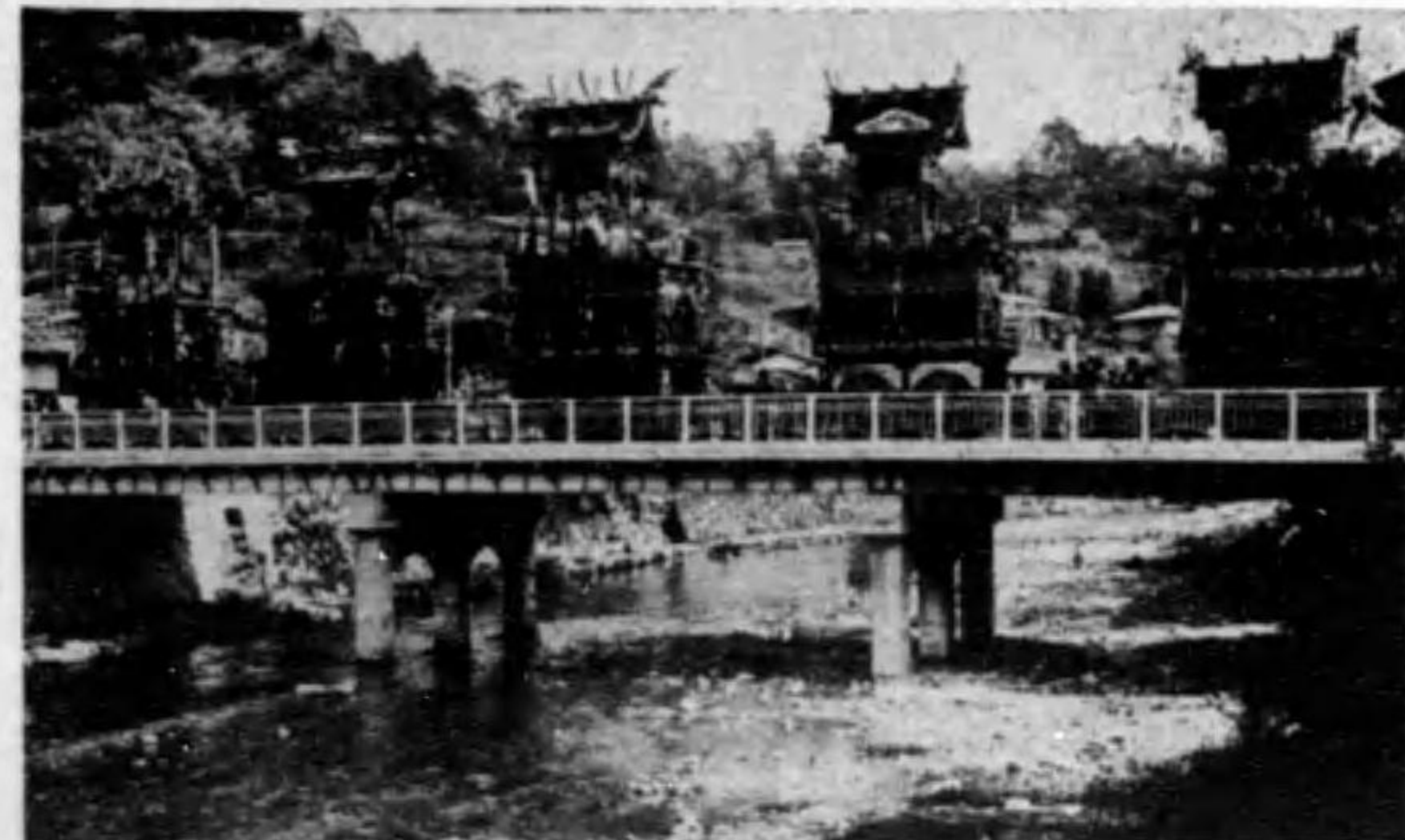
雄山神社前立社  
壇 (富山縣新川  
郡鎮座)



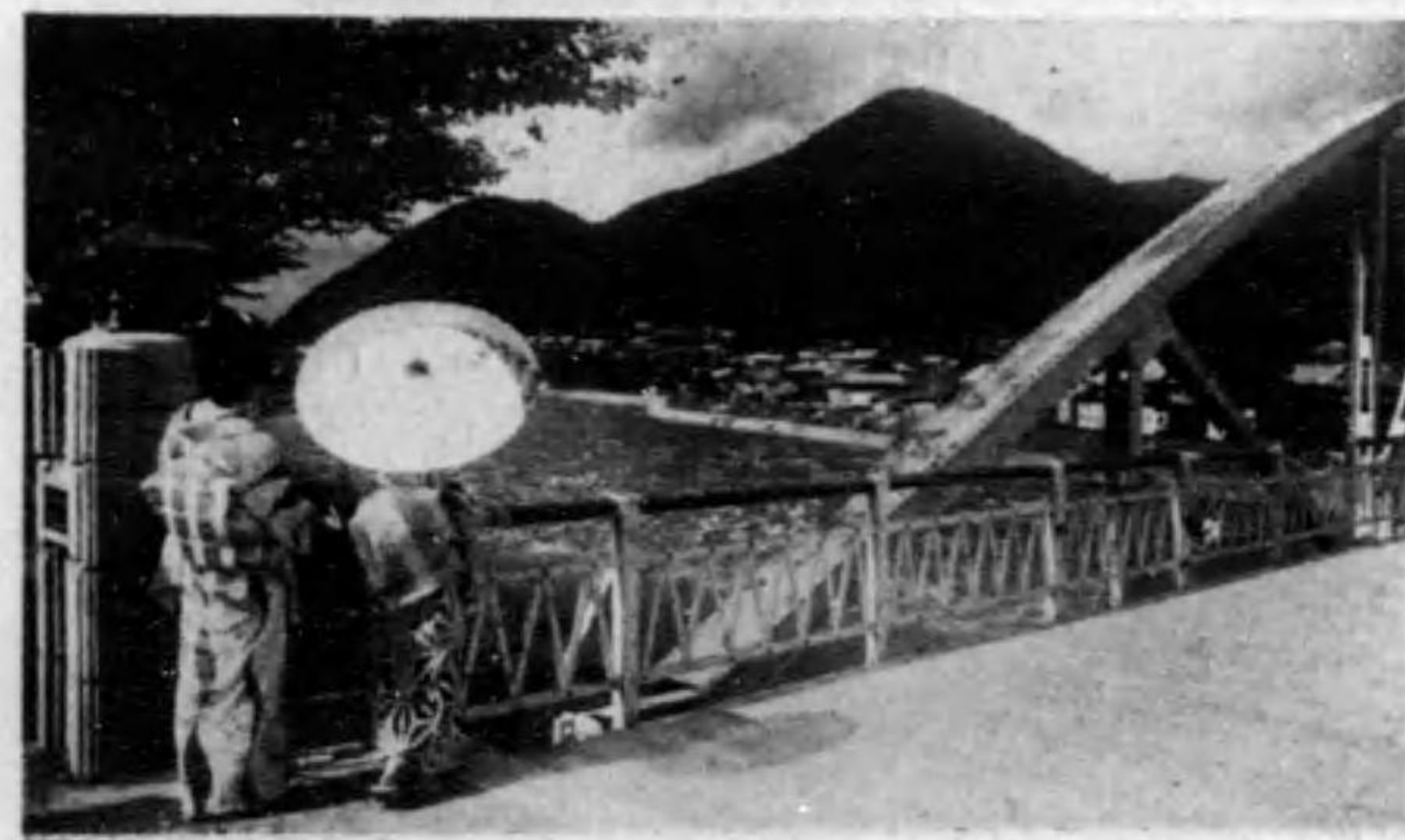
蟹氣樓蝨烏賊網にて有名き魚津町海岸



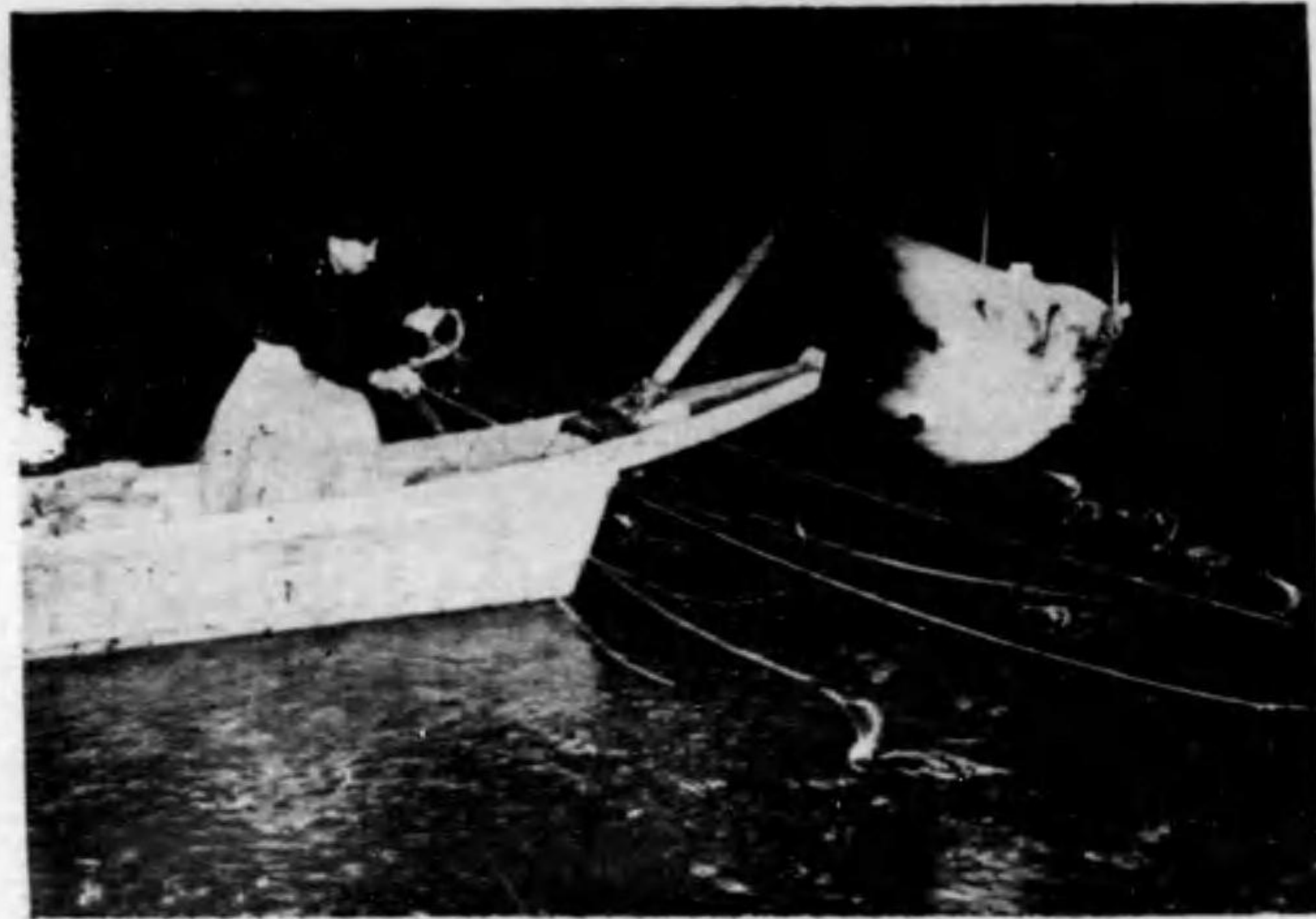
日本アルプス白馬嶺  
(長野縣北安曇郡北城村)



飛騨高山市  
祭



下呂温泉の遠景



景の飼鶴川良長阜岐



ンイラ本日



荷稻川豊國河三



道参表社神綱針社縣町山犬張尾





三河蒲郡竹島



岩水寺遊園地よりの岩水寺  
(静岡県濱名郡佐村)



三州一ノ宮 國幣社 砥鹿神社



遠州奥山方廣寺(奥山半僧坊)  
開山圓明大師(後醍醐天皇の皇子)



三河名勝 鳳來峽



信州諏訪湖



西駒ヶ岳(長野県上伊那郡)



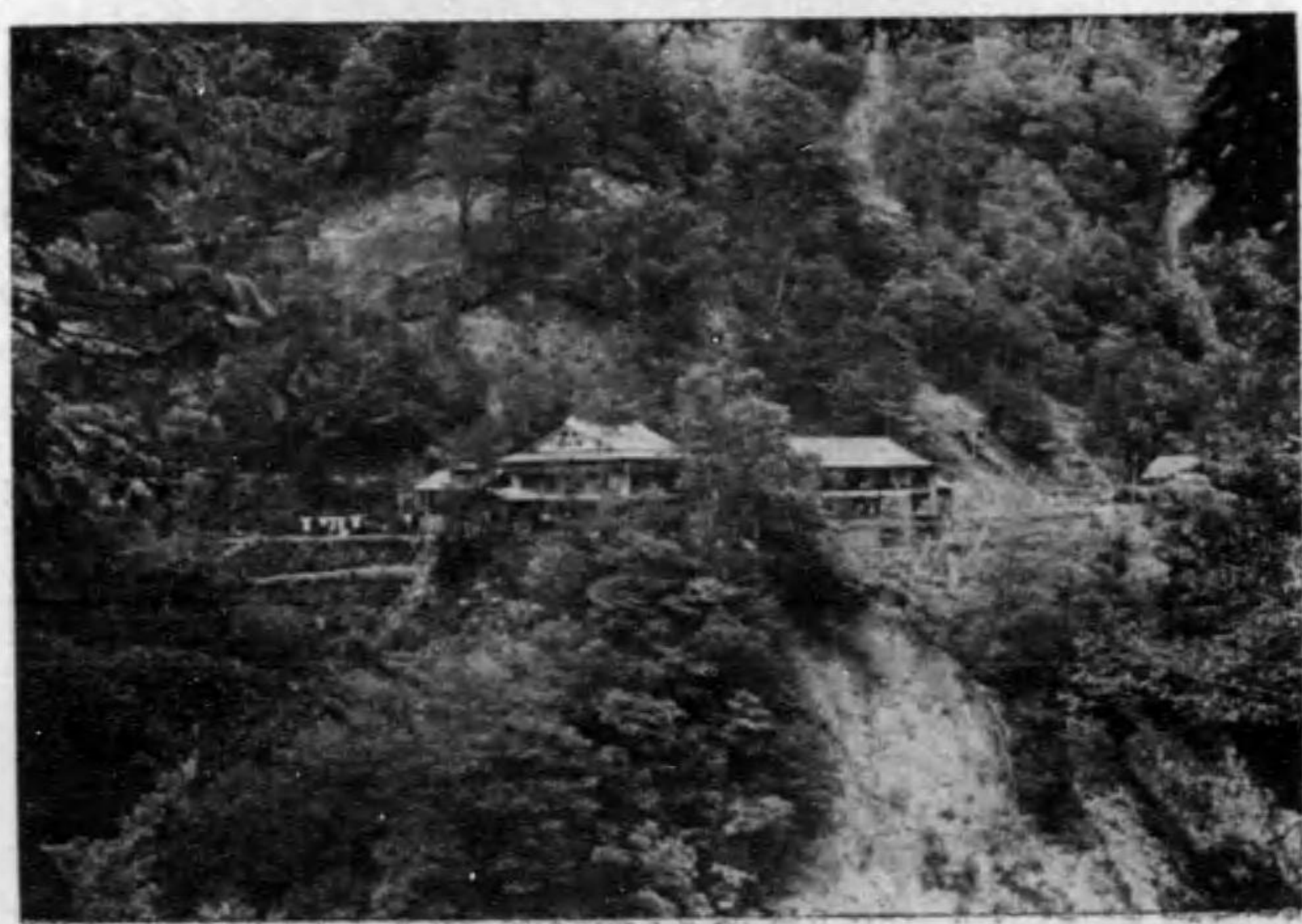
諏訪ヶ峰のグライダー



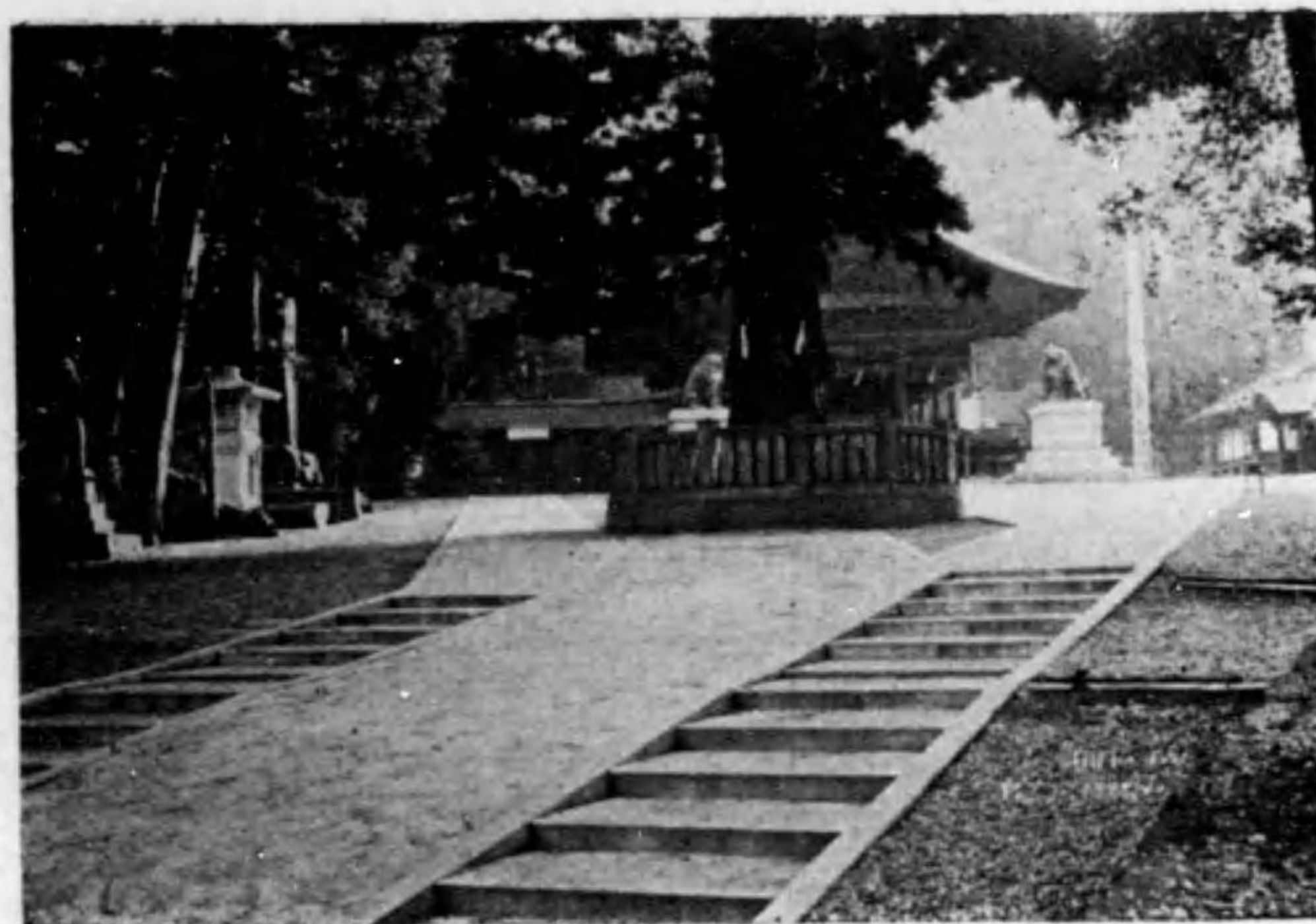
天下第一と稱せらるる高遠の櫻(長野県上伊那郡高遠町)



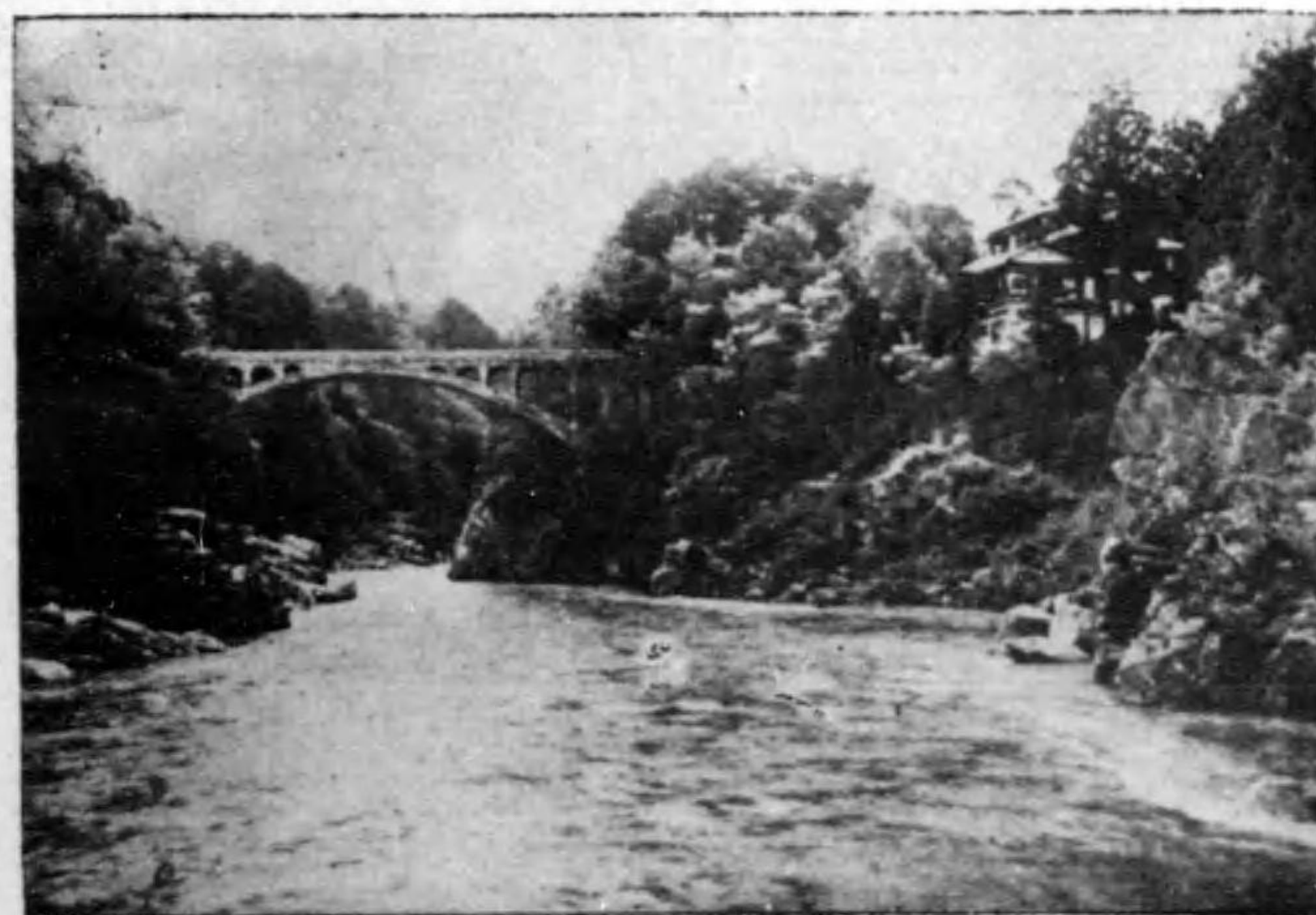
國寶松本城天守閣



(地據根山登岳燒) 景遠湯の中關玄地高上



(在所町訪諏下郡訪諏縣野長) 宮秋社下社神訪諏社大幣官



(村路川郡那伊下縣野長) ルテホ峽龍天



（座鎮村田鹽東郡縣小縣野長）社神島足島生 社中幣國



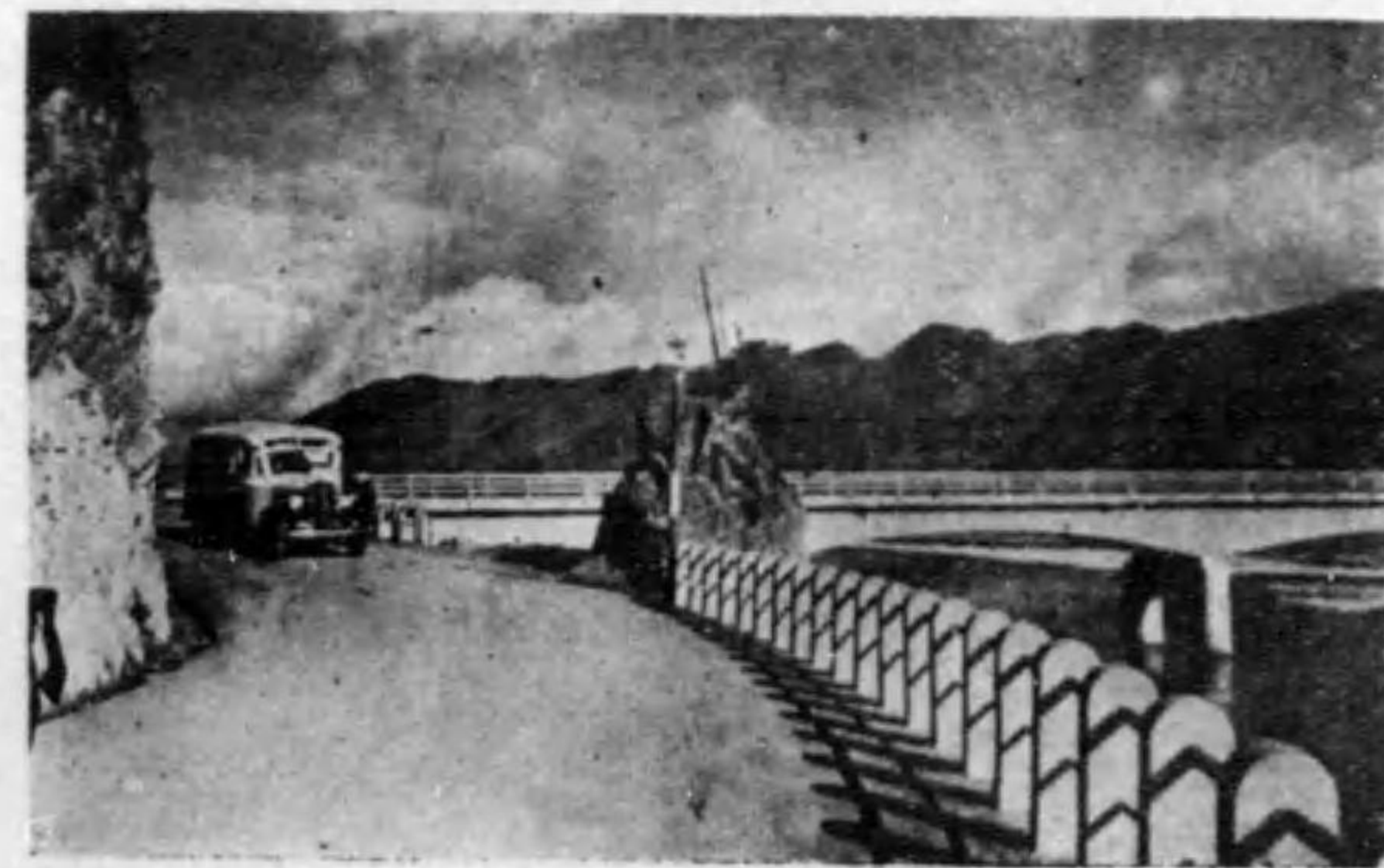
館盤常泉温師藥野菱外郊諸小



長野縣埴科郡松代町  
象山神社



善光寺の景（長野市）



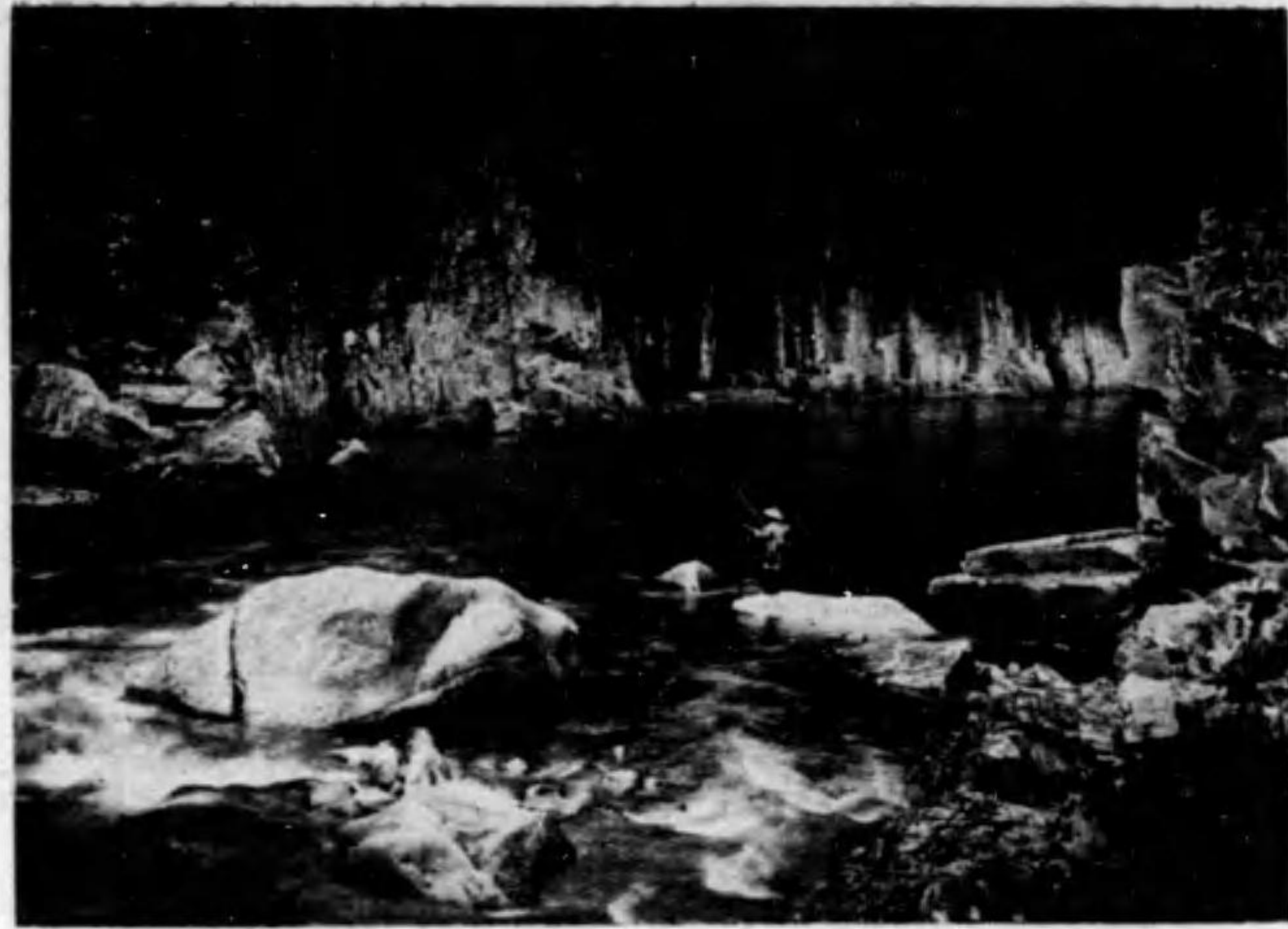
上山田温泉  
（長野縣更級郡上山田村）



橋臺五湯の教鹿たれら知て以を効特に風中  
(村内西郡縣小濃信)



館師藥泉温師藥野菱  
(外郊町諸小郡久佐北縣野長)



木曾名勝鞍馬峽



上高地梓河畔 清泉水屋ホテル



入山邊靈泉霞山莊(前流るる川の清流)



信州須坂町名勝(龍ヶ池)

916  
217

## 自序

古今未曾有の大戦に對して、國民の凡ては、最大の勇氣を鼓して戦つて居る。同時に日本の國土そのものも、亦戦つて居る。他の民族の國家に於て、國土は多く物質の積重ねに過ぎぬが、日本に於て國土は生きて居り、其魂は神として崇め祀られて居る。國土は物質的諸般の資材の提供者たるのみならず、又無形の大きいなる活力の提供者として、其不可量の貢獻を爲して居るのである。凡てのものを生かすこと、それは日本文明の特色である。況や初めより生ける國土の生命を尊重し、これと緊密抱合、以て不朽の繁榮を基礎づくることをや。從來世界に現れたる多くの文明は、自家の生命發展の爲めには、他の所有る犠牲を意とせず、乃ち國土の如きも、極端にこれを搾取し酷遇し遂に其荒廢破滅を來さしめたるもの、比々是れであつた。文明の永續する所、其後に來るものは荒廢なりとは、殆ど原則的の如くにも思惟せられた。試に地球儀を取つて之を檢せよ。其上に施されたる密集的點々の、意外に廣大なる面積を占むるものは、これ何等の表示ぞや。普通に是等を稱して沙漠と云ひ、そは自然の大きいなる手が、偶ま地球上に零した<sup>こぼ</sup>缺陷の幾處に過ぎずとして、慢然看



(座鎮村隱戸郡内水上縣野長) 社神隱戸社小幣國



(座鎮町高穂郡曇安南縣野長) 社神高穂社小幣國

過に置かるゝのであるが、而も仔細に其成因を考察する時、それは人類といふ放縱無智なる動物の地球喰荒しの結果に本づくもの、其主に居ることを知るに及んで、何人か慄然として膚の寒きを覚えざらんや。物を殺す文明、それは遂に彼の害虫等が、樹木等を喰荒し、之を枯死せしむると共に己れ等も亦共に滅亡の運命に陥ると、殆ど相異らぬ行動たるものである。過去人類の世界歴史といふものは、實に斯の如き人類の大過誤と大罪惡とに對する無反省、甚しきは之が誇負の記録ですらもあつたのである。

獨り日本文明に至つては、是等と全く選を異にし、日本文明はあらゆるものを生かすの文明である。生命あるものは固より、其これ無きものに對しても、亦能く之に賦活する。即ち日本文明は自家の國土をして、最善最大に其生命力を發展せしめて、不朽の美化に就かしむるのみならず、苟も日本文明の光被する所、其處の山川國土は悉く其生命を復活し、絶えて久しき廢滅の間からも、瑞々しき麗色を發揮して已まざらしむる所、殆ど不可思議力に近いものがある。而もこれ何等の不可思議でもない。日本文明は、一に宇宙の大いなる神の意思を奉行して、其處に一私を挟み給はぬ顯つ神天皇の開闢以來萬世一系變らぬ大御心を中心とし、億兆一心、これ亦祖先以來渝らぬ至誠を之に獻けまつるの文明なるが故に、日本文明は乃ち地上に於る眞の神國を實現すべき至崇至高の文明

なるものであるからである。されば今日頻りに各國に唱道せらるゝ所謂國土計畫といふ如きの類も其根本眞理を、日本文明の此特色に學ぶでなかつたなら、其物質的計算は、如何に周到細微を極むとも、要するに枝葉末節の計たるもの、何ぞ能く地球荒廢の大いなる過誤を救済するの力などを持ち得やう。

日本民族がこの千歳未曾有の大時局に際つて、百年長期の大戦に克勝し、千歳不崩の長策を、人類世界の爲めに樹立するに對しては、この國土生命の尊重こそは、一大基本たるものである。本書はこの原理を究むる爲めに、聊か一端の論證を試みたるもの。中庸に曰く、人飲食せざるなし、能く味ひを知るもの鮮しと、國土風光に於ても然り。名山大川、豊壤沃野、之を望み之を眺めて、人其美に驚き、其榮えに嘆稱せざるなしとも、其如何にして、斯の如きの好山川、好國土の我等の上に存するかの本に至つては、これを深甚の考察に置くものは乏しい。或は之を以て單なる自然の恩恵と爲し、甚しきは偶然の僥倖とすらも思惟し、以て其深きもの大いなるものに、衷心の感謝を獻ぐることを能くせぬ。尋常の時代はそれでも通るであらう。けれども今日の如き眞の死活存亡の大時代に於て、左様の怠慢は危い。我等は必ずや我國土生命の長久不壞なるの本づく所に對して、十二分の攻究を施し、其原理の把握と共に、緊切之が培養の道に献身し、以て内には萬歳搖ぎなき



國礎を底つ磐根に固むると共に、外には人類の久しき喰荒しに因る地球の荒廢を防止恢復し、以て世界歴史の眞の書直しに、成功を爲さねばならぬ。

十餘年以前唯物史觀的思想の、我國土の上に若干の流行を爲せるや、山川國土悉く之を物質視し或は高山の巔を蹈んで、其征服を豪語し、名山大川之を取つて、障礙物競走に於ける石塊木屑と相擇ばざりし如きものもあつた。當時私共は茲に慨する所あり、高日本風光の書を著はし、此山高く水清き高日本地方を以て日本國土の代表的地區として、風光と神意との關係を説くに努め、爾來年々其等の書を刊し、以て考究の歩を進むるに銳意したが、今日にして當時を想へば、時勢の變遷、眞に驚くべきものがある。今や日本文明大興の大時節は到來し、上、顯つ神天皇の大詔降つて、下萬民皆絶大の忠誠を奉じて、御稜威の發射を仰ぎまつる。

山川國土欣躍飛舞、其全活力の發揮に従はぬはない。此時之が眞正の意味を解する爲めに微衷を奉ずること、亦必しも無用ならぬを信するものである。

昭和十七年七月

著者識

『國土常若』目次

表紙寫眞 中部山岳國立公園燕岳の御來光 有名なる岡田紅陽氏の撮影	四四
第一章 日本國土の優美性	一
我國土美と太陽	一
富士が嶺と朝光	六
日本は四季皆美	九
春に於る美しさ	二
夏時に於る其美	一七
秋冬各自の特色	二〇
第二章 人類の地球喰荒し	二三
開落慌しき國家	二三
地上の國土荒廢	二七
荒廢の眞因如何	三〇
第三章 日本國土の特色	三七
自然力説の過誤	三七
責任回避の罪惡	四〇
日本の成功原因	四四
第四章 支那大陸の荒廢	四七
支那古書の證明	四七
纏て來れる濫伐	五〇
周に現れた實證	五二
第五章 皇神遷の御國見	五七
天然のみでない	五七
生島足島の思想	五九
國土尊重と山嶽	六四
第六章 神社祭祀と山川	六七
國土民族の抱合	六七
高天ヶ原に象る	六九
第七章 民族の情愛と國土	七三
三者渾然一體	七三
國土と民族の分裂	七五
第八章 瑞穗國の眞意義	七七
稻田と國土の長久性	七七
井田法と水乾田	七九
第九章 誠あれば物あり	八一
近世文明の大誤謬	八一
第十章 日本精神の根源	八三
神を認識するもの	八三
精神界の朝日こそ	八五
長久に咲く文明の花	八七
第十一章 結論	八九
實例 篇	九三
高日本地方山水の布置	九五
人間生活の最好適處	九六
此地方と四季の特色	九八
此地方の優美性と歴史關係	一〇一
千曲川流域地方	一〇五
碓氷嶺	一〇六
輕井澤	一〇七
淺間山	一〇八
小瀬、星野、鹽竈諸温泉	一〇八

小 諸 町……………一〇九  
 菱野薬師温泉……………一〇九  
 薬師館、常盤館……………一一〇  
 高峯スキー場……………一一一  
 松 原 湖……………一一一  
 海の口温泉……………一一二  
 野邊山原……………一一二  
 上 田 市……………一一二  
 上田地方交通……………一一三  
 上田蠶絲専門學校……………一一三  
 菅 平……………一一四  
 生島足島神社……………一一四  
 別 所 温 泉……………一一六  
 北向観音堂……………一一七  
 田澤温泉、杏掛温泉……………一一七  
 鹿教湯温泉……………一一七  
 鹿教湯スキー場……………一一八  
 靈泉寺温泉……………一一九  
 上山田温泉……………一一九

陸軍療養所……………一二〇  
 戸倉温泉……………一二一  
 八幡神社……………一二一  
 姨 捨 山……………一二三  
 篠ノ井町……………一二三  
 松 代 町……………一二三  
 象山神社……………一二三  
 川中島古戦場……………一二四  
 長 野 市……………一二五  
 善 光 寺……………一二七  
 戸 隠 神 社……………一二八  
 戸隠山めぐり……………一二九  
 戸隠スキー場……………一二九  
 須 坂 町……………一三〇  
 墨坂神社……………一三〇  
 山田温泉、中野温泉……………一三一  
 關山國師出生地……………一三一  
 平穩温泉郷……………一三二  
 湯田中温泉……………一三二

安代温泉……………一三三  
 澁 温 泉……………一三三  
 上林温泉……………一三三  
 地獄谷、發哺、熊の湯……………一三四  
 角間、穂波温泉……………一三四  
 志賀高原、大観世音……………一三五  
 野 尻 湖……………一三五  
 野尻湖ホテル……………一三六  
 飯 山 町……………一三六  
 野澤温泉……………一三六  
 野澤スキー場……………一三七  
 松の山温泉……………一三七  
 犀川流域地方……………一三八  
 松 本 市……………一三八  
 長野縣護國神社……………一四〇  
 浅間温泉……………一四〇  
 山邊温泉、御母家温泉……………一四一  
 霞 山 莊……………一四一  
 犀鏡泉 明神館……………一四一

美しが原……………一四二  
 鹽 尻 町……………一四三  
 桔梗ヶ原……………一四四  
 達切峡、山清路……………一四四  
 聖山と馬場峠……………一四四  
 國立中部山岳公園……………一四四  
 上 高 地……………一四五  
 徳本峠越え……………一四六  
 上高地の特色、新緑と秋葉……………一四七  
 穂高神社奥社……………一四八  
 穂高登山……………一四八  
 上高地と登山各路……………一四九  
 上高地旅館……………一四九  
 中の湯温泉……………一五〇  
 白骨温泉……………一五〇  
 乗鞍スキー場……………一五一  
 穂高岳、槍ヶ岳……………一五一  
 槍ヶ岳から常念岳、槍から他の踏道……………一五二

豊 科 町……………一五三  
 穂高町、穂高神社……………一五三  
 大 町……………一五三  
 木崎、中綱、青木三湖……………一五三  
 漁業組合の計畫……………一五四  
 木崎湖ホテル、道の家……………一五四  
 常盤苹果……………一五四  
 白馬登山口と北城村……………一五五  
 常念岳、中房温泉……………一五六  
 葛 温 泉……………一五七  
 糸 魚 川……………一五九  
 諏訪湖地方……………一五九  
 八ヶ岳……………一六〇  
 諏 訪 湖……………一六一  
 官幣大社諏訪神社……………一六一  
 諏 訪 市……………一六一  
 諏訪温泉……………一六二  
 スケート……………一六二  
 霧峯スキー場……………一六三

下 諏 訪 町……………一六四  
 澁 温 泉……………一六五  
 天龍川流域地方……………一六五  
 辰野、伊那町、高遠町……………一六六  
 高 遠 の 櫻……………一六七  
 赤石山系……………一六八  
 木曾山脈……………一六九  
 駒ヶ岳と宮田、赤穂町……………一七〇  
 靈剣養命酒……………一七〇  
 信濃宮神社創建……………一七一  
 南アルプス登山口……………一七二  
 飯 田 市……………一七二  
 飯田、三留野間……………一七二  
 天 龍 峡……………一七三  
 天龍峡ホテル……………一七四  
 駒場地方、南アルプス南部登山口……………一七四  
 天龍川舟下り……………一七五  
 下天龍舟下り……………一七五

鳳來寺、鳳來峽、湯谷温泉	一七六	針綱神社	一九二
砥鹿神社	一七七	岐阜縣岐阜市	一九三
豊川稻荷	一七八	長良川の鵜飼	一九三
豊橋市	一七九	下呂温泉	一九四
蒲郡町	一八〇	高山市	一九五
竹島辨天島	一八一	平湯温泉	一九六
濱松市	一八一	中部山岳と岐阜縣側	一九六
館山寺、岩水寺	一八三	岐阜縣側登山コース圖	一九九
方廣寺	一八三	富山縣の國土愛護と其優秀なる方面	二〇〇
本曾川流域地方	一八五	富山市	二〇三
葦原スキー場	一八六	廣貴堂の發展	二〇四
福島町、水無神社	一八六	光榮なる立山	二〇四
御嶽山、御嶽神社	一八七	黒部峽谷	二〇六
鞍馬峽、御嶽スキー	一八八	黒部鐵道、宇奈月温泉	二〇七
上松町	一八九	高岡市、立山温泉	二〇九
寢覺と棧、美留野	一八九	魚津町	二〇九
中津町	一九〇	山田温泉、小川温泉	二一〇
惠那峽、金龍温泉	一九〇	新湊町、水見町と唐島其他	二一一
日本ライン、犬山町	一九一		

# 國土常若

藤原超然著



## 第一章 日本國土の優美性

### 我國土美と太陽

舒明天皇は、天の香具山にお上りになつて、國見を遊ばされたが、その時の御歌の中に『美し國ぞ秋津洲、大和の國は』と仰せになつて居る。實際高きに上つて、四方をお見渡しになれば、今更ながら、日本國土の美しさに御讚嘆を禁じさせぬものが在したであらう。世界に國といふ國多しと雖も、日本の如き國土美を持つ國は少い。その世界一の國土美に關して、これまでの多くは、單に日本民族は、偶然に斯様な好き國土に住み得たのである位に考へて、何うしてそらいふ美し國土が、日本民族



及ダイアド感光紙

合名會社 櫻井大二郎商店 東京・大阪・京城・上海

の爲めに、而も千歳相變らぬ美しさに於て、與へられて居るかといふことについて、眞に深い考察を施したことの少ないのは、甚しき缺點であると思ふ。近來國土計畫といふことが、頻りに唱へられて居るが、國土計畫は先づこの根本から慎重の推充をして見ぬと、間違を來たすと思ふ。然らざれば其計畫如何に周密を極むとも、要するに枝葉末節に墮するを免れぬからである。

日本國土の美しいといふことは、勿論國土そのもの、構成に存するが、併し茲に最も忘れてならぬ事は、日本國土の美といふものは、其第一が天つ日影、即ち天日の、最も麗しく日本の國土に於て、拜まゝるといふことである。我等人間の眼にし得る宇宙に於て、太陽ほど美しいものはない。此は何等議論の必要もなく、萬人の共に承認する所であるが、而も太陽はそれ自身に於て、絶美の所有者たるのみならず、同時に萬物を美化するの力を持つ。太陽なき所は暗黒である。暗黒の中には、何等の美もない。太陽あつて、光明なるものを發射し、その光明もて、萬物を照らす故に、萬物は茲に其美を發揮することを得るのである。故に太陽は凡ての美の中心である。その太陽が、日本の國土に於て、特に美しく拜まゝるのであるから、日本の國土と、國土上の凡てが、萬國に優れて、その美を輝かし得るのである。これは極めて當然の事ながら、當然の事が屢々忘却され、又は平凡視せらるゝのであるから、此事を、充分に心に留めて置かねばならぬ。

太陽は普く地球上の各地を照らし、地球上の何處からでも、太陽を見られぬはないのであるけれど

も、その見られ方が、所によつて同じくはない。餘りに熱さの酷い國、例へば印度の如きに於ては、太陽は赫灼に過ぎて、見る眼の眩むのみならず、その暑熱の苦に堪へぬものがある。されば印度民族に於ても、古くミトラ、スーリヤ、サヴィトリ、ブーシヤン等、太陽の神格化、又は太陽關係の神々の、崇拜がなかつたではないが、何時しかに其等よりも、雷霆の神たるインドラが、多くの人氣を集めて、印度民族の守護神たる地位を取るに至つた。これは天日燦くが如く、萬衆は其熱殺を蒙る時、忽ち空中に電光閃いて、雷霆はためき渡り、聽て沛然たる大雨を降せば、炎熱茲に一洗せられて、萬衆蘇生の吐息を吐き得るからで、その雨を齎すインドラの神が、太陽神以上の聲望を博せる所以である。これに反して又餘りに寒き地、例へば西比利亞地方の如きに於ては、太陽の力が甚だ弱々しく、人をして贊美の念を生ぜしむるに薄いのである。又支那大陸の如き。地は必しも大部分温帯に居らぬではないが、餘りに廣漠として、無神經的であり、殊にその北半は、沙塵常に天を蔽ひ、陽光これに噎せて、其光りを放つに堪へず、稀れに霽れ渡つた日は、眞に爽快にして『青天白日』といふ讚仰的言葉をも生むに至つたのであるが、その白日とても、日本の紅日に比しては、その美同日の談ではない。されば支那民族も古く其國土の東端に、出日を賓するといふやうな儀禮的の觀念をば、有したのではあるが、進んで日神崇拜とまでは發達せず、唯だ天威の極めて嚴烈なるに對して、天といふ語を以て、神を意味せしめ、其天に事ふる頗る敬虔なるを致したのである。けれどもその天は茫漠として

中心統一者を存せず、後には天とは自然法といふが如き意味ともなり、神ともつかず自然ともつかぬ曖昧模糊たるものが、支那文明の支配者となり、遂に支那文明といふものをして、甚しく散漫に捕捉に難きものたらしめたのである。

然るに日本の國土に於て、太陽は實に美しい。至崇至麗人をして恍然として、禮拜措かざらしむるものがある。船、渤海灣を發し、山東角を過ぎ、波も黄ろき黃海を經、朝鮮西岸の奇々怪々たる多島海地方を潛り、躑て日本の本國近く進む時、朝に起きて眺れば、東方遙かに水天相接する所、萬里の蒼波に洗はれて、眞紅の太陽神の如く現はれ給ふ。その日神の御座となれる紫濃の島よ。溫乎として玉の如きとや謂はん。支那民族が古く東方海上蓬萊神僊島を想望せるもの、必しも架空の想像ではなくて、其處に夙くも日本島國の實際を望見したるもの、驚異贊嘆して語りつぎ言ひつぎたるもの、遂に一種の傳説化をなしたるものに相違ない。

日本の神話に於て國土凡てを生みませる伊邪那岐の大神は、筑紫の日向の橘の小門の、阿波岐が原に於て、輿祓ひを遊ばして後、貴御子天照大御神をお生みになつたとあるも、日向は其名の示す如く日に向つて、海波最も清らかなる所、其波に洗はれて、美しく鮮らかなる太陽の、煌々として生れ來れる光景を想望せしむるものがある。

後に天孫が、この瑞穂の國に天降りになつて、都をお定めになつた所も、この日向であつて『笠沙

の御前に求ぎ通りて、詔り給はく、此地は朝日の直刺國、夕日の日照國なり、故此地ぞいと吉き地と詔り給ひて、底津岩根に宮柱太しり、高天原に氷椽高しりて坐しき。日の本知ろしめす大君は、朝日のいと美しく、夕日のいと美しき土地をこそ、常に御撰定になるのである。日本の民間傳説等に於ても『朝日さす夕日さす』何々の岡に、黄金千兩朱玉幾箱など、語られて居るのは、この神話に汲むと共に、亦日本民族が、朝日の美しく、夕日の美しき所をこそ、いと吉き地と志す所以を、知ることが出来る。

天照大御神をお祭りする大御社が、伊勢の度會に在すことも、伊勢の海邊より、東方の日の出を迎ふる光景の、最も崇美なるに、關係深いことが思はれる。

日本の國旗日の丸が、萬國の國旗中、群を抜いて崇麗、萬國人を羨望せしめて居ることは、曾て英國が買受けを申込んだ等の傳へに徴しても、明かである。今度の南洋の戦ひに於ても、スンダ列島のフロレンス島民は、日本軍の日の旗を立て、進軍し來るを見て、日本軍はマタ、ハリ（太陽）だと、崇めたと報せられて居る。神代の昔を想はせるやうな光景が浮ぶ。

初春の頃に於ける、首都東京の朝日の如き、何とそれは崇麗極まるものであるか。大きな眞赤なまん丸な旭日が、燃ゆる許りの鮮らかさを以て、大首都の上に現れ來る時、初見の人は全く何もの、光景かと驚駭する。正に生きた大日の丸とでもいふべきか。日の丸國旗の制定は、近世の事といふも、

日の丸そのものを以て、日本民族の崇仰の中心とした事は、蓋し極めて久しいものに相違ない。平家に與市宗高が扇を射る時、日の丸は恐れありとて、要際かたみきはを志したなどあるも、以て其一端を徴するこ  
とが出来ぬ。

### 富士が嶺を朝光

富士の山は、日本國土中の最高最美なるものとして、日本國土を代表する。其の八面玲瓏として端正秀麗なることは、多く他國にも見得ざるものであるが、日本の歌人は、此山を『天地の分れし時ゆ神さびて高く尊き、駿河なる富士の高嶺を、天の原ふりさけ見れば、渡る日の影も隠ひ、照る月の光りも見えず、白雲もい行き憚り、時じくぞ雪はふりける。語りつぎ言ひつぎ行かむ、富士の高嶺は。』と歌つたが、この歌は世界の山を歌つた多くの詩歌の中でも、最も優秀なものである。此歌の神采は『照る月の光りも見えず、白雲もい行き憚り』の二句にあつて、それは實景である。白雪の皎々たる峰頭は、其近くに出で居る月も、光りを耻らふ程であり、麓に蓬勃として白雲は蒸すも、中腹に繚繞して、其神聖なる頂上に上ることを憚り居るが如く見える。それを此二句に現はしたことは、實に秀れた手腕である。併し『渡る日の影も隠るひ』は、照る月の對句たらしめんが爲めの假設で、實景とは大に反して居り、これが此歌の一大瑕疵を爲して居る。富士の最上の美觀は、其旭日と相映發す

る所に在る。明治天皇の御製に『ひむがしの海よりいでてふじのねの雪にてりそふ朝日かけかな』とお詠みになつたことは、富士の神靈茲に突々として躍るを覺えてまことに尊い。白雪の富士の朝日に照らさるゝ光景は、日本國土美中の秀絶なるものに屬するが、其光景を最も詳密に寫したるものとして、近時の文士たる徳富蘆花の傑作がある。

『唯一抹、薔薇色の光あり、富士の嶺を距る杖許りにして、横に棚引く。寒を忍びて暫く立ち見よ君はその薔薇色の光の一秒々々富士の嶺に向つて這ひ下るを認むべし。丈、五尺、三尺、尺、而して寸、富士は今睡なだより醒めんとするなり。今醒めぬ。見よ、嶺の東の一角、薔薇色になりしを。請ふ瞬かずして見よ。今富士の嶺にかゝりし紅霞は、見るが中に富士の曉あけぼの闇を追ひ下し行くなり。一分一二分一肩一胸。見よ、天邊に立つ珊瑚の富士を。桃色に勾ふ雪の膚、山は透き徹らんとすなり。富士は薄紅に醒めぬ。請ふ眼を下に移せ。紅霞は已に最も北なる大山の頭にかゝりぬ。早や足柄に及びぬ箱根に移りぬ。見よ闇を追ひ行く曙の足の早さを。紅追ひ藍奔つて、伊豆の連山、既に桃色に染まりぬ。紅なる曙の足、伊豆山脈の南端天城山を越ゆる時は、請ふ眼を回へして富士の下を望め、紫匂ふ江の島のあたりに、忽然として二三の金帆の閃くを見ん。海既に醒めたるなり。』記者も曾て『紫を麓に脱ぎてうす緑り富士は目覺めぬ起きて見よ君。』と試みたことがあるが、歌はまだ成らねど、黎明の光りを浴びて獨り蒼空に眼覺めたる富士の光景は忘れぬものである。夕陽の富士も亦美しい。これ

を歌つたものに今關天彭の詩がある。『殘陽在西崦。片月光未生。孤雲如拖帶。萬葉向風鳴。蓮峰何秀麗。五彩煥相呈。忽見黃金闕。變作白玉京。飛仙呼欲答。神女笑或迎。杳杳天籟起。蒼蒼暮色盈。躑躅長松下。依依遺世情。』

越中の立山は又山の最も美しい一つであつて、畏くも今上天皇東宮に在した時の御詠進の御詠に『立山の空に聳ゆる雄々しきならへとぞ思ふ御代の姿も。』と仰せあり、この御詠は立山山頭の巖石に彫られて居るが、まことに御代の姿にもと仰せた程の、雄々しく凛々しい山である。大伴家持卿此國に守たりし時、此山を詠じて『神ながらならし』と頌へたが、其長歌は『天放る鄙に名懸り、越の中國内盡、山はしも繁にあれども、川はしも多に逝けども、皇神の領座ぎ坐す、新ひ河のその立山に常夏に雪降り敷きて、帯にせる可多加比河の、清き瀬に朝夕毎に、立つ霧の思ひ過ぎめや、あり通ひ彌年の毎に、外所のみも振放け見つゝ、萬代の語らひ草と、未だ見ぬ人にも告げむ、音のみも名のみも聞きて、羨しふる爲』とあるが、記者は今年の初春、この立山の巍嶷嵒嶒百千の稜角を重ねて、一大白花の如きが上に、陽光の東方より半ば逆光線的に照す其美を見て、實に嗟嘆之を久しうした。

朝日を浴びて最も奇觀なるものに、又中央山脈がある。信濃に古く西嶽と呼び、一時日本アルプスとして歌はれた大山脈である。其山脈の初春の頃の朝光美、太陽は未だ地平線下遙に低くして、平地には其面影をも見せぬ頃、西方の銀嶺は、早くも眞紅に輝いて居る。その眞紅の美しさあざらかさ。

燃ゆるなどいふ形容の足る所ではない、振ひつくやうなその紅。それが澄み渡つた蒼空の何十里に渡つて、天上の大紅花として咲き榮えた其崇麗、其壯美、全く形容の言葉もない。

而もこれ富嶽、これ立山、これ西嶽等のみではない。これ等は實に大和島根といふものが、東海上鮮かなる朝陽に照らされて、その美し國土を形成する、二三代表たるものに過ぎぬ。國土上のあらゆる一切この陽光裡に、其麗美を百千倍せぬ何物かあろう。

### 日本は四季皆美

日本國土の美は、その山緑りに花紅るに、色彩豊富な島が、大洋の蒼波清らかなる上に横はつて、山と水と互に相得た所にある。山の美は既に其大要を記した如くであるが、海に至つては變化最も多く、其美も千態萬狀である。富士を歌つた山邊赤人は、又海を次のやうに歌つて居る。

『海神は靈しきものか、淡路島中に立て置きて、白浪を四國に回ほし、座待月明石の門ゆは、夕ざれば潮を満たしめ、明けされば潮を干しむ。鹽騒の浪を恐こみ、淡路島磯隠り居て、何時しかも此の夜明けむと、侍ふに寝の寐がてねば、瀧の上の淺野の雉、明けぬとし立ち動むらし、いざ兒等敢へて傍き出む、海上も静けし。』

海の變化の一端を現して居る。安貴王は『いせの海沖つ白浪花にもがつゝみて妹が家裏にせむ』と

まことに滄海上花の如き白波の美を好く現はして居る。益人の『庵原の清見が崎の三保のうらのゆたに見えつゝ物おもひもなし。』などのどかなる海の美しさに、凡べての物思ひも消ゆる心地をよく歌つて居る。湖水には『逢坂を打出てみれば近江の海白ゆふ花になみ立ちわたる。』(讀人不知)。『藤なみのかけなす海の底清みしつく石をし玉とぞ我見る。』(家持) 河には『むかし見し象の小河を今見ればいよよさやけくなりけるかも。』(旅人) 『大君のみかさの山の帯にせる細谷川のおとのさやけき。』(讀人不知) など、音まで澄み渡る。併し海も矢張り朝日の海が最も美しい。それは前に書いた如くであるが、人麿の名歌といふ『ほのほのと明石の浦の朝霧に島がくれ行、船をしぞ思ふ。』も、ほのほのは朝光の今現れんとする前の空の動きである。守部王の『兒等しあらば二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の曉の聲。』曉の海邊の鶴の聲は如何に美しいであらう。二人聞かむその御心は更に美しい。

山も水も皆美しい日本は、四季の光景皆美しい。四時常春といふやうな言葉もあるが、布哇のやうに、四時似た春景色は、矢張り人をして倦怠せしむる。變らぬものは、千代に變らぬを要するが、氣候や風色などは矢張り、兼好のいふやうに、『折節の移り變るこそ物ごとに哀れ』であらう。日本の春夏秋冬は各適度の變化で、窮りなき美しさを見せて居る。批評眼の優れた清少納言の筆が、矢張り好い。『春はあけほの。やう／＼しろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫立ちたる雲の、細くたなびきたる。夏は夜。月の比はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをか。秋は夕

ぐれ。夕日はなやかにさして、山の端のいと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど、とびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをか。日入り果て、風の音蟲の音など、いと哀れなり。冬は雪の降りたるは、はたいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいとさむきに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつき／＼し。これは京都邊の山水を主として、婦人のやさしき眼にての觀察であるから、その崇嚴雄大な所は記されて居ないが、併し日本特有の優美性をば、よく現はして居る。天智天皇内大臣藤原朝臣に詔して、春山萬花の艶と、秋山千葉の彩と、いづれか好きとて、歌もて判ぜしめ給へる時、額田王は『冬隠り春さり來れば、鳴かざりし鳥も來鳴きぬ。咲かざりし花も咲けれど、山を茂み入りても聽かず、草深み取りても見ず。秋山の木の葉を見ては、黄葉をば取りてぞ偲ぶ、青きをば置きてぞ歎く、其處し樂し、秋山吾は。』と、王は秋葉の方に賛成されたが、併しこれは人によつていろ／＼であらう。秋山の下水壯夫と春山の霞壯夫の二神が、伊豆志袁登女の神を争つた時は、母が霞男に與して、其與へた衣服弓矢が、悉く藤の花となつたので、女神は其花に恍れて居つた時に、霞男は之と婚ひして、乃ち霞男の勝になり、下水壯夫は其時約束せる賭物を出さず、咀はれて八年の間萎み病枯れたとある此方の傳説では、春が勝つて、秋が負けて居る。要するにいづれが好きと争ふ中には、いづれも劣らぬ特色を持つて居ることを示して居るのである。實際花の春山も好ければ、紅葉の秋山も好い。いな



春秋のみではない。若葉の若き色々相競ふ初夏の山などは、春秋以上にも好い。銀嶺に金光の輝く冬の山に至つては、麗美以上に神嚴をさへ感ずる。四時共に各其特徴あつて、容易に甲乙し難きものは日本の國土美である。

されば藤原宮御井の歌には、『大和の青香具山は、日の經の大御門に、青山と繁茂さび立てり。畝火の此瑞山は、日の緯の大御門に、瑞山と山さび座す。耳梨の青清山は、背面の大御門に、宜しなべ神さび立てり、名細吉野の山は、影面の大御門上、雲居に遠くありける。高知るや天の御蔭、天知るや日の御影の、水こそは常磐にあらめ、御井の清水。』(作者未詳)と歌つたが、青山並び立ちて、春の花の紅葉、四時其美を呈して已まざるものを賛へ奉つて居る。大伴家持卿は奈良の都を『炎の春にしなければ、春日山三笠の野邊、櫻花木の蔭隠り、貌鳥は間なく數鳴く、露霜の秋到り來れば、射鉤山飛火が嶽に、萩の枝を繁擲み散らし、さ牡鹿は妻呼び響め、山見れば山も見が欲し、里見れば里も住み好し。』又久邇の京をば『高知らす布當の宮は、河近み瀬の戸ぞ清き、山近み鳥が音響む、秋來れば山も動響に、さ牡鹿は妻呼び響め、春來れば岡邊も繁に、巖には花咲き撓り。』と讃へたが、大和地方のみではない。日本國土の多くの場所は、實に四時共に佳景ならざるはないのである。

### 春に於る美しさ

日本の國土は四季共に美しいが、就中春は最も楽しい時季である。日本の春ぐらゐる好ましき光景の國土は世界に乏しい。日本の春の特徴は霞にある。『春霞立るを見れば新玉の年は山より越ゆるなりけり。』(道祖王)春は霞に乗つて來る。いな霞は直に春だ。霞こそ主なる春の製造家であり、同時に日本風景の特色の製造家である。日本は廣い洋上の島國であり、其上暖流の近く寄せ、印度よりの南風の到る關係等で、水蒸氣が甚だ多量であり、時節が段々太陽に近づいて來ると、そこに淡々として心地好き霞といふものが醸される。これが柔かに山河の間に纏つて、風景といふものを極めて和やかに又奥床しくする。これは大陸や其他の乾燥地方には、一寸見られぬ風情で、人に譬へて言へば、非常に情愛の深い人に接するやうな氣分である。如何に知慧あり力ある人でも、情愛に缺乏して居れば、其人尊ぶべく畏るべきを見ても、親しむべきをば覺えぬのであるが、情愛ある人は、何となく引つけられて、去り難い氣持がする。霞の籠めた日本の風景は、丁度そのやうな心持である。始終こゝろ風景に接して居る日本人は、其性格上にも、餘程影響を與へられるであらうし、従つて日本の思想の上にも、其影響は少くないものが看取せられる。昔の國學者達のいふ日本文學上の『あはれ』といふやうな氣分は、恐くこの日本人の特別の深い情愛、又はこれを根として出發する或ものであらうと思ふ。其霞が春に於て、最も顯著にして美的である所から、春は日本の特色の最も濃厚なる時季である『時は今春になりぬとみ雪降る遠き山邊に霞たなびく。』(武良自)冬勢の退いて高山の頂などに立籠

つて居るに對しても、霞軍は柔かに押寄せて、何時しか之を我が春王の、徳化の中に言向けて了ふ。  
『あま雲もいゆきはばかる富士の根を蔽ふは春の霞なりけり。』明治天皇の御詠は、まことにこの霞の特性を最高最大に御頌へになつて居る。

霞はそれ自身が、陽光の水分に對しての醸造物であるが、その霞に朝の紅るがうすらかに映じた時が霞の最上の美を發揮する時で、『冬過ぎて春立ちぬらし朝日さす春日の山に霞たなびく。』は、蓋し其最上の美を稱したものであらう。

其他春風春雨、春のものは皆好い。『わがせこが衣はる雨ふるごとに野邊の緑りぞ色優りける。』（貫之）春緑を養ひ、又春紅を養ふものは春雨である。そのしとく／＼と柔かに降る夜など、まことに春の女神の情愛深さを思はしめる。春風は花開を助ける。『霞立つ春の山邊は遠けれど吹き來る風は花の香ぞする。』（元方）

春の女神が生み出す春の主たるものは花である。若菜の青が、雪間に萌え、柳の緑りが川邊に著くなつても、それは春の序曲で、また本物とは云へぬ。本物は花である。日本の春を魁けるものは梅の花である。『春されば先づ咲く宿の梅の花獨り見つゝや春日くらさむ。』（讀人不知）梅花は清くして高人の如く、清香極めて馥郁たりと雖も、一寸馴れ難い所がある。次で咲く桃や杏のうす紅るが、農家の田園を美化し、花の姿も香りも、最も人に親み易さを覚えしめる。『春の園くれなるにはほふ桃の花下照る道に出て立てる妹。』（讀人不知）如何にも村娘等の友である。

日本の最も特色的な花は、何といつても櫻である。霞の精が凝つて、此花となつたかとはばかり、野も山も紅るに匂ふ。『櫻花咲きにけらしもあし引の山の甲斐より見ゆるしら雲。』（貫之）空はのどかに霞み、里にも山にも花は咲き盛る。此時日本の國土は樂土である。『敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花。』宣長の詠は、實によく日本的なるものを表現して居る。頼山陽が今様『花より明るるみ吉野の、春の曙見渡せば、唐土人も高麗人も、大和心になりぬべし。』も此意を歌つたもの。櫻の最も美しさを發揮するはその能く陽光を浴びて、満身の色彩を輝かすからである。『いづる日の光もそひて山ざくらまばゆく見ゆる花の色かな。』明治天皇の御詠は、まことに之が特色をお盡しになつて居る。

春に殿し夏に接して、躑躅、欵冬、藤の花等がある。躑躅の燃ゆる許りの紅をもて、緑の山野の間に點々飾りを施せること、日本の國土を如何に美化しつゝあるか。川邊には山吹、黄色く咲き、懸崖などに、藤の花の、紫が長く垂れて居るなど、春の女神の意匠は、至らぬ隈もない。『わきも子が紅染の色と見てなつさはれぬる岩つゝじかな。』（義孝）『かはづなく神なび川に影みえて今やさくらむ山吹の花。』（厚見王）『水底の色さへ深き松が枝に千とせをかけて咲ける藤波。』（讀人不知）

日本に在つては春といへば、野にも山にも花咲き充つるものと思ふのであるが、大陸などの花至つて乏しき地方から來て見れば、日本は餘りに花の多くして、足踏むも勿體なきを思はしめる。草花を

いへば、何よりも蘭がある。これは古く支那の文人などにも、幽谷の馨蘭として、推稱されて居るが日本の山にも美しく香ばしいものが多い。松林の奥などに分入りて、蘭の花を見出た時の心持は、斯る山奥に、かゝる花の潜むよと、涙も落ちぬべく懐かしい。野邊に咲く、ちごの花など、之を摘んだ子供心は、一生も忘れぬであらう。堇すみれ、たんぽぽなどは、道の邊に撒き散らされて居る。たんぽぽの黄金のやうな花が、春の光豊かに浴みし居る時、田の畔などに腰打かけて、雲雀の聲など聞けば、誰か眞に美し國土のありがたさを思はぬがあらう。

其他多く名も知られぬ草花などに、棄て難い趣のものが少くない。日本にては一般にむだ草などとして、氣にもとめぬのであるが、この國のむだ草にして、外つ國にては、あつばれ庭上の栽植として花賣りの賣りに來るなどもある。それほどにも日本は花に恵まれて居る。『むだ草といはるゝ花にすてがたきおもむきありて名をぞ調ぶる。』

春の花に連れ立ちて、春の樂を奏するいろ／＼の樂手がある。鶯は其第一である。第一の花たる梅につきものとして、古く稱せられて居るが、鶯の聲は如何にも、のどやかに朗らかに、人の心を浮立たせる。『鶯の谷より出づるこゑなくば春くることを誰か知らまし。』(讀人不知)『梅の花さける岡邊に家居ればともしくもあらず鶯の聲。』(讀人不知)秋空かけて鳴く雁は、其聲春には應はずとや、春は北に歸るが、これと入れ違ひに燕が來る。この鳥は遠來のお客様なれど、人家に馴れて、人の家な

ど近くに巢を作る。しなかやな羽をすい／＼と飛ぶ風情が愛らしく、春らしくもある。春の山深くぼろ／＼と山鳩の鳴くは、子と呼ぶそれかとも聞える。深山に閑古鳥などの鳴くも一種の感じである。里のものとして、又雲雀がある。空高く上つては、透き通る聲に轉づる。『春深き野邊の霞の下風にふかれて上るゆふひばりかな。』(信定)夕陽に影の見えぬ程高く上つたなども好いが『片岡の霞もふかき木がくれに朝日まつ間のひばり鳴くなり。』(女房)が好い。雉子の高き聲にて、山野などにけんけんとして鳴くのは、妻呼ぶ聲として興がられる。『春の野にあさるきしの妻戀ひにおのがあたりを人に知れつゝ。』(家持)清き川水には河鹿鳴き、里の田の輪には蛙鳴く。

斯る美しの天地を棲家として、農家は畝作り種蒔き、田を耕し水入れて苗代を作る。『足引の山の櫻の花みてぞをちかた人は種を蒔きける。』(齋藤内侍)

## 夏時に於る其美

花散つて青葉となり、春過ぎて夏來る。『春過ぎて夏來るらし白妙の衣さらせり天の香具山。』(持統天皇)うす青、うす黄、うす樺、いろ／＼の若葉は、白きうぶ毛を帯びて、つや／＼しく、相寄つて一種の錦を織つて居る。花に比して又劣らぬ眺めである。殊に氣候はすが／＼しくなつて、人も亦衣更へする。『夏山の緑の木々を吹かへし夕立つ風の袖ぞ涼しき。』(兼季)遅櫻、藤、牡丹其他夏の初め

に残る花も数々あるが、夏の主なる花は卯の花である。暑くなる頃、雪を思はせて白く咲く所に、涼しさがある。『時わかすふれる雪かと見るまでに垣根もたわに咲ける卯花。』(讀人不知) 陰歴の五月、新の六月ともなれば、貿易風の關係にて、長雨の來ることが多い。所謂さみだれである。卯の花の頃に降るとて、卯の花くだし降る雨などいふ。長雨のうるさけれど、これが又凡ての植物を長成させる水分のありがたさでもある。雨に濡れながらも、早苗を取つて田に移植を急ぐ。『五月雨に日も暮れぬめり道遠み山田の早苗とりも果てぬに。』(隆資)

夏の清香は花橋にある。『さ月まつ花橋の香をかけば昔の人の袖の香ぞする。』(讀人不知) 百合も種々あつて美しい。山百合は殊に床しいものがある。『道のべの草深ゆりの花笑みに笑まし、からに妻といふべし。』(讀人不知) 朝顔は秋の七草の中に數へられるが、家庭にて作るものは夏の朝に其涼しく鮮かなる花瓣が、夙起を促す。明治天皇の夏の曉の月を詠じ給へる御製に『あさがほの花の色なる大空にのこるもすしありあけの月。』と仰せたるは、如何に尊いか。夕顔は夕暮れ農家の垣根などに白く咲いた風情愛すべきものがある。『白露の情おきける言の葉やほのくみえし夕顔の花。』(太政大臣) よりも、『楽しみは夕顔棚の下涼み男はてゝら女は二布して。』の一休の狂歌が此花と農家の親しみを、よく表現して居る。夏は樹木の花は少いが草花は却て夏に多い。唯夏は陽光が劇しいので、露草の朝早く、夕顔の夜に入つてなど、涼しさを逐ふが少なからぬ。

朝の清きものに又野茨がある。荆棘あつて親しみ難いが、其花の清く好ましき馨香を放つに至つては、世に何ものも之に比ひ得べきはない。山里の道の邊や、野原などに、此花の咲くに逢へば、花橋などの何層倍も、昔の人の戀しく思はれる。『朝日子に献けまつらむ清き香ぞ人の子觸れなど野茨は刺持つ。』とや、歌ふべき。

其他胡瓜、南瓜、豌豆、さけ等所謂野菜物の類は、多く夏に其花を咲く。花そのもの必しも美しくはないが、其結實を待つ心と共に、花達も如何に親み深いであらう。所謂花も實もあるものは茲にある。

春の歌ひ手ののどやかなるに比して、夏の歌ひ手は大に變つた慷慨悲歌の士である。烈帛一聲といふ杜鵑こそは、夏の主なる鳥である。月明かなる夕、實に衆愚の迷妄を打破するやうな聲もて叫ぶ。人間のこんな聲など皆忌々しがつて叱々と怒鳴らん都人なども、此聲をば極めて珍重して、待詫びるから可笑い。『子規曉、かたの一聲はうき世の中をすくすなりけり。』(讀人不知) 下句がまだ物足りない。うき世の夢を打裂くとやいふべき。蟬のじんくんと樹木に喰入るやうに鳴くのも、かしましいとはいふものゝ、あの綠葉繁茂の樹林が默然として居たら、如何に寂しいであらうか。旺んなる夏の生氣こそは、蟬を生んだと見るべきである。螢の夜を光つて飛ぶ。如何に夏の夜を生かすべく、神の奇妙の意匠ぞや。

## 秋冬各自の特色

『わがせこが衣の裾をふきかへしうらめづらしき秋の初風。』(読人不知) 秋風起つて炎熱を拂ひ去れば、田野勞働の男女も氣持好くなるが、『とことはにふく夕暮の風なれど秋立つ日こそ涼しかりけれ。』(公實) 深く物思ふ側に取つて、一層切實の涼爽を與へる。秋天は何人に取つても好い。額田王ならねど、春秋を比して、秋に與する人々の少くない理由であらう。劉禹錫も『自古逢秋悲寂寥。我言秋日勝春朝。晴空一鶴排雲上。便引詩情到碧霄。』と秋天を贊美して居る。大谷光瑞は其秋色文中に記して曰く『然れども此の如き春秋の差は、唯本邦及支那に於て云ふ論にして、換言せば東亞細亞の範圍のみ。印度東南海岸の如きは、十月より雨季に入る。地中海も亦秋期は雨なり。西部は十月を最多とし、東部は十一月を最多とす。英國海峡の兩側、亦秋季は雨期なり。東亞細亞に於て秋色の清、骨に激するを賞し得るは、亞細亞大陸に、秋季より發達しつゝある、高氣壓の賜にして、此附近のみ天恵に浴せり。』と、さればこのいとも美しく心地好き秋は、日本と支那大陸との特有物である。

秋は草花が殊に美しい。天も霽れ、山野の氣も清い時、花も清らかさを、秋花の特徴とする。『秋の野に咲きたる花を手を折りてかき數ふれば七草の花。』『秋の花尾花葛花などしこの花をみなへし又ふぢばかまあさがほの花。』(憶良) 秋の花は支那にても草冠りに秋と書く萩の花が歌はれる。『秋田から

かり穂のやどりにほふまで咲ける秋萩見れどあかぬかも。』(読人不知) 草村には又さまざまの虫が歌ふ。花に咲きて足らぬ秋の心を、虫は夜毎に歌に調ふるのである。『秋來れば野もせに虫の織りみだる聲のあやをば誰か着るらむ。』(元善) 松虫、鈴虫、蝨、蟋蟀、促織、蟬、けに聲の文をば爲す。山林には又山雀、日雀、四十雀、其他の小鳥達が、更に高き歌聲もて美しいの樂を奏でる。

秋は一天快よく晴れて、山川の眺望甚だ開闊であるが、夜は月の光りが最も清い。春の月は朧ろ、夏の月は涼しいが、秋月の玲瓏に至つて、月の美は極まる。『わが宿を照みつ秋の月影は長き夜見れどあかずぞありける。』(伊勢) 春去りし雁も鳴いて來る。『白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月。』(讀人不知) 朝に山野にかゝる霧は濃くて、春霞の如くではないが、別な風情がないでもない。『河霧のふもとをこめて立ちぬれば空にぞ秋の山は見えける。』(深養父) 秋の花の清かる中に菊こそは清き限りである。『秋風の吹上にあたる白菊は花あらぬか浪のよするか。』(菅原朝臣) 野邊に咲亂るゝ原始的の野菊に至つては、古への心清く情美しい人達を、今に見る心地がする。野も山もみ空も花も鳥の音も、凡ては秋に於て清らかであるが、秋の大觀は何といつても紅葉である。『九月の白露おびて足曳の山のもみぢん見らくしよしも。』(讀人不知) 紅葉は北支那にもあり、加奈陀東部、印度の高地等にも若干あるが、日本の紅葉を最優とする。槭を第一とし、楓、ヌルデ、榊、ハハソ、櫻、葛其他各種の紅葉最も多種にして、全山全野、紅黃錦繡を爲し、絢爛目を覺ます。『紅葉二月の花より

紅し』の句もあるが、嘗に紅なるのみならんや、其金山全野を紅化する所、春花の一部の雲とまがふ位の比ではない。瑞穂の國の第一國産たる稻も、秋は黄葉黄金の波を湛へ、四山の錦繡に映發して、瑞穂國土の美と豊かさを、並び呈する。此時豊收を感謝しつゝ、稻刈る農家男女の心持や如何に、ははた／＼と風に翻り、太鼓はドン／＼森に鳴つて、樂しき村祭りは諸方に賑ふ。天つ日もなごみて野山の錦を照らし、里の黄金を輝かし、小春日と歌はるれど、又春の知らぬ美しさ清らかさである。『朝づく日つゆにか／＼やく草むらにのこりてもなく蟲のこゑかな。』（明治天皇）

冬は寒くなつて、霜が降り雪が降る。けれど日本の冬などは、未だありがたい。西比利亚の氷に鎖す所などに比べては、『雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける。』（貫之）などとも眺めて居られる。四方の山の眞白になつた景色は、秋の錦とは又こと變つて、山々皆神衣を着る如くである。富士の高根も、立山白山西嶽の山々も、雪なくば其崇麗を歌ひ得べき。されば冬の雪こそ、最崇最麗の花とは稱すべきである。

人目も草も枯るとはいふも、併し眼をとめて見れば、冬山の枯柴の、黄とも褐ともつかぬ色に、何とも言ひ知らぬ幽玄の味ひを存することを、見る人は見るであらう。冬裡亦花がないでもない。菊は寒中にも咲く。『けさ見ればさながら霜をいたゞきて翁さび行く白菊の花。』（もととし）梅も早きは雪裡に咲く。『けふ降りし雪にさほひてわがやどの冬木の梅は花咲きにけり。』（家持）鳥は殊に千鳥、濱

邊に群遊ぶ。『あふみの海夕なみ千鳥ながなければ心もしぬに古へおもほゆ。』（人麿）鶯せどり『妹にこひいねぬ朝けにをし鳥のこゆ飛わたるいもがつかひか。』（讀人不知）などは愛らしい。

其冬も天つ日影のあつて、之を美化することは、大いなる雪嶺のみではない。『冬がれの芝生の董さきにけり小春の日影さしわたりつゝ。』明治天皇の御製、大いなる仁慈の如何ならむ蔭にまで及ぶ大御心の程思はれて、尊く畏い限りである。

## 第二章 人類の地球喰荒し

### 開落慌しき國家

人類といふものが、この地球上に出現してから、幾くの星霜が飛んだかといふことは、學者に種々の研究があつて、容易に一定はせぬが、凡そ二三十萬年の過去に於て、既に地球上には、人類の先驅種族と認むべき、高等生類の存在を證し得るといふので、其等に種々の名稱を與へて居る。段々進化して、今から四萬年の過去になると、其處にはもう現在の人類と同種族の、即ち原人とも稱すべきものゝ活動を證明し得るといふ。けれどもそれが猶進んで、或種の聚團生活、即ち早期の文明生活とも

稱すべき生活を爲した其痕跡としては、今日まで發掘せられた分では、アナウといふ古都市を以て、最古のものとする。アナウといふのは、中央亞細亞の地、裏海の東に當るトルコマンの地方で、トランスカスピアン鐵道の都邑アスカツバト附近の所であるが、其地下に存在する古都市の遺跡は、今から一萬二千年前の建設に係るものと鑑定されて居る。米國人の如きは、もつと古い人類の生活根據即ち原人の所在をも突留めやうと、支那の北方戈壁沙漠の邊に、見當を附け、幾度か大規模の探検隊を派し、之が探索に従事せしめて居るが、恐龍の骨などは、頻りに採掘したが、まだ人類のそれについては、得る所がない。兎に角人類は今から一萬年の遠き昔に於て、もう相當の文明生活を初めて居たものである。それから人類は段々各所に亘つて、文明生活を發展させて居る。それが一元的の或根本から出て、諸方に分派したか、或は各所でそれ／＼の發達をしたか、又其最古の發達地方が、何處であつたか等についても、學者の説は區々であるが、或はユーフレイト、チグリス河邊に於けるメーソポタミア、バビロン等の文明、或はナイル河畔に於ける埃及の文明、或は兩者をつなぐバレスチナの文明、或は歐羅巴地方の文明、或はガンヂス河邊印度の文明、或は黃河流域に發達した支那の文明、其他いづれも四五千年の古代に溯つて、人類が地球上に、いろ／＼の早期文明の花を咲かせたことが推定されて居る。而して是等人類の夜明時期に於て、雲霧茫漠の中に開發された紅黃白紫様々の花どもの中にもそれ等を一貫して、嚴然として行はれた一つの事實は、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のそれであ

つて、盛んなるものゝ衰へ、興れるものゝ亡ぶるといふことは、生者必滅の原則にも近く行はれたこととて、其處に永遠不滅の生命を持續した文明と其生活者とは、一つも存せぬ。

段々人類の夜が明けて、所謂有史以後の四境明白となれば、其開落の慌しさも、概方記されて居る即ちスメール、バビロンの後を受けて、初めて諸國を併呑して、一帝王の下に統一したといふアツシリアの帝國も、西曆紀元前六〇六年に亡び、其壽命は六百餘年に過ぎなかつた。續いて起つたバビロニアは、七十年に足らずして滅び、之に代つて起つた波斯の大帝國、整備せる陸海軍を以て、雄を一時に稱したるも、二百二十年にして亡び、歐羅巴文明の源泉として、長き崇拜を受けた希臘も、アテナ、スパルタ様々の榮枯を経て、マケドニア蠻族の併合に歸し、其王アレキサンドルは、稀世の英傑として、東西を征服し、大版圖を擴張せるも、大王死後は四分五裂し、希臘の國家的命脈としては、百六十餘年を數ふるのみ。世界最古の文明を唱ふる埃及は、有史以前の命脈は不明なるも、紀元前六七〇年に亡びて居る。全世界統一を理想として、雄威を西天に輝かした羅馬の大帝國も、共和帝政相起倒して、前後一千百四十八年、東西に二分し、西は八十年にして亡び、東は猶一千五十八年を持續せるも、大部分は空名のみ。回教の教主マホメットが、劍とコーランにて開いたサラセンの帝國も、一三三三年にして東西兩分し、東は五百三年にして亡び、西も更に二百年足らずして四分五裂となつた。羅馬法王の手もて王冠を被らせた神聖羅馬帝國、其八百三十八年、これが先驅のフランク王國は

三百八十四年、今の佛蘭西はそれの一分派である。獨逸は即ち神聖羅馬帝國の後の一分派である。印度の最古は措いて、其有名な阿育王の統一國は、王の一世三十數年を出でず、後茲に大帝國を建てたムガルも三百二十二年で英國の奪ふ所となつた。東方大陸に於ける支那は、一見して永續の大國の如くであるが、其實は幾多王朝の起滅で、其夏は約四百四十年、殷は三百八十年、周は八百六十四年、漢は東西兩漢合せて四百年、唐は二百八十九年、宋は二百九十七年、元は九十二年、明は二百七十六年、清は二百六十八年に過ぎず。其他地球上大小の諸國、忽ち起り、忽ち滅びたる様は、全く鴨の長朋の『流れに浮ぶ泡沫うたかたの、且つ消え且つ結びて、消えを争ふに異らず。』我等の眼前にさへ、帝國獨逸は謝し、同じき帝國露西亞は消えた、前者はカイゼルの一統四十七年にして跌き、後者はロマノフの帝統、三百年にして竭きた。ヒットラーの獨逸又大に興り、共産の露西亞別天地を作つたが、外殼は似たるも、生命は共に新たである。佛蘭西の如き、或は帝國となり、或は共和となり、一系の國と異り、英吉利の如き、比較的長年月を持續した如くであるが、其間數朝の變化あり、時に共和國となつたこともあり、今や最も滅亡の危機に瀕して居る。亞米利加の如きは、最新の國、其前途は誰か之を知らう。

唯茲に一つの帝國日本のみが、上は悠久の神代より續いて、今日に至るまで數千年、神武天皇大に都を大和に奠められてからも、今年に至つて二千六百二年の長歲月を、萬世一系變らぬ皇統の下に、

渝らぬ獨立國として存續し、而も益々時を経て、益々其勢力を増進して居る。全くの地球上存在の特殊の國家を示して居る。

## 地上の國土荒廢

日本を除く多くの國家が、泡沫の消えを争ふのみならず、その國家等の地盤となつた國土そのもの、盛衰を見ても、有爲轉變の甚しき、更に人をして悲哀の情に堪へざらしむるものがある。『已に聞く松柏の摧けて薪となるを、又見る桑田の變じて海となるを。』と支那の詩人は歌ひ、日本の歌人は『世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる』と歌つたが、それ位の程度ではない。

前記發掘のアナウ古都市の如き、これは裏海の東方三百哩の地であるが、地圖を見ると、此トルコマン地方は例の點々を以て表示された廣漠な沙漠地である。南方にはヒマラヤ山脈に續くヒンズーグシュ山脈、裏海の南に亘るエルブールス山脈等、世界を南北に劃る大山脈があつて、其直ぐ北方が大沙漠地帯を爲して居るが、カラカルバス沙漠と名づけられて居る。アナウは其沙漠中の一オアシスを爲せる場所で、其處の土中に、一萬二千年近き古都市と鑑定さるゝものが、發見されたのであるが當時は樹木も繁茂して、人間の棲息に良好なる土地であつたことが、想像せられて居る。其更に東方メルブ綠地のギアウル、カラルにも多數の古跡があり、數千年の舊き時代に溯る人間棲息を語つて居



る。アナウの如きは既に頗る發達した聚團で、様々の道具などを製造して居たのであるが、阿米利加人の更に舊き原人の遺跡を發見せんものとあせれる戈壁の沙漠の如きも、今は濛々たる萬丈紅塵の製造所であるが、これも極めて夙き時代は、碧波漾々の大湖水であつたと覺しく、之を古く乾海と稱へ又昔時は海であつたと傳へても居る。其等の深き土中から、何萬年の古き人間棲息の根拠が出現せぬとは限らぬのである。黄河の堆積土中からさへも、宋時代の一都市が前年掘出された等に徴しても、支那の北方荒地などの下に、何もの、埋在するかは、想像以上のものがあらうと思ふ。

人類の最も優れた文明を、早期に發達せしめた搖籃として知られてゐるユーフレート、チグリス兩河の邊の如き、昔時は極めて豊饒の沃野であつて、産業は盛んに興り、都市は到る處に榮え、實に人類の古き樂土であつたのである。二千三百年の前に於てヘロドトスは、『其地穀物の生産多きこと、吾人の知れる何れの地にも優れり。小麦畑は二毛作三毛作を爲し得べく、一粒の種子は、平均二百粒、最高三百粒の結實を生ず。麥の葉の大いなること、四指を竝へたる廣さ程なるが稀れならず。稷と胡麻とが、如何に高く成育するかは、寧ろこれを記さざるに如かず。』と云つて居るのにも見ても、其一斑を窺ふことが出来る。然るに其地は何時しか荒廢し、古へ曾て豪者を極めた幾多の都市は沙漠風塵の中に没し、今は唯考古の學者等が、其落寞たる丘陵上に立つて、古へのエデンの園を回顧し、其斷片廢瓦を求めて、其刻せる楔形文字にスマール、ハビロンの文化を読み取らんと努むるに過ぎぬ

状態とはなつたのである。

兩河邊から東してイラン高原地方の如き、今はルトの沙漠、大鹹沙漠、其他アフガニスタン南部は一面沙漠で、沙漠外も多く荒地となつて居るのであるが、其處にはユーフレート、チグリス河邊と同じき、或は更に古き人類の棲息地があつて、ルト沙漠の南邊や、アフガニスタン國境等に於て、多くの古代都市の遺跡を存して居る。何れも遠き過去に於る綠樹青草、人類生活の好適地であつたことを示して居るのである。目を西に轉じて更にアラビヤを見れば、これは全半島殆ど一大沙漠となつて居るが、これも曾て或時代には、綠樹清泉の地ではなかつたかと推測されて居る。それは沙漠の各所に、今も長大なる川筋の痕跡を止め、今は水なき長谿谷の觀を爲せども、明かに往昔の河床たるものにして、時として多少の水分の下底に潜むものすらもある。地理學上其活動時代を肯定するに足る事。又沙漠縁邊の荒地中には、過去の繁榮を語る多數の遺跡が、點在して居る事、其他各種の理由から、學者の中にはアナウの其れなどに比して、一層古き人類の生活根拠が、曾てはこの亞刺比亞の半島に存し、後に其等が東はメソポタミアに入つて、アッシリアを興し、北はシリアに於て、アモリットの文化を開き、アフリカに入つては、エチオピア人となつたものではないかと想像して居る。

印度の如きも、西方インダス河の東部には、タールの大いなる沙漠があるが、此邊も往昔は人間棲息の繁榮地ではなかつたと思はれる。ガンヂスの廣大なる流域の如きは、今日猶ほ穰々の沃野である

が、而もこれとて古代と其趣を異にしたるべきは、今日樹木極めて少く、薪木を缺乏し、印度人は牛糞を乾燥して之に充て居る状態である。

其他一々に記すに堪へないが、地球上の人類生活に於て、其團聚的統治たる國家の絶えず盛衰起滅を繰返へせるのは生物なまものとして已むなしとするも、國土そのものが、段々に其地力を失つて、荒地死地に陥れるもの、比々として是れ多きを見て、實に悲哀の情に切ならざるを得ぬのである。

### 荒廢の眞因如何

何故に人類の棲息地が、斯くも次第に荒廢を致すかにつき、從來の學者等は、専ら之を自然不可抗力に歸し、或は地軸變動説、即ち北極が徐々に南方に動き來る爲め、寒地が次第に溫度を増し、其氣候の變化と共に、土地の上に變化が生ずる等の説、或は氣候周期變動説、即ち六百年毎に乾濕の大變化が來り、三十五年毎に小變化が來り、順環交代し、其大旱魃期の襲來に於て、草木の枯死、土地の乾涸等を致し、乃ち荒廢の實を現はすのである等の説、其他種々之を自然力の作用に歸するの説が存する如くであるが、其等諸説にもそれ／＼若干の眞實性は存するであらう。實際地球上に屢々自然の大變動の來たことは、種々の遺跡遺物等の之を證明する所で、私共は一概に是等自然作用説を否定せんとするものではない。併し私共の見解としては、其處に猶一つの大きい原因の存在し、之が主

として地球上の土地荒廢を招來したことを認めねばならぬと思ふ。然るに從來この事が一向に氣づかれなかつた。或は多少は氣づかれても、亦餘りに之を重視するに至らなかつた。大いなる間違は、其處から起つた。

その一大原因とは何ぞや。それは外でもない、人類自身の地球喰荒しといふ事實である。人力の地上に及ぼす影響の如きは自然の大いなる力に比しては、殆ど謂ふに足らぬものである如く考へたら、それは大に違ふ。微々たる人間の力ではあるが、それが段々地球上に繁殖し、後には殆ど地上の凡てを蔽ふほどの状態となつたのであるから、其力や決して易ることは出來ない。野菜等に小さい虫がたかつて、其繁殖と共に之を枯死せしむるは、人々の目前常見る如くである。毛虫の如きものが群を爲して一つの樹木の綠葉を喰盡して、次の樹木に遷移し、忽ちの中に數幹を丸坊主にするには、能くある事柄である。先年の如きは、北信濃の一地方に、毛虫が繁殖して、其處の山林を傷害し、學校の兒童等を總動員して、辛うじて之が退治を爲した實例がある。蝗群が廣大なる田畑を喰荒すの恐ろしき被害の如きは、支那に於ては常に歴史の記録に留められて居る程である。

然らば人類は如何にして、土地を荒廢せしむるかといふに、第一は樹木の伐採である。山を濫伐すれば雨水の急激なる流下と共に氾濫を起し、田畑を押し流す等の、大害を爲すが故に、之を謹まなければならぬことは、今日の科學が明白に立證する所で、詳論を爲すに及ばぬ所であるが、其氾濫等の行

はるゝ間は、未だ可いとして、之が更に一步を進むれば、山は崩れて骨となり、野は枯れて青色を失ひ、土地は乾燥し、水源は涸渇し、河流も石河原となり、遂に一つの大荒地と化した。これは人々の眼前にも、恐くは其小さき事例を引證し得ぬはないと思ふ。信濃の如きは、山林泉流の極めて多い地方であるが、それでも私共の郷里たる東筑摩郡の北部地方に存する聖山といふ山の頂邊に存した大原始林を、明治の十何年頃でもあらうか、悉く之を伐採したる後、川中島地方で、聖の御笠と稱して、降雨來の豫兆とされた其雲は、何時しか姿を消し、又南麓麻績村地方は、水源次第に細まり夏期少しく日照りする時は、飲用水だも缺乏を告ぐるあるに至つた。又松本市近郊の芳川笹賀等の諸村の如き近年灌漑水の缺乏甚しく、處によつては、畑地とすらならず、原野としての地目變換を要求せざるべからず、村民等は生活上大いなる苦痛を感じるに至つたが、之は灌漑川たる奈良井川の上流地方の、木曾森林の伐採に因るもので、遂ひ前年地方有力者の奔走にて、國費補助下に一大瀦水池を建設し、漸く稻田維持の計を爲せる程である。日本の如き好土地、其又中の信濃の如き山川の土地に於てすら、此の如き實例を存するのであるから、況や大陸的の地方に於て、人類が極めて古き時代に於て、其我儘勝手の生活法を敢てせるをや。

狩獵時代に於ては、山川の間を奔驅して、鳥獸を求むるのであるから、未だ左迄山林を荒すには至らなかつたであらう。けれどもそれすら、時としては、山の焼狩り等を敢てしたではないかと思はれる

るものがある。それは後世支那等に於て、諸侯等の遊獵に於て、火獵と稱し一方の山林に放火し、其處の獸類の驚き逃出すを待受けて、之を射殺することによつて、多獲を誇るといふ一種の狩獵法を存したる如き、恐くこれは古き時代からの慣習を傳へたものではないかと思はれるのである。而して其等が廣大な面積に延焼する如き場合も、少くはなかつたであらう。けれども其等はホンの例外であつて、狩獵時代には、猶大した傷害を、林樹には及ぼさなかつたと思はれるが、農耕時代となつては、急激に山林を虐待するに至つた。それは耕作地を開く爲め、林木の大伐採を爲し、伐採の困難と手緩さに、山林の焼拂ひを實行するに至つたからである。これは各地方に行はれ、最近までも我北海道等の開墾に實見せられた所であるが、往古に於て、此焼拂法は最も簡便有効の方法として、盛んに利用せられたる如く、支那の古代に於る炎帝といふ如きは、最もこの焼林式開拓の得意指導者ではなかつたかと、謂はれて居るのである。

同時に進歩せる人類生活に於て、火食を知り、又保温の爲め薪炭といふものが必須の必要物件となつたのであるが、之が爲めにする樹林の伐採も決して少くはない。何れにしても人類が火を發明したといふことは、人類に取つては、大いなる進歩の原動力となつたとしても、一面地球上の樹木に取つては、實に厄介なる災厄を持來したものであつた。

又火によらずとも、人類の生活が段々贅澤となるに連れて、其家屋の建築も巨大となり、殊に豪奢

なる王侯的宮殿の建築は、最も多くの材木を使用し、これが又樹木の伐採を盛んならしめたことは、後世の記録から推しても想像に難くない所である。人間以外の動物に於ては、樹木等とは實に密接の共生生存を爲し、鳥獸は樹木の果實や其綠葉等を食する代りには、其處に糞することによつて、自然に之が肥料を提供し、相寄與して居るのであるが、人間に至つては、勝手に樹木を伐採するのみにて之に與ふることをせず。山林保護植林等の實行は遙かに後世になつてからの事實である。其爲め山野は次第に荒れ、氣候は之に連れて變化し、洪水の氾濫、終りには泉涸地乾といふ死的状态を呈出せしめ、同時に人間其ものも亦其土地に居住する能はず、他の土地を求めて遷移の計を講ずるの已むなきに至つた。牧畜時代に於ては、水草を求めて轉移したと謂はるゝのであるが、農耕の進歩と共に、今度は良地を求めて轉移の必要を生じたのである、但し其轉移を要するの時機は、相當の長年月を経てゝはあるが、併し更に長久なる人類歴史の上からすれば、矢張り頻繁にそれが行はれた。さればドルワル・ド・レゼーは云つた『最も甚しく、伐採の行はれたる國が、最も早く文明に進みたる國なり』と、これが私共の所謂人類の地球喰荒しなるものである。

私共が山野を歩いて、一度開墾した土地の放棄せられ、其跡に草木が生へて、原形を漸く認め得る程になつたものを、能く見ることがあるが、これは傷けられたる大地が、其小さき疵を忽ち癒やしたものゝ如くに受取らるゝが、其廣大な面積を人間が喰荒した痕に至つては、大いなる自然の力もなか

く恢復を爲す能はず、遂に山は赤山秃峰となり、平野は漠々たる沙漠地となつて、地球の痛みを爲し、轟々地を捲く紅塵は地球の悲憤の聲とも思はるゝに至るのである。勿論前述の如く自然力の作用の爲めに、斯くの如き土地の崩壊等を來せるものも、之れあるではあらうが、人間の土地喰荒しは、その自然の破壊作用を一層に促進させ、或は之を誘導せるものが少くないと思ふ。則ち若し樹木が茂り、山川が依然として生力旺盛ならば、自然の破壊作用も、其暴力を逞うすることが出来ぬのであるに、人爲の荒廢有るが爲めに、破壊力は得たり賢しと之に乗じて其暴惡を恣にするのである。例へば旱魃の循環期といふものがあつて、數十年に一回襲來するを事實としても、若し山林鬱茂し、泉源豊富なれば、之に對する土地の抵抗力は強くして、容易に荒廢となるに至らぬであらうに、其之に反して、山川既に衰弱し著しく荒廢状態に近づき居るものに於ては、非常なる炎大旱魃の襲來は、忽ち泉源の涸渴を來し、殘餘の綠地を擧げて之を消滅化せしむること、多く其力を要せぬのである。植物學者ビュフォンが『國土愈々長く居住せらるゝ時は、森林及水源は愈々缺乏す。』といへるもの蓋し眞理といふべきである。故に人間の地球喰荒しといふものが地理荒廢に對する影響の重大性を、決して輕々看過に置くことは出来ぬのである。

試みに世界地圖を取つて、地球の損傷個所を點檢せよ、それは中央亞細亞を中心として、其南北東西に聯なる地方に於て最も甚しい。即ち中央亞細亞には裏海の東にかけてカラカルバスの沙漠があり

アラル海の東にかけてキジルの沙漠があり、其北方にはキルギスの草地あり、其東バルハシ湖南に又沙漠があり、中央亞細亞から所謂バミールの高原を越して、新疆に入れば、タクラマカンの大いなる沙漠あり、其處から遠く東の方興安嶺山脈に至るまでの大面積かけて、戈壁の沙漠は廣がつて居る。又中央亞細亞の沙漠からエルブールの山脈を越して南下すれば、例のイランの高原で、其處は大鹹ルト等幾つかの沙漠を含む荒地であり、更に東アフガニスタンの沙漠地を経て、スリマンの山脈を越れば、印度河の流域で、其東方にはタールの相當大きな沙漠が横はつて居る。西の方ユーフレートチグリス平原の北西には、シリヤの沙漠があり、其處から東南かけて、沙漠の大半島アラビヤが展開して居り、ネプト沙漠、ロバエルハリハ沙漠など、記されて居る。西南斜に細き紅海を隔て、ナイルの東岸、岩山の荒地があり、西岸はリビヤの沙漠があり。世界一の大沙漠サハラとなる。即ち人類の最も夙き文明が起り、最も夙き活動の傳へられた地方程、其荒廢の跡は多く、死的沙漠は多いのである。是れ果して偶然の事實か。地球儀を取つて、徐かに之を検討する時、人類といふものゝ地球喰荒しの驚くべき結果を來したることに、慄然たらざるを得ない。若し之を以て自然力のみを歸せんとするならば、之は實に自分の罪を棚に上げて、他方面にのみ之を轉嫁せんとするもの、其罪最も重大なるは勿論、斯くの如くして人類自身に、猛然たる大反省を爲さずば、人類は遂に自ら其播種の收穫を餘儀なくして、地球をに亡ぼすと共に、自ら滅び去らんことである。

### 第三章 日本國土の特色

#### 自然力説の過誤

地球上荒廢地の發生を以て、専ら之を自然勢力の作用のみに歸せんとするものは、單に其事實の正當なる判断を誤れるのみならず、其結果非常なる誤謬的結論を持來し、人類生存上に重大なる禍害を與ふることに注意をせねばならぬ。其説に曰く、氣候が急激に又は徐々に土地に變化を及ぼし、人間の居住性を喪失せしむる時は、其處の住民等は、個々のか又は團聚的か新たな適當の居住所を搜索して之を獲得せねばならぬ。個々のなる場合は、餘り目立たぬとしても、團聚的遷移運動となつては之はそう容易の問題ではない。土地が廣大にして、自由に其等の土地が選擇せられた時代は、其等の運動は、單に其等人民に於る勞苦の増加に止まつて、他に其影響を及ぼさなかつたのであるが、人の繁殖漸く多く、餘剰土地の然く存在せざるに及んでは、團聚的遷移者は、既に先住者を有する方面に對して、其割込を策せねばなくなる。其處に兩者の調和か、然らざれば衝突かの段取りとなる。先住民が稀薄にして、大いに新來者に同情し歓迎する如き場合も、決して少くはない。左様の場合は、二つの相異なる文化的ものが接觸して、一段の進歩を爲すにも至るが、若し兩者の利益が衝突

する如き場合には、茲に戦争といふものが惹起される。互に生きんが爲めの闘争なる故に、其闘争は深刻性を帯び、大いなる流血の結果、勝者は其土地を確保又は占領し、敗者は殺戮せらるゝか、逃散するか、又は奴隸として服従するかに終る。此の如き根本事情は、人類をして戦争なるものゝ、餘儀なき存在を覺悟せしめる。戦争が既に人類の生存上餘儀なき存在として、多數の心理に承認を受くる時、次には戦争其ものゝ謳歌が發生する。恰も金錢の使用が必須の事情となる時、金錢其ものゝ蓄積者が、自己の實際的必要如何に係らず發生する如きである。斯くして種々の事項がそれに附帶し來る即ち或は兩團聚間の感情、猜忌や嫉妬や様々の疑念、或は指導者の功名心や威福の欲望、或は多數の掠奪的慾心、或は壓迫の快感、其他様々の悪事項は、皆戦争が團聚生存の必須事件たることに藉口して其便乗を企圖し、之が發生を煽動し誘惑し、恰も多くの支流が大川に來り合して、益々其水勢を激増せしむる如く、人類間に流血の慘事を、頻發又猛烈ならしむるのである。

此説は其前提に大いなる誤謬、少くとも疎漏の觀察を含むが故に、其結論に於ても、非常なる禍害を誘導し來るものである。前提の誤謬とは何かといへば、人類の或團聚の生存困難を來す事情を以て専ら之を氣候の變化等、自然の作用に歸着せしむることである。土地の荒廢の發生、それは事實とするも、それは前述の如く、人類の地球喰荒しが最大の原因であつて、決して自然の作用のみではない即ち荒廢の發生は、主として之を人類自身の責任に歸すべきものたるに拘らず、擧げて之を自然の作

用に轉嫁せん如きは、其處に前提に非常なる誤謬が存する。此誤謬の前提は、自然の不可抗力なるが故に、之に對する人類の餘儀なき行動即ち戦争も、亦眞に必須不可避の事項なりといふ承認を要求し來る。大いなる禍害とは之を言ふのである。其實土地の荒廢は、人類自身の責任なるが故に、荒廢の發生者は、其れ自身に怠慢不努力の責任を負はねばならず、之が發生を理由として、直に他方面に向つて侵略を爲すことの已むを得ざる生存的要求なりとの承認をば求め得ぬのである。或は事實に於て彼等は其居住土地の荒廢を以て、自己の責任に存することを知らなかつたかも知れぬ。けれども知らなかつたから、其責任が彼等に存せぬといふ理由は成立たぬのである。知らざりし事は、知らざりしといふ同じき怠慢不努力が猶ほ存在する。何れにしても彼等の行動の正當性を取得すべき口實は出て來ない。

其不正當行爲に正當性を無理づけし、若くは之を寛假せんとしたことが、從來の人類歴史の一大誤謬であつて、今迄の世界歴史が、實に人類の悲惨なる修羅場史であつたことは、此の人類棲息土地の荒廢を以て、人類自身の責任たる所以を、深く省覺しなかつた所以に本づく。其誤謬から出發した人類行動の誤謬、誤謬は誤謬を生み次第にこんがらかつて、それに最後の大きい輪をかけたが、近世歐羅巴文明といふものである。遂に大破綻を發して、人類の久しき播種を、彼等が收獲の役目に當つたのである。此人類の大誤謬を一洗して、眞の正當なる世界、其正當生活に復活せしめんとするも

のが、日本帝國の今度の活動といふものである。其委細を更に書く。

### 責任回避の罪惡

地球上の土地荒廢、その責任が主として、人間自身の上に存することを、今少し早く人類の多數が氣づいたなら、人類の世界歴史は、決して今日に見る如き悲惨にして、罪惡滿幅のものとはならなかつたに相違ない。何となれば人類は何れの團聚も、其居住土地の愛護に、最善最大の努力を盡し、乃ち荒廢發生の諸原因を推究して、其防禦にあらゆる注意を拂ひ、山林の増成、濫伐の禁止、水源の涵養、其他我土地の生命保護を以て、團聚第一の任務とするであらう。斯くすれば人類食糧の産出の爲めに、漸次に其土地を荒廢化する如き事實は、容易に發生せざるのみならず、萬一自然力の作用即ち氣候の急變等が襲來するに會しても、之に對する大地の抵抗力は強大にして、然く直に涸渴乾燥等を來すことなく、從つて急激なる遷移運動などを起すの必要はなく、徐々の影響に對しては、其對策も亦必しも流血を俟たず、平生眞に努力し勤勞せる或る團聚の、萬已むを得ざる不運の襲來等に對しては、他方面の團聚に於ても、必ずや充分の同情心を發し、平和の間に適當の救濟法は講究せらるべきである。現に歴史上にも左様な場合の、人類間の同情的行動は記録せられて少くない。

勿論戰爭は種々の原因から發生し得るが故に、土地荒廢の責任の自覺のみから、直に全部の原因が除去せらるゝとは限らぬであらう。併しながら其最も深刻なる發生原因が、初めから除去せらるればこれは所謂根本塞源なるものであつて、其最大原因が解消せらるゝ故、其猛毒力の著しく減退することは、何人も之を承認するであらうと思ふ。

のみならず、土地の荒廢が主として人類自身の責任なることを、人類の一般が深く猛省する時、人類は之が恢復修理の爲めに、互に協力するに至るべきは必然である。一方に於て戰爭を以て人類生存の必須條件と覺悟する時、他方に於ても之が萬一に備ふる爲め、即ち正當防禦として之が準備を怠る能はず、斯くして互に相準備し警戒するの間、一層に其發生原因を激増せしめる。然るに人類生存の根本に於て、其誤謬が諒解せらるれば、人類相互間の意思感情といふものは、大いに緩和せられ各方面は互に安心して、平和の事業に其勢力を集注し得る。自然に生存の積極的向上方面に對して、協力の利益が希望せられる。たとへば支那の戰國時代に於ては、各國互に黄河を決壊して、一方を困惑せしむることを以て、良計なりと思惟し實行したのであるが、後に統一國家となつては、各方面協力して、之が堤防修築に當ることを以て、全體の利益なることを納得せざるなきに至つた如きものである。地球上の各所に割據する人類の團聚が、互に其土地を荒廢せしめつゝ、遂に相殺戮し相流血することによつて、一方の血路を切開かん如きの賢明ならざることを、如何の愚者かこれを諒解し得ざらん、諒解して而して猶ほ之を脱せざるものは人類歴史の長き々々過誤が、次第に其大勢を養ひ來つたから

である。洵に其初めに於ては小兒と雖も、之を抜くに苦まぬ程の原因も、積り々々大勢となるに及ばば、あらゆる賢者勇者の智慧や力を極めても、之を脱却する至難たるに至るものである。

人類生存の修羅場的事實に對して、從來の人類の先覺者、所謂聖人賢哲といふ如き人々は、之が救済の爲めに其誠意を盡くし、智力を傾倒して、これに當らなかつたではない。之が爲めに多くの聖哲は其生命をも貢獻した。而も是等尊敬すべき大なる人々の熱誠盡力も、曾て多く其功を奏せざりしものは、其眞原因の認識に於て、未だ達せざる所があつた爲めに外ならぬ。即ち地球上の土地の荒廢之を以て人類自身の責任たることを、早く認識し、斯くの如くして放任久しきに至れば、必ずや如何の努力も遂に之を救ふ能はざるの時に際會し、人類を擧げて滅亡の深淵に陥るべく、今にして猛然省懼して、互に之が過誤を改悔し、其修理恢復に向つて戮力し奮闘するに非ざれば不可なる所以を、充分に唱説することなく、徒らに人間心裡の仁愛同情等のみを説くに急なりし爲め、其説必しも悪しきに非ず、いな大いに正しく最善に相違なしとするも、一方に於て人類過誤の大勢は滔々として危険の潮流を激し來るが爲めに、之が警戒準備一刻を緩うする能はざるものあり、理想は理想、事實は事實愚圖々々して負けたら何うなるものかとの觀念を深刻ならしめ、聖人の涙雨の如くして、人類の流血川の如くなるを、如何ともすべからざるの實狀たらしめたのである。支那の戰國の時、孟軻など大いに仁義を説いたが、太史公は當時の狀勢を記載して、『(孟軻)道已に通じて齊の宣王に遊事す、宣王

用ふる能はず。梁に適く。梁の惠王言ふ所を果さず、則ち見て以て迂遠にして事情に關しと爲す。是の時に當り秦は商君を用ゐて富國強兵、魏は吳起を用ゐて戰勝弱敵、齊の威王宣王は孫子田忌の徒を用ゐて、諸侯東面齊に朝す。天下方に合從連衡に務め、攻伐を以て賢と爲して、而して孟軻は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ。是を以て如く所のもの合はず。……』それは無理もないのである。所謂學者といふものも、誠に迂遠にして、進んで時に阿附するか、然らざれば徒らに誹謗するのみ。眞に人類過誤の發出原因を探究して、之が除去に賢明なること、名醫の大患を診療する如くなる能はなかつたからである。

基督は劍を以て劍に對せば、又劍を以て亡びんのみと説いた。併し人類といふ動物が、何故互に劍を執らねばならぬかの理由について、充分に考究する所がなかつた。故に折角の熱血を以て、亦其劍に血ぬらさしめしのみ。マホメットの如きは、之を迂とし、右手に自ら劍を提げ、左手に其經典を示し、之を以て人類救済最賢明法と考へた。けれども結果は一つの王國が、依然として暴力競争の仲間、一有力選手を加へた程度に過ぎなかつた。若しマホメットにして、今一段の考思に出で、人類自身の荒廢こそはあらゆる禍害の第一原因と氣づいたならば、彼れは彼れの全勢力を擧げて、亞刺比亞沙漠の生命恢復に努力したであらう。亞刺比亞の大沙漠や、その來る一日にあらず、一時の力の如何ともすべき限りならずとするも、其尙ほ生氣を留むる四邊の修理に初めて、漸次に其歩を進め、彼



れの後裔皆茲に其力を集注し、後來その版圖の爲めに流した程の人力を、悉く茲に轉換せしめたならば、其結果は必ずや世界人を驚かすものがあり、半月の旗幟は、世界史上に別種の光輝を放ち得たことと思ふ。孔子の如きも、徒らに頑迷諸侯に説くに王者の道を以てして効なく、悄然河邊に立つて逝くものは斯くの如しなど嘆息せんよりは、當時の黄河でも修理し、各國の生産力増加に、其具體的大益を示したなら如何。左様なるを卑近と謂ふか。彼れが間然する所なしと嘆稱した大禹は如何。九州の洪水整理の爲め、身を粉にして奔驅是れ努めたではないか。之を要するに歴代の英雄豪傑は言ふに及ばず、聖賢哲人も亦皆其着眼當を失つた。着眼とは、人類自身の地球喰荒しと、之が荒廢に對する責任の存在處についてある。

## 日本の成功原因

併し今更如何に過去の聖賢哲人を責めても、それは返らぬ愚痴である。今人識者の猛省によつて、現在將來の大計を誤らぬことこそは大切である。今日猶ほ地球の荒廢其何分の一に在る間に於て、人類の覺醒は其効を爲し得る。之が進んで今日の倍にもなつたら、最早取返しは困難であらう。或は今日の科學の發達に於て文明國は皆相當の注意を爲し居る故に、然く地球の荒廢などを過慮するに及ばぬなど思考するものがあつたら、そは實に利口に似たる大不利口者である。近世の歐羅巴文明など、

科學が大に發達したりと稱するもの、其科學は多く從來の誤謬の大勢への追隨者に過ぎず、眞に人類の大過失に着眼して之に手を下す程の進歩を爲せるものではない。或は自國內には多少の注意を施しても、其反對に他者の國土等に對しては、遠慮會釋なき亂暴を敢てする。地球全體から取つては、失ふ所却て莫大に上る。英國などの一島國の爲めに世界の如何なる廣大の地域が、其恣まゝなる搾取を蒙つたか。亞弗利加の土地等に於て、英本國の何倍にも當る大區域が濫伐に置かれたことは、日東の林學者を驚かせた程である。又其等本國とても、或は大工場の設置其他種々の事情に、死地製造を多くし、決して眞の土地保護の宜しきを得たものなどではない。

如何にしてもこれは一大國家一大民族の、猛然斷起するあつて、世界人類の大省覺を促し、其耳目の嚮ふ所を、從來の方面から全然一轉せしめ、世界人類の進行針路を斷乎正路に向けしむるでなければ、少し位の末梢的騒音を繰返しても、効能の存せざる所である。然るに今日に於て日本帝國の大活躍の始まつたことは、何等の至幸であるか。これこそは眞に大なるものゝ手が、今日に於て地球の荒廢恢復の爲めに、日本民族といふものを振り起して、其大使命を負はせたと解する外はないのである。

日本民族の一大使命、それは人類歴史の書返しである。從來の世界歴史とは人類の地球喰荒し、之に因る地球の荒廢、之に因る戦争の發生、之に因る人類の流血死亡絶間なき大修羅場、それが人類の

歴史なるものであつた。日本民族の大奮起、それは一大神軍の天から降る如く、地球上の一切の禍神等を撃滅退治して、善神等を援護し、以て人類をして眞の新しい生活、それは地球の荒廢の代りに地球の繁榮、即ち地球の老衰を變じて、之を若返らしむべき最善の方策の爲めに、人類の相闘相争に代へて、人類の協心協力を緊密ならしむべき、其一大指導中心の樹立これである。日本の大戦争が若し猶ほ從來歴史の甲勝乙敗裡、一時の雄勝を快とする如きものに止まつたなら、世界歴史は最早滅裂である。日本の大戦争は必ずや之を以て、世界戦争史の終結たらしめん棹尾の大戦争たるものである。而して人類の武備をして悉く正義の援護。不正義の發生、即ち地球を喰荒して自家の私利に供し、爲めに人類の修羅場を激せん如きもの、防止、其永久平和保證の爲めにする大武備たらしめよ。此の如き有史絶大の改革は、決して生半着の膺懲を以て足るものではない。彼等をして骨髓の底の底まで、改悔せしめんが爲めには、徹底的の大威力の發射を要する。之が爲めには日本民族の凡ては大苦惱を忍ばなければならぬ。或は生命を貢獻せねばならぬ。乍併これ日本一私の爲めではない。神が與へた地球といふもの、其生命の取返しのため、人類歴史の破綻恢復の爲め、實に日本民族の上に下された光榮の大使命たるものである。

斯の如き極重大の事業、それが日本國家の眞使命であつたこと、それは決して私共の一家言などではなくて、日本民族の理想、いな實踐であり、我等の敬虔にして賢明なる祖先等は、最も夙く之を悟

り得て、誠心を盡して之に従事したる爲めに、日本といふ世界に稀有なこの長久の國家と、常若の國土とを、今日に成就し得たものであることを、茲に聊か立證せんとするものである。

## 第四章 支那大陸の荒廢

### 支那古書の證明

日本國土の萬年常若マンニワカに其美を發揮しつゝあるに比し、支那大陸の國土が、如何に漸次に荒廢に傾き其多數住民が、困難を増加し來れるかの大略を書くであらう。これは決して我が善隣の惡口を敢てするではなくて、日本帝國と日本民族とが、彼等と緊密の協力を爲すことによつてのみ其恢復が、希望せらるべき一大事業に屬するのであるから、聊か其真相を明かにせんが爲めである。支那大陸の山川を見れば、山といふ山は、皆瘦骨削立して居る。日本人が未だ多く支那を知らぬ頃傳へて來た支那畫即ち南畫など稱せらるゝ支那式の山水畫を見れば、其所謂遠景は、水晶形の骨山が天に聳ち、中形はそれの少しく大きくなつた巖山の岷々たるもの、近景に至つては、斷崖絶壁と、辛くそれに嚙りついて、生命を繋いで居るやうな樹木が點綴され、其間に樓閣だの仙人などが、布置されて居る。日本人

は之を以て神仙國の奇景である如く思惟して居たのであるが、大陸の山川を目睹するに及んで、これは文人等の空想でも何でもなき、支那の實際的山川、そのものゝ光景に外ならぬことを知つて、二度喫驚びつくりを感じしめられたのである。併し支那大陸の山川とても、昔からこんなものではなかつたであらう、學者の中には亞細亞東北方山嶺の削瘦について、本來斯の如きものであつたといふ如き説を爲すものもあるが、本來とは氣候上の影響等を言ふものと思はれるが、其氣候的變化とて、自然の作用よりは、人類の地球喰荒しに因るの多きを思ふ時、決して本來の語を以て、人間自身の責任を回避又は抹過することは出来ぬのである。

支那民族が如何に其山林を濫伐したかといふことは、支那の古書を見れば、明かに之が事實を記載したものである。支那の古書に『山海經』といふものがあり、原始的の地理書と稱せられて居るが、其内容は荒唐無稽で、學者は之を評して、これは小説で百中一つの信用を置くべきものもないと言つて居る。併し小説としても、小説は若干時代の反映を爲すもので、荒唐無稽の中、亦採るべきもの絶無とは限らぬ。其記載振りを見ると、東西南北に分つて、支那内外の山の事を記し、何々の山には、何々の水が出る。又其山には何々の動植物、又は寶玉礦物等が出る。其山の神は何々の形を爲して居る等の事が、千篇一律的に繰返されて居る。それに據ると、山に草木なしといふもの、山に何々の木何々の草ありといふもの、又草木の有無について記載のないものと、凡そ三様に扱はれて居るが、山

に草木なしといふものが頗る多い。けれど半分近くは、草木ありと記され、又何等記載なきものは特に目立つ程の草木はないが、全然其生ぜぬものとは異なるのであらう。然りとすれば、山海經の出來た古い頃の記者の頭に映つた支那の山々には、半分以上草木の存在した事が想像される。若し今時の如く山々概ね骨立して居たら、山に草木ありが、そう平然として取扱はれて居る筈がない。又『詩經』これだけは本物の古書と信ぜられて居り其中に蒐められた詩には周時代、又それに先立つ時代のものも存在するのであるが、其等の詩を見ると、支那國土の東西南北に亘つて、頗る樹木を有する山の多かつたことが判る。即ち『南に樛木あり』とか、『南に喬木あり』とかの詩句があるが、南は南嶽（五嶽の一）を指すといふ。樛木は曲木、喬木は直木といふ。要するに種々の樹類があつたのである。猶ほ拾つて見ると、『山に榛あり、隰に苓あり。』、『山に喬松あり、隰に遊龍（草名）あり。』、『山に樛あり、隰に榆あり。』、『終南何かある、條あり梅あり。』、『南山に桑あり、北山に楊あり。』、『南山の壽鵝けす崩れず、松柏の茂るが如し。』など頗る多い。樹名は節を繰返す毎に、異つたものが挙げられて居るのを見ても、種類の頗る多かつたことが知られる。樹名は一々に擧ぐるは煩しく、又今時の活字には存せぬものが多いから、之を略すが、昔時の支那的山川、決して樹木の扶疎なものではなかつたのである。又南山と云へば南嶽の外、南北相對して、各地の山の意味に使用せるも多く、一地方の山のみならず、諸處の山の樹木を知るに足る。中に『崧として高きは維れ嶽なり。』等の文字もある。崧は

山の高きなりと註してあるが、山冠りに松字を配して、高山の意とするを見れば、平地には最早松など乏しくなつた後も、高山にはそれが存在したことが想はれる。或は「節たる彼の南山、維れ石巖々」だの「泰山巖々」などの句もあつて、大分巖山の實在たりしものも見えるが、今日の如く到る處山々骨立赤禿なるとは異なるであらう。

### 聽て來れる濫伐

然るに其中段々濫伐が行はれた。書經を見ると、禹が洪水を治めた時、「予四載（四種の乗物）に乗り、山に隨ひ木を刊り」といふことが、二ヶ所にも書いてある。平地の水を整理すると共に、山の木を伐つたものらしい。孟子に「堯の時天下猶ほ未だ平かならず、洪水横流し、天下に氾濫す。草木暢茂し、禽獸繁殖し、五穀登らず、禽獸人に偪り、獸蹄鳥跡の道、中國に交る。堯獨り之を憂へ、舜を擧げて敷き治めしむ。舜は益（人名）をして火を掌らしむ。益山澤を烈して之を焚く、禽獸逃れ匿る」とある。初めは餘り草木が繁茂して、猛獸毒蛇の巢窟となり、出ては田野を荒し、人間を害したので其巢窟を焼打したものらしい。又新しき田畑の開墾に、山林焼拂法を行つたことは、前にも記せる如くである。文明の最初の進歩には、何處でも其法を實行したのであるが、支那では殊に盛んにやつた爲め、炎帝などの帝號ともなつたであらう。勿論山林を放任したではなく、「禮記」などにも「虞衡を

して山澤を掌らしむ」といふやうな文句が見え、山澤の樹木を監督の職に置いたものゝ如く見える。又同書の月令の中に、孟春の月の諸事を書いて、「立春の盛徳木に在り、天子乃ち齊す」とあり、「命じて山林川澤を祀らしむ、犧牲牝を用ふ」等あるも、山林重視の現れであるが、併し一面には建築、薪炭等の必要があり、開墾の焼拂と共に、人聚近き方面は、盛んに伐採が行はれたことは、詩經の中幾ヶ所にも「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶」だの「柯を伐り柯を伐る、其則遠からず」だの「坎坎檀を伐る、之を河の干に實く」だの「木を伐ること椅たり、薪を拆くこと柶たり」だの「瓦々たる榑、榑といふ木の叢」之を薪にし之を樵にす」だの、山中河邊、盛んに樹木を伐採したそのチヨン々々の聲が、今も詩經の中に響きを残して居る。薪木の爲めが多いが、中に大建築の爲めなるもある。「徂來（地名）の松、新甫（地名）の柏、是れ斷り是れ度り、是れ尋にし是れ尺にす」或は「彼の景山に陟れば、松柏丸丸たり、是れ斷り是れ遷し……瘖成つて孔だ安し」などはそれである。

孟子に「牛山の木嘗て美なり、其大國に郊するを以てや斧斤之を伐る。以て美を爲すべけんや。是れ其日夜の息する所、雨露の潤す所、萌蘗（ひこばへ）の生ずるなきにあらず、牛羊従つて之を牧す是を以て彼れが如く濯濯たるなり。人其濯濯たるを見て、以爲く未だ曾て材有らずと、これ豈山の性ならんや。」と、牛山といふは齊の東南の地、濯濯は丸坊主の形容、其意は牛山の丸坊主を見ると、人は樹木のない山だと思ふが、昔は立派な樹木が茂つて居たのだ。然るに都會の近郊とて、早く伐採さ

れて了つて、其ひこばへが出て、亦牛羊に食はれて了つたのである。以て濫伐の状況を察するこ  
とが出来。孟子は餘程山林の事を苦しめたものらしく、其王道國家の理想の中にも『斧斤時を以て  
山林に入れば、材木勝て用ふべからざるなり。』といふことが書いてある。戰國時代の濫伐が、國土を  
損傷するの甚しきを慨嘆したことが窺はれる。

秦の始皇の作つた阿房宮は、東西五百步南北五千丈、上には以て萬人を坐せしむべく、下は以て五  
丈の旗を立つべしといへば、非常な大規模のもので、荊州や蜀地の材木を盡して之に供した。杜牧之  
が之を賦して、『蜀山兀として阿房出づ。』と歌つた所以である。頂羽が秦を破つて咸陽に入り、之を焚  
いた時、火三月消えなかつたといふ。是等は其最も大袈裟なものであるが、諸國の王侯と雖も、皆そ  
れ／＼の贅澤をして、臺閣高樓を營んだ。而して上の欲する所、下之れより甚しきものあり、以て上  
下相競つて各所の綠山を、赤禿にさせたことが察せられる。

### 周に現れた實證

濫伐の結果の其土地の山川氣候等の上に現れることは、案外早いものである。今周朝の陝西地方に  
於る状況を見る。これは詩經に載せられた諸ろの詩が、無意識の間に、これを正直に雄辯に物語つて  
居る所である。洪水を治めた禹王の後の夏朝が頗る長く続き、殷之に代つて又相當に続き、黄河下流

中原に發達せしめた支那文明が漸く行詰りを呈した頃、中原地方の土地も、頗る荒廢に赴いた。此間  
周といふものが、黄河の中流地方なる陝西の地に其王業を育て、來たのである。周は堯舜の際耕種の  
官たりし后稷の後が、邠（陝西省乾州武功縣）に封ぜられたものといふが、それは後の附會としても  
兎に角周の先は農耕の事に、非常に熱心な一族であつたらしい。古公亶父（後に大王と稱す）といふ  
人の時、岐山（陝西省鳳翔府岐山縣）の下に遷り、初めて城廓宮室を營み、國を形づくり之を周と號  
した。附近の人民來り歸して大分盛大となつた。古公の第三子季歷が嗣ぎ、其子昌が文王で文王の子  
發が武王、殷を討つて周の天下を開いたのである。詩經豳風の中に七月篇があり、これは武王の弟周  
公の作と傳ふるのであるが、周の祖先等の農耕經營の内容が甚だ詳しく歌はれて居る。長くて全部を  
載せきれぬが、『九月場圃を築く、十月禾稼を納る、黍稷重穰、禾麻菽麥、嗟我が農夫、我が稼既に同  
れり、上り入つて宮功を執れ、（農收既に全し、都に上つて宮城茸治の事に從への意といふ）晝は爾于  
に茅かり、宵は爾索綯へ、亟に其れ屋に乗れ、其れ始めて百穀を播かん。』

大雅皇矣篇は、岐周に於る開拓の光景を歌つて居る。其一節に、  
『之を作き之を屏るは、其れ菑其れ弱、之を修め之を平ぐるは、其れ灌其れ柵、之を啓き之を  
辟くは、其れ櫟其れ樞、之を攘ひ之を剔るは、其れ槩其れ柘、帝明德を遷して、串夷路に載てり  
天厥の配を立て、命を受くること既に固し。』

原始林を整理して盛んに耕地を開くのである。次節には、

『帝其山を省るに、柞棫斯れ拔け、松柏斯れ兌れり、帝邦を作し對を作すこと、太伯王季よりす。』

…』

山野が整理されて、上帝が之を見て、嘉尚を下したといふのである。茲に對とあるは、國があれば、之を治むる人を要す、善き國に善き對を與へて、王季の如き人が治政に當るといふの意と解せらる。兎に角周が原始的山林を開拓し、農耕に力め、富強を致し、一方中原の殷政が段々傾ける時、岐周の地は今天命を受けて、王業を成すべき基礎の定まれるをいふのである。周の開拓に山林の燒拂を行つたか否やは明白ではない。大雅旱麓篇中に『瑟たる彼の柞棫、民の燎く所、豈第の君子、神の勞する所。』の句があつて、燎は熾燎の燎、即ち下草を焼いて原野を養ふ所以とするもあるが、或は燒拂法であつたかとも思はれる。燒拂は兎に角、伐木丁丁は、周初の國土に充ちて居る。『柞棫拔たり、行道兌れり。』周公の作といふもの、中にも、『既に我斧を破る。』だの『柯を伐る如何、斧に匪れば克はず。』だの、斧が頻りに歌つてある。

武王殷を討つて天下を一新し、周公之を助け、大に新文化を開いたが、武王の後成王康王二代の間天下能く治まり、刑錯いて用るざる四十餘年と謂はれて居る。併し其次の昭王時代からは、周室は漸く衰へ初め、次の宣王の時獯豸（後の匈奴）京師に迫り、仲山甫出で、之を討ち一時中興と稱したるも、王晩年亦政に倦み、次の幽王に至つて、無道にして、犬戎に迫られ、其次の平王に至つて、遂に犬戎を避けて都を東の方洛邑に遷した。即ち周の東遷で、周の勢威殆ど衰へたのである。武王即位より茲に至つて三百四十八年である。これが外敵の侵入のみではない、山林田野の荒廢其衰因を爲して居ることが判る。

大雅に『雲漢』の詩がある。これは宣王の時といふ。

『倬たる彼の雲漢、昭天に回れり、王の曰く於乎何の辜かある今の人、天喪亂を降し、饑饉薦り臻る神として擧げざるなく、斯の性を愛むなし、圭璧既に卒ぬ、寧ぞ我に聞くことなき。』

時に大早雨なく饑饉至る、王銀河を望んで雨を祈る。既に神として祈らざるなく、犠牲も玉も獻け盡して効がないのである。此節の後に『早既に大甚し』の幾節が繰返してあるが其一節に、

『早既に大甚し、山川を滌滌す、早魃虐を爲し、憐くが如く焚くが如し、我心暑を憚る、憂心熏くが如し、群公先正、則ち我を聞かず、昊天上帝、寧ぞ我を遁れしめんや。』

一時大發展を呈した周の山川も、三百年近き濫伐の結果は、既に氣候の變化を來し、大旱至り天に祈り祖に禱るも、効なきに至つたのである。次の幽王の時代となれば、既に極まる。『十月之交』の詩がある。其中に、

『燂々たる震電、寧からず令からず、百川沸騰し、山冢空崩し、高岸も谷となり、深谷も陵と爲る。』

哀しいかな今の人、胡ぞ憎れて懲るゝことなき。』

自然も荒廢したが、人心も荒廢した。幽王の褒姒といふ妖婦を寵せるに對しては『哲婦城を傾く』の詩句があり、人民としては、『黽勉事に従つて敢て勞を告げず、罪なく辜なくして、讒口讒言たり、下民の孽、天より降るにあらず、噂沓背憎、職り競ること人に由れり。』遂に『周宗既に滅ぶ、止まり戻まる所なし。』の語あるに至る。

史記に『幽王の二年三川（涇渭洛）皆震ふ。伯陽甫（周の大夫）曰く、周將に亡びんとす。夫れ天地の氣は其序を失はず、若し其序を過てば、民之を亂るなり。陽伏して出づる能はず、陰迫つて蒸る能はず、是に於てか地震あり。今三川實に震ふ、是れ陽其所を失つて、陰を填むるなり。陽失つて陰に在れば、原必ず塞がる、原塞がれば、國必ず亡ぶ。夫れ水土は演ひて民用ふるなり。土演ふ所なければ、民財用に乏し、亡びざる何ぞ待たん。昔伊洛（二川）竭きて夏（國）亡び、河（黄河）竭きて商亡びぬ。今周徳二代の季の如し。其川原又塞がる、塞がれば必ず竭く、夫れ國は必ず山川に依る。山崩れ川竭くるは、亡國の徴なり。川竭くれば必ず山崩る。國亡ぶる如きは、十年を過ぎず、數の紀なり。天の棄つる所其紀を過たすと、是の歳や三川竭き岐山崩る。』當時の推理は必しも今日の科學と一致せずとするも、大要は異らぬ。天地の氣を亂るものは、人民であるといふ如きは、眞理の道破といふべきである。殊に夏商の亡國も、河水の涸渴に本づけるを言ふ如き、兩者の山川荒廢が、共に亡

國の因たるを知るべきである。

## 第五章 皇神達の御國見

### 天然のみてない

私は二十年以上も北京に生活して居たのであるが、日本へ歸る度、其清らかな碧海の上に浮ぶ緑山の國を見て、濁流を溯つて清川に入る如き心地がした。又引返して天津邊から北方を見れば、天はまるで眞赤にいぶつて居ること、大火事でもある如く、所謂紅塵萬丈なるもの、あんな所に住めるものであらうかと、不思議に感ぜらるゝ位である。船で白河を上下する時は、こんな眞黄色に濁つた水中にも魚は住むものか何うして水中の物を見るであらうと、氣の毒にも思つたが、今度は自分達があんな紅塵の中に、何うして呼吸出来るだらうと、黄濁の魚よりも哀れを感じた。併しこんな酷い紅塵を、自然が初めから之を企畫して置いたではない。前記の如く主として、人間といふ放縱なる生物が長い間かゝつて此美しき地球を喰荒した其祟りたるものである。之に比すれば日本といふ國土の如何に忝なきことであらう。支那民族が久しい前日本といふ島國の詳細などの判らぬ時、其大體を傳へ

聞いて、東方蓬萊の島、神仙棲む國として、一種理想的の美國土と看做したのも無理のない話である。實際日本國土の美は、世界に稀有であつて、其四季それ／＼の美しさを發揮しつゝあることは前述の如くであるが、而も其美しさの數千年の久しきに亘つて、少しも衰ふるなく、萬年の常若に居ること世界他民族の棲息地に於て、絶對に看る能はざることである。これ抑も如何なる理由によつて然るか日本のみが特に恵まれたる國土を、有するのであらうか。

或は日本は大海上の島國なる上に、印度洋から一定時期の貿易風が吹き來つて、多量の水蒸氣を送るが故に、常に水分豊かにして、土地の乾燥化を防ぎ得る其賜であるといふやうに、解釋する向もある。それも有力な一理由であらう。けれども自然の荒廢を以て、自然力の作用のみに歸するの誤りである如く、自然の常若を以て、自然力の恩恵のみに歸することも、同様以上に誤りである。現に其日本國土の中とても、少しく注意を怠つて、或は山林の濫伐等を行へば、直ぐ洪水氾濫、土砂崩壞、岩石露出、田野缺水等の惡狀況を起すではないか。

治山治水を以て、國政の大本だと主張せる熊澤蕃山は云つて居る。『川堀砂止等の末なることにて、自由を爲さんといふは、無功なる事にて候。誠に食の上の蠅を逐ふ如くなるべく候。水上の水、流れの谷々、山々の草木を伐り盡し、土砂のからみ保ち難き故に、一雨々々毎に、河中に土砂流れ入りて川床高く川口埋れ候也。其本を良くせずして、末にての才覺は、何として成るべく候や。今は草木を

切盡すのみならず、下杭迄掘り申候。下杭掘りたる山は、猶以て土砂多く川中に流入り候。後に留山（採伐禁止の内林）にしても、木の根掘りたる山は、五十年三十年にては、草木も有り着かぬもの候。水上の山々荒るれば、山澤の神氣は薄くなつて、水を生ずること鮮なければ常には流れ細し。…夏商周の三代の末の亡びんとては、川々淺くなりたりとあるも、天下久しく無事にして、驕り極まり、山澤の地理を亂りて、古法を用るざる故なり。今の分にて山川の政おはしまさずば、數十年の内には、大阪並に諸國の川口の通路成り難かるべし。』即ち日本とても、治山治水を放任して、猶山川優美を繼續し得る程の大天恵は、曾て與へられなかつたのである。

然らば日本民族は何んな賢い治山治水の良策を絶えず行つたかといふに、それは蕃山の所謂其本を行つたのである。本も本、尋常の所謂本などいふは、猶末の末である。日本民族の本は、世に之れ以上なき眞の大本を行つたのである。今其事を聊か叙説しやうと思ふ。

### 生島足島の思想

日本民族は日本の國土を以て、大きな神聖なる生物と爲した。他の民族に於ては、其居住の土地を以て、死せる土地と思惟せる故に、其喰荒しの後には、弊履の如く之を捨て去ること、内部を食盡した果物の皮や核を棄つる如く、魚の骨や頭を棄つると異らなかつた。そうして新しき好地があれば、



之に轉移し、無ければ他民族の土地へでも押掛け、溫和に交渉がつかねば、暴力に訴へて無理にも押込む。談判破裂すれば戦争となる。斯くして人間的戦争といふものゝ惹起されたるは、前述の如くであるが、日本民族に於ては、其國土を見るや、生ける聖物である。故に其魂を祭つて、之を生島足島の神として、尊崇を極めたのである。土地を祭るといふことは、日本民族のみではない。古き時代には處々に行はれた。多くは天父地母といふ如き意味にて、地を母性の神としたものである。スメール人が日神エンリルに對し地母をニンリルとし、セミツク民族がイシタルを地母神とし、埃及人がオシリスを地の神として崇拜し、希臘人が夙く天父地母の觀念を以て、オーロラを天とし、ガイアを地とし、轉じて神人同型のジウス及びデメートルとなせる如き、羅馬人がテラマテルといふ地母神を尊べる如き、皆是れである。支那にては天皇地皇人皇の三皇を稱へ、後世帝王は封禪と稱して、天を祭ると共に地を祭り、帝都の南には天壇を北には地壇を築き、天地の神を祭つて居る。

けれど日本民族に於る生島足島の神は、其等とは意義が頗る異つて、他民族は天なる神に對して地を祭り、又は地が穀物其他を産する所から、母なる神として之を祭つたのであり、従つて其祭祀の如きも、次第に形式的となり、後には消滅に近づいたのであるが、日本の生島足島神は、日本國土そのものゝ魂として、祭られたるものであり、此神の職分は、日本國土の上に其神性を現し給ふ皇神の御座として、其精忠を奉るのであるから、此神は益々崇敬せられ、歴代の皇神達御初め、國民は常に

其神意を尊み奉じた。

宮中祈年祭に於る生島の御巫の祝詞には『生島の御巫の辭竟へ奉る。皇神等の前に白さく、生國足國と、御名は白して辭竟へ奉らば、皇神の敷きます島の八十島は、谷蟻のさ渡る極、鹽沫の留る限、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、島の八十島墮つることなく、皇神等の依さし奉る故に、皇御孫命のうづの幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。』とあり、この祝詞に表現せられた意味は、生島足島といふ神の御名が既に之を明かに表現する如く、日本の國土は、永久に生ける國土であり、足るゝ國土であつて、死することなく、缺くことはない。若し足らぬ時は、幾らも延びて、谷蟻のさ渡る極、鹽沫の留る限、狭き國は廣く、峻かき國は平けく、其向上發展を爲し得るといふのである。

國土が生きて居るのであり、其神が我皇室に事へますのであり、従つて國民はこの國土を神聖視することゝ於て、缺點あつてはならぬのである。國土の一寸一分も單なる物質ではなく、一草一木も單なる存在ではない。其處には生國があり、足國があることを思はねばならぬ。故に日本國家に於て、一寸の土地も之を荒廢に附することは、生島の神の神意に背くものであり、一毫の不足も生ずれば、足島の神の神意に背くことになる。而もそれは生島足島の神その神の御爲めといふではない。その神が御座となつて守ります皇神の御爲めなのである。こゝにいふ思想の存在に本づいて、日本國家に於ては、上天皇より下萬民に至つて、實に國土山河草木一切を、非常に神聖に考へ、其神聖保全の爲めに

上下其力を盡したのである。

天皇の高きに上つて、國見を爲さるといふことも、單なる御遊山といふではない。天皇の知らしめす此國土の状況、即ち其生き振り足り振りを、實地に御覽にならん爲めの尊き御行事である。神武天皇は大和の嘯間の丘にお登りになつて、此國は蜻蛉の形に似て居ると仰せになつたのも、國土を生けるものとしての、御觀察であることが窺はれる。蜻蛉は秋の天空に、其美しき羽を擴げて飛翔する。日本國土は秋空の如く澄める大海原の中に横はつて、空飛ぶ蜻蛉の如く爽やかに生き／＼たるものである。舒明天皇が、天の香具山に、お上りになつての御製は、萬葉の初めに載せられて居る如く、  
『大和には、群山あれど取りよろふ、天の香具山、登り立ち、國見をすれば、國原は、煙立ち立つ、海原は、鷗立ち立つ、美し國ぞ、秋津島、大和の國は。』

國原に煙り立ち立ち、海原に鷗立ち立つ。それはまことに陸海生氣の充足である。阿刺比亞の如き野に何の煙りか立たん、死海の如き水に何の鷗か立たん。日本の國土こそは永久に萬歳に煙立ち立つ國鷗立ち立つ海たるべきである。又持統天皇吉野の山に國見を爲さつた時、有名な歌人柿本人麿は、歌を作つて其尊き光景を頌へ參らせた。

『やすみしし、吾が大君、神ながら、神寂せすと、吉野川、小激つ河内に、高殿を、高知り座して、登り立ち、國見をすれば、疊なづく、青垣山、山神の、奉る貢と、春方は、花挿頭し持ち、秋立て

ば、黄葉かさし、遊副川の、神も大御食に、仕へ奉ると、上つ瀬に、鶺鴒を立て、下つ瀬に、小網刺し渡し、山川も、依りて仕ふる、神の御代かも。』

春の花、秋の紅葉、あらゆる美を盡して、皇神の御心を慰めまつり、山川の上下の瀬には、種々のうまし魚を産して、大御食に供へまつり、山川も依りて事ふる、これぞ生島足島の神の御勤めではないか。雄略天皇が大和の目下の山にお登りになつて國見を爲さつた時、御歌ひになつて、

『目下部の、此方の山と、疊、平群の山の、此方々々の、山の峽に、立榮ゆる、葉廣隱白禱、本には、入組竹生ひ、末方には、足繁竹生ひ、入組竹、入籠は寝ず、足繁竹、櫛には率寝ず、後も籠寝む、其思妻あはれ。』

其時目下に在した皇后の御許に御遣しになつた。此御歌に於ても、山川の間草木相榮え、靄々として相親める様に、御満足の様子が、あり／＼と拜される。

明治維新の後、明治天皇が全國を御巡視になつたことも、亦この國見を、大規模に御擴張になつた御趣意と拜察される。行幸の途中、各所に御立ちになつて、四方を御觀望遊ばされた其御野立所の蹟は、御宿泊御休憩等の場所と共にいづれも今は國民達によつて、聖蹟として保護され崇仰されて居る隨従の一人高崎正風が、長野にて『みそなはず民の煙りや立かへり君をおもひの花と咲くらむ。』の歌を詠せる如き、如何にも御國見に應しき歌と思惟される。

## 國土尊重と山嶽

國土の最も秀でたるものは、高山大嶽である。紫霞を纏ひ、銀冠を頂き、雲に抜き出で、天と語る如き高山は、何人が見ても崇嚴を覺える。古代人が山嶽を神靈視したのも無理はない。されば山を神祀したのは、日本民族のみでなく、各民族に通有した習慣の如く、ホーマーの詩にも『山嶽は神の住所なり』と歌はれて居り、ダビテは『われ聲をあけてエホバによばはれば、その聖山より我にこたへたまふ。』又『エホバの山にのほるべきものはたれぞ、その聖所に立つべきものはたれぞ、手きよく心いさぎよき者、そのたましひ虚しきことを仰ぎのぞまず、偽りの誓をせざるものぞ、その人なる。』と歌つて居る。そのダビテが頻りに歌ふシオンの山は、イスラエル人がエホバを祭つてエルサレムの神域を築きたる其山である。又シナイの山はモーゼがカナーンへの途中、エホバの示現を受けたる聖なる山とされ、ヒラの山はマホメットが神託を領せる神秘の山とされて居る。支那民族は泰山其他五嶽を神聖の山とし、多くの帝王は封禪と名づけて、其處に天地の神を祀つた。其他前記山海經に見ゆる如く、各處の大山には、其主なる神が祭られて居る。其他各々の民族多少其風習を持たぬはないであらう。されば山を神聖視し、之を祭ることは、必しも日本民族特有の事柄ではないが、併し他國や他民族にあつては、それ等が早く既に形式に化したり、或は迷信に陥つたりしたのに、日本民族に於

ては、それが常に美しい精神に於て保持された。それは日本民族が、國土全體を生けるもの、長久に生けるものとして、これを神聖視する其根本觀念に本づいて居るからである。乃ち山邊赤人は富士のみ山を歌つて『日の本の大和の國の、鎮めとも座す神かも。』といつて居るが、これは赤人の特殊觀念ではなく、日本民族の凡てが持つ思想の代表的表現である。明治天皇の御製にも『萬代の國の鎮めと大空にあふぐは富士のたかねなりけり。』と仰せられて居る。天孫の天降り給へる日向の高千穂のくしぶる峰の最も神嚴の山として崇拜せらるゝは勿論、其他の大小の山々、大抵神と仰がれ、又は神の宮居とせられぬはない。大和の三諸の山は、神岳又は神奈備山と歌はれ、筑波嶺の二峰は雄の神、雌の神、二神の山と稱せられ、富士のみ山には、天孫の皇妃木の花の咲耶姫が祭られ、戸隠の山には、天の手力雄の神が祭られ、火を吐く淺間の嶽には、香具土の神が祭られ、御嶽の山には少名彦名の神立山には手力雄の神、白山には白山比咩の神が祭られ、日本の山々は其儘八百萬の神々である。

國土が水分を失ひ、草木を失ひ、赤禿の骨山、又は漠々たる砂地となれば、これは死地なるものである。生ける國土は之と反對に、其處には滾々たる眞清水が湧き滔々たる川流が走り、緑り滴る草木が繁茂する。これが生命の表徴である。長久に生ける國土、即ち常若の國とは、國土が萬世かけて右の状態を渝へぬことである。然るに草木の生命には、水が必ず必要であり、結局生ける國土とは生ける水の存在する國土といふことになる。茲に於て山は同時に水を伴はねばならぬ。其水の清くして美

しきことに於ても、日本の如きは、世界に稀れなる所である。信濃の高山の間、例へば神河内（上高地）などに流るゝ梓川の水を見よ。其清きこと、唯流るゝが勿體なき許りである。左様の水が日本では少し山奥に入ると、所在に湧き又流れて居るのである。平野に於ても大抵は清き水を得られるし、井戸を掘れば、地下水は清純である。歐羅巴などにて、最上の水といへば、之を瓶詰にして一本何圓などに賣らるゝことは、日本人には不思議の話の如くにも取らるゝのであるが、これは歐羅巴は人類の長き居住の爲め、土地が汚損せられ、地下から良水が湧かぬ爲めといふ。支那大陸なども同様で、井戸を掘つても良水は容易に得られぬ。水の缺乏は最も土地荒廢の兆候であるが、其飲料としての良水の存在せざることは、既に大いに荒廢に傾けるの證と云つて差支ない。

その良き水を保存するものゝ、山野の樹林に存することは、是亦今日の科學の明證する所、多くの記述を要せぬのであるから、生ける國土の問題は、遂に又樹林保護の問題に歸着する。樹林の保護、それは極めて簡單なる如くして、實際は至難の業たることは、前記せる如く、第一は農耕地増加の爲め、樹林伐採の多きこと。第二は建築薪炭等の需要の爲め、樹林伐採の多きこと。此二つであるが、古代に於ては殊に其理由が明白ならず、其伐採が平然行はれたのであるが、日本民族に於ては、其抱持せる麗しき精神が、自然によく樹林を尊重保護して、其美を保全し發揮し、以て其効力を充分ならしめたのである。

## 第六章 神社祭祀と山川

### 國土民族の抱合

日本民族は其國土を神として尊重した。國土を神として尊重するなどいふことは、何處の民族でも隨意に出来るといふ問題ではない。其民族自身の頭の中に、神を奉ずる至誠といふものが、充實して居らぬと、單なる形式や算盤勘定などで、出来ることではないのである。淳于髡が笑つたやうな、一豚蹄、酒一盃を以て、甌窶滿篝、汗邪滿車、五穀蕃熟、穰々として家に滿てよなどいふ慾深なお祈りは効能がない。眞に神を奉ずるの至誠にある時、神の意思は其處に大いなる感應をする、乃ち人の經營は、神の經營に一致し、斯の如き神人一致の經營に於て、民族は茲に根本の強き生命を取得する。例へば今日の言葉で、よく共同生存といふことをいふが、それを理智の範圍内のみに考へ、即ち利益計算を以て中心とすれば違ふ。今朋友同志の間でも、金錢や利害を計較しての友情といふものは、本當の友情とされて居ない。夫婦の間に至つては猶ほ然り、父子の間に至つては更に然り。民族と國土との關係に於ても同様であつて、日本民族と日本國土とは、單なる利益結合には止まらず、兩者は其

根本に於て、大いなる生命を共通して居るのである。故に民族精神の優美性は、國土全體の優美性を長養し、國土全體の優美性は、又民族精神の優美性を培育し、兩者は渾然たる一體として、其生命の常若と長久とを得るのである。

然るに他の多くの民族に於て、土地といふものは、生存資財の提供者に止まる。即ち土地なるものは、物質的存在に過ぎぬ。故に人間生存が忙はしくなればなる程、土地といふものは酷使され虐使され、遂に土地の荒廢といふものが持來される。人間を使用する場合に於ても、無情の使用主は、之を機械視し奴隷視し、出來得る限り、其勞働力を搾取して、一人が役立たなくなれば、又他の一人を雇ふことによつて之に代へる。然るに日本民族の如き神の敬虔なる尊奉者は、人間を取扱ふことに於て、神意の奉行を忘るゝものではない。之をして其活動と共に、其生命の完全なる發展を庶幾ふ。故に古來親分子分の語がある。使ふ者の心は親の如く、使はるゝ者の心は子の如くであるからである。人間をすら之を物質扱ひし兼ねぬ他民族の、況や土地に對してをや、結局國土の荒廢を來し、國土の荒廢が又自家の荒廢となるのは當然である。

是に於て私共は、古への不可思議なる生贄といふものゝ發生に於て、其解釋の端緒が得られた如く感ずる。想ふに土地の虐使による生産力の減退、此場合に於て古代人は其土地の生産力、即ち土地の生命の衰弱枯渴に對して、これを若返らせ、又は取戻さんが爲めに茲に生命力の補給として、生ける

動物を其儘埋没し、動物の無効なるに當つて、更に尊貴なる生命力として、生ける人間を埋没する如き行動を取てするに至つたではなからうか。而してそれが段々に變化して生贄といふものになつたではないかと思ふ。即ち土地を物質視し、之を虐待する人間共は、土地そのものゝ生命擁護の正しき手段を辨へずして、遂に尊貴なる人間自身の生命を以て、之に注入せんとする如き残忍なる邪道を考へ出したのである。邪道の益々邪道を生むも其數である。斯く解釋することによつて、私共は幾分古への生贄といふものゝ起源を考量し得る。勿論猶ほ委細なる研究を要することではあるが、何れにしても土地といふものに對する、眞の敬虔なる態度を失へる結果が、人間自身の上に様々の罪惡を持來したのであることは疑ひもない。

獨り日本民族に於て生贄の如き恥づべき習慣の存せず、却て之を否定するの史實を存するものは、日本民族は初めより國土を神聖視し、國土の常若なるが爲めに、左様の誤謬觀念の模倣などを、必要とせなかつた爲めである。

## 高天ヶ原に象る

日本民族の發祥地たる高天ヶ原については、それが天であるとの説、又は地上の高原であるとの説、地上としても大陸の何れかの地であるとの説、或は國內の何れかの地であるとの説、學者の間に種々

の説があつて、未だ一定されては居ぬが、これに對する批判は、別の著述に従事して居るから之を略し、何れにしても、それは日本民族の理想の籠れる國土であつたことは、言ふを俟たない。其高天ヶ原は如何の地かといへば、それは美しき山があり、美しき川があり、而して山には樹木が充ち花咲き實結び、平野には瑞穂の稻の波うつ水田が、營まれて居たことが判る。即ち山には、天の香山があつたと記されて居る『かぐやま』の解釋にも諸説があるが、私共としては矢張り香はし山で、花香はしく實も香はしき山の意と思ふ。川には天の安の川があつた。この名にも諸説があるが、これも安らげき川で、暴漲氾濫など、危険の状態を呈せぬ平安の川であつたからと思ふ。その香山には波々迦、即ち朱櫻があり、神木があり、ひかけのかづらがあり、笹の葉があつたとあるから、老木鬱茂した山であつたことが想はれる。又高天ヶ原に於て、屢々天照大御神の御名代として現れ給ふ高皇產靈の神を一名高木の神と申すを見れば、高天ヶ原には、高き老木の神聖視されるがあつたことも想像される。天孫の御母萬幡豊秋津師比賣の命は、高木の神の御女に在すが『よろづはたとよあきつしひめ』の御名前は、秋の山の紅葉色とり／＼に織らせたる美しさを聯想せしむるものがある。天孫御降臨の時天兒屋根の命太玉の命は、勅を奉じて天津神籬を持して、葦原の中つ國にお降りになつたが、神籬の解釋に就いても種々あるが、蓋し高天ヶ原の神宮の縮寫せられたもの、其樹木に關係あつたことは明かである。又神奈備、磐境等も、神靈奉安の場所を意味するが、磐境は齋榮樹との説があり、神奈備

も神木又は神の森、又は其存する山を指すと云ひ、いづれも樹木に關係せぬはない。乃ち高天ヶ原に於て、樹木の美しく嚴かなる中に、天つ神の祭られ給へるに象つて、豊葦原の瑞穂の國にお降りになつた神籬も、亦お降りになつてから、祭られたる社も、必ず樹木のこもりやかなるを要すとせられたものと思ふ。

されば最も大なる御宮である伊勢の御社の如きも、最も神林の尊き所に、お祭りしてある。熊澤蕃山は記して居る。『大和國芳野川、紀伊國熊野川、伊勢國宮川、此三河の水上を大臺ヶ原と云ふ。三國晴天白日の時は、此原も晴天也。三國の中少しく薄曇、花曇など云程にても、此原の雲雨甚し。他より望み見れば雲の山上を捲くが如く、霧の深谷に簇るが如し。其上に登る時は、登り盡さざるに身の濡るゝこと大雨にも勝れり。國は天氣晴れても、此原には雲雨の氣猶晴れず、其廣さ方一里計りなり。雨降らざれども、西風には宮川の水を増し、北風には熊野川の水を増し、東風には芳野川の水を増す。笠さしたる計りにては防がれず。空より降るにあらず、只神氣原上に充ち、水氣風に横切れり白日の時と雖も、其半絶ゆることなし。之ぞ律の半、萩の下露といふもの也。山澤氣を通ずるの至也其外高山深澤、名山には私雨といふものあり、同じ理也。谷洞より湧出する水も同じ。神理なるを知らずして、迹に據りて見るが故に疑ひ多し。水は高きより出で下きに就く。人の口上に有りて、唾の生ずるが如し。谷々の小水雨露の滴り落添うも勿論の儀也。然れども卅日も旱する時は、其小水は乾

きぬ。只水上のみ絶えず、其小水と雖も神氣の薄ければ、其流も少しき也。山川は天下の源也。山又川の本也。古人の心ありて立て置きし山澤を切荒し、一旦の利を貪るものは、子孫亡ると云へり。諸國共に斯の如くなれば、天下の本源已に絶つに近し。斯くて世の中立ちがたし。『宮川は伊勢の大御社のみ傍を流る、神聖の川であるが、其川の本源の斯くも養はれつゝあるものは、人皆大御社の尊嚴に對して、深く其本を貴ぶが爲めに、濫りに手を着くるなきが爲めである。其他の神社とても皆之と同じ道理にて、其山川は培養されて居るのである。例へば信濃の戸隠神社、穂高神社等を見れば、其高山の中腹又は山麓等に祭らるゝ神社の、附近から山奥かけて、大抵原始林は其儘に存在し、極めて崇美の林相を呈すると共に、其間から清く冷たき水流は、地の尊き命として湧いて竭きぬのである。』  
日本に於ては名山大嶽、大抵神を祭らぬはなく、又平野に於ても、人の住む所一村一部落、必ず土産の神や氏神の社等が祭られて、其處には多少神森神樹の存せぬはなく、高き處から之を見渡せば、日本の國土には、神の宮居が満ち、人の住居は之を廻つて存在し、神人の居はいと麗しき調和を示して居る。

明治天皇の御詠に『かみち山松の梢にかゝりけり天つみそらの雲の白ゆふ。』と仰せられた伊勢の大宮はいとも畏し。『しけりあふ杉の林をかこひにてちりにけがれぬ神のひろまへ。』と仰せられたるは、伊勢の大御社は申すまでもなく、多くの神社は皆左様にして清らかに在す。岩清水の八幡神社には、

『をとこ山峰の櫻に諸人のかさしの花をたくへてぞ見る。』(兼昌) 賀茂の社には『めづらしく年に一たびあふひをや神もうれしとみそなはずらむ。』(顯仲) 松尾には『千早振松の尾山のかげ見ればけふぞちとせのはじめなりける。』(兼澄) 平野には『千早ふる平野の松の枝しけみ千代も八千代も色はかはらじ。』(よしのぶ) 稻荷には『いなり山しるしの杉の年ふりてみつのみやしろ神寂びにけり。』(有慶) 大原野には『をしほ山神のしるしを松の葉にちぎりし色はかはるものは。』(慈圓) 住吉には『天くだるあらひと神のあひおひを思へば久し住の江の松。』(安法) 祇園には『ちはやふる神の園なる姫小松萬代ふべきはじめなりけり。』其他多くの神社樹木と縁故あらぬはない。斯くして神を祭ることによつて、日本の國土は崇嚴化され、優美化され、而して樹林樹木は尊重され擁護されたのである。

## 第七章 民族の情愛と國土

### 三の者渾然一體

『海原をふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』何人か故郷の山川を戀ひ慕はぬものがあらう。故郷となれば、沙漠でも戀しい。けれどそれが美しき山美しき川であれば、一層戀しい。故郷

の山川の戀しいのは、山川そのものゝみならず、其處には我れを生み我れを育て、我れを愛した父母があり、我れと共に睦んだ兄弟朋友があり、親戚知人があり、美しい情愛が、其美しい山川にまつはつて居るからである。其人々が存在すれば勿論、存在せぬ後は、其等の思出が、悉くその美しき山美しき川に融合して、恰も其等山川の精神の如く、魂魄の如く、我れに臨むからである。斯くして我等の祖先の精神を籠めた山川は、又我等の祖先の精神を、其處に不朽に宿して、我等の祖先と、我等の國土との合體せるものとして、我等の上に来る。父母兄弟親族朋友の間、情愛最も濃厚なる日本民族が、斯る國土の上に、至深至重の敬愛を感じることは當然である。斯様な國土に對して、單なる物質取扱の如き、利益的打算の考方は問題とはならない。人間の活動舞臺としての山河大地は、到る處に廣い。けれど其等は成功のみが、歡迎され謳歌され、矢張り利害打算の、世界でないものはない。然るに故郷の山川のみは、病めるものを癒やし、惱める心を慰め、成敗利鈍はその問ふ所にあらず、大いなる慈母の如く、我れを愛するのみである。時勢に隨順是れ競ふやうな人心は、時として故郷必しも情愛のみの天地ではないことがあるとしても、故郷のその美しき山と、美しき川とは、曾て其愛を渝へない。『人はいさ心も知らず故郷は花ぞむかしの香に匂ひぬる。』といふものこそは、まことに其通りである。大いなる神は萬物を生み、多くの人間を生んで、彼等をして様々の任務に就かしめた。非常な幸福の生活に置かれたるもあり、神業の犠牲に置かれたるもある。けれど之を愛することに於て

神の心に變りはない。その背き去れるものまでをも、猶之を愛するが故に、神は人々に懺悔の心を賜ふ。故郷の山川は、其大いなる神の心を體せるものゝ如く、其處に生れ其處に育ちたる人間の一切に甚深渝らぬ愛を寄せる。彼れ故郷の山川は、其歸り來れる兒等を待つに、然く深厚なるのみならず、世界到る處の山川に奮闘しつゝある彼等の兒等の上にも、萬里を馳せて、常に彼等の夢寐に入つて、彼等を慰藉することを忘れぬ。日本には實に斯様な情愛至深の國土があるのである。而してこの國土こそは、我等の大君の知ろしめすその國土であつて、その國土の神は、我等の大君の大御心を體して、萬民の上にその大いなる愛を擴けるのである。他の普通の國家等に於ては、國家構成の理論を、主權、國土、人民三者の結合の上に置く。日本の國家に於ては、三者は渾然一體の大いなる生命であつて、分裂や分離は考へ得られない。他者に於ては、或は國土上に他の人民、他の主權などを考へる餘地がある。それは初めより暴力の無理強ひによる結合體なるが多いからである。日本の國家に於ては、初めから渾然一體の精神なるが故に、生命には發展があり長成があつても、生命の分離などいふことは考へ得られぬのである。

## 國土と民族分裂

支那大陸の如き、其統治者の朝に興り夕に倒れて、波瀾の如く泡沫の如き所に於て、山河は其度に



破碎を被る。人の能く之を修復するものはない。邵康節の『花間水畔綠如茵。興廢曾經漢與秦。占了山川無限地。愁傷今古幾何人。嚴霜殺盡還逢雨。野火燒殘又遇春。不那路傍多此物。農家長是費耕耘』といふもの、秦漢幾多の興廢を経て山川無限の地を傷害し、古今幾何の人を悲愁せしめたであらう。彼れは後半に野火燒き盡さず、春に遇うて還た青を返へす豊草を賛美しては居るが、これも山川荒廢と共に、年々其勢力を減少して居ることを如何せん。寧ろ彼れの他の詩『秦川兩漢帝王區。今日關東作帝都。多少聖賢存舊史。夕陽唯只見荒蕪。』の方が眞景である。劉氏興り嬴氏蹶き人間の鬭争窮りなき間、山川は次第に虐待されて、夕陽に只荒蕪を見るのが、相變らぬ結果である。斯の如くして大なる山河は分裂し、平野は黃塵千丈の鬭争地、其處には名利是れ競ふ俗人族の修羅の巷が展開せられ青山白雲自然の好地は、纒かに清癯鶴の如き仙人族の保持する所となれるも、力亦足らず、年々に山崩れ谷塞がり、山林も次第に其青を失へば、廣野も從つて日に日に其生命力を衰耗する。蘇東坡が驪山を詠じて『功成雖欲善持盈。可歎前王恃太平。辛苦驪山山下土。阿房纒廢又華清。』と歌つた如く、人間の激烈なる鬭争毎に、辛々苦々するものは、自然の土地そのものと、其處に生みつけられた蒼頭等である。而して共に與に引づられて、果ては沙漠の運命に逐はれて行く。

## 第八章 瑞穂國の眞意義

### 稻田と國土の長久性

人類の地球荒廢は然ることながら、人は次第に増加し、食は多きを要し、而して生存の競争は激烈となる。勢ひの赴く所、如何ともすべからざるものがある。併し其處に神は人に愛を賜ひ、知慧を賜つた。其愛を動かし知慧を動かすに於て、人類は其必要物件を造り出すに於て、必しも土地の荒廢を犠牲とせねばならぬものではない。日本民族が其食糧として米を撰び、即ち稻田を以て其主たる食糧の供給場たらしめたる如きは、最も其賢明の方法たるものである。日本の國土は古へに豊葦原の瑞穂の國と稱せられた。これには種々神秘的の解釋を爲す向もあるが、乍併私共は極めて卒直に其言葉通りに解釋することによつて、其處に大いなる意味の存在を認め得ると思ふ。蓋し豊は富むの意で、葦原は植物の葦の繁茂する原野である。瑞穂は水稻で稻である。日本民族は稻を以て主食とする故に、稻田を要し、稻田は給水の便利を要す。葦は水邊の草であつて、葦の密生する所は、稻田開設の可能性を示して居る。其葦原の豊富なるによつて、水穂の國は茲に安定を得べき道理である。故に初めよ

り此國を稱して、豊葦原の瑞穂の國とは云つたのである。天孫降臨の時天照大御神は隨從の神達に對して、瑞穂の稻の種子を以てせられたことが、書記の一書の中に記されて居る。『又勅して曰はく、吾が高天ヶ原にきこしめす齋庭の穂をもて、亦吾兒にきこしめさしむべし。』と高天ヶ原に於ては、天照大御神は、御親ら稻田をお作りになつて、之を天つ神のみ前にお供へになつた。米が最も純潔の食料で、消化に適することは云ふに及ばず、其水田が土地を潤澤する爲めに、地の乾燥を防止すること又水を要するが故に、自然に水源の涵養、之に必要な樹木の保護に意を用ゐることは、食糧として稻の大いなる好處といふものである。他の乾燥的食糧、例へば麥粟の如きは、其耕作の土に必しも水を要せざるを以て、之を開拓すること益々多くして、土地の乾燥化を來すこと益々甚しく、遂に荒廢を招來する。然るに水田は水を要するが故に、其憂へが少い。日本國土の常若は、其根本に於て前述の如き理由に據るが、同時に日本が瑞穂の國であることに於て、それは一層其愛護が深められて居ることを記憶せねばならぬ。或は日本は南方印度洋よりする貿易風が、多量の水蒸氣を齎すが故に、常に水分豊富にして、稲作にも適し、又國土の濕潤をも保ち得るのであると、専ら之を自然の恩恵に歸するの見方もあるのであるが、それは實際に左様の恩恵がありとしても、猶國土に對する日本民族の特殊なる擁護がなかつたなら、それ等の恩恵とても忽ちに之を薄弱化し衰滅せしむること、必しも困難ではないのである。例へば北海道の如き、其維新の初めの開拓法が、主として歐羅巴式を採用せる

爲め、悉く森林を伐採して、一望無涯の稻田を開き、田地の多量を獲得たらば可しとして、之が爲めに河水の氾濫を招き、石狩川の如き、堤塘修築の方法なきに苦み、巨額の費用を投じて、鎖籠を浮かしたる如き堤塘を作爲せるなど、若し其初め日本古來の美風の如く、所在の部落には神社を祭り、其神社を中心の一定地には、能く原始林を保ち、山林と水田と、其調節を誤らなかつたなら、一方には人間居住の場所をして、其崇美と好景とを得しめたと共に、一方には洪水氾濫等の災害を、未萌に防止したであらうに、其然らざりしは、最初の人爲的方法に、過誤の存した爲めであることが明かである。即ち日本の國土に天然の恩恵ありとも、我等の祖先に於て、若し之を利用するに、最も優れた情愛と知慧とがなかつたなら、全國土をして、如何の状態に陥らしめたか、容易に想像の及ばぬものがある。天然の恩恵過信の誤謬は、天候が土地を左右するを過信すると、同様の誤謬たるものである。

### 井田法と水乾田

支那民族が古き時代に於て、井田法の如き、土地の均分制度を行つたことは、其方法について若干の見解の相違はあるも、學者の一致する所であるが、唯其均田制度が、水田の上に行はれたものであるか、或は黍稷等の乾田の上に施されたものかについては、學者の間に意見の相違がある。一方の學者は均分制度を以て、主として乾田の上に施せるものと爲して曰く、今の北支那の實況を見るも、米

を産することは甚だ少い。古へに於ても黍稷が主たるものであつたであらうと。他の學者は曰く、然らず、井田法には溝洫法を伴ふ。即ち水利に關する規畫であるが、其甚だ精細を極めたるを見れば、水田を主としたことが知らるる。黍稷等にも若干水利の注意を要するも、水田にあらざる限りは左迄精細には至らぬであらう。又周禮職方氏の職の下にも、各州の穀を記して、其穀稻に宜しといふもの多く、九州の中稻に宜しきを謂はざるは二州に過ぎず。即ち水田を以て主とし、其然らざるの外たるを知ることが出来るといふのである。兩説各々其主張の根據があるのであるが、私共からすれば此兩説の間に於て、支那國土の荒廢といふものが證せらるゝことを思ふ。即ち其初めに於ては均田法は水田を主としたのである。故に其田々間に溝洫即ち水利の注意が、甚だ精細に講ぜられた。然るに支那民族の土地に對する愛護心の足らざるや、次第々々に其荒廢を來し、従前の水田の、後には最早稻に適せずして、之を黍稷等の乾田化するに至つたものである。更に後には其乾田さへも一年置き二年置き又は三年置きに播種するでなければ、收穫の不可能なるを生ずるに至つて、茲に一易二易三易等の使用法を、定めざるべからざるに至つたのである。禹王の治水から三千年程の間に於て、斯の如き變化は生じたのである。而も之が禹王の如きによつて、夙く溝洫法に注意されたから、猶全然の沙漠化を免れたのであるが、若し初めから他民族の如き放任的方法に委せられたらば、恐くは今日は乾田そのものさへも、跡を絶つたではなからうかと。而して支那民族が日本民族の深厚なる同情に

よる協力を得て、其山河の生命を取戻す時、日本のやうな瑞穂の稻は、大陸の多くの土地に穰々として榮える時が来るであらう。

## 第九章 誠あれば物あり

### 近世文明の大誤謬

近世文明の根柢に横つた思想の中、最も誤謬にして危険の多いのは、物質が主として精神を支配するといふ所謂經濟史觀的の考方である。これは人間自身の責任を棚に上げて、凡てを物質の上に轉嫁させやうといふ極めて狡き考方であつて、勿論物質が或程度に、人間精神に影響するは、否み難き事實であつて、何人も食ふことなくして、生命を保つことは出来ない。生命を尊重する以上は、食ふことを重大視し、食ふことを重大視する以上は、物質を輕視することは出来ぬ。それは否定すべきでないとしても、而も人間の精神が、如何に物質を變化せしめるかといふことは、一層に之を重大視しなければならぬ。極めて大いなる方面から考へても、實に人間の精神の物質を支配する、意外なるものがある。普通に山水秀靈偉人を生ずるなどいふ文句が、使用されて居る。それは山水といふ物質が、

人間の精神に影響を及ぼすの重大性を語つて居るものであるが、一步を進めて、其山水の秀麗を、如何に人間の精神が維持して居るかといふことを考へる時、理論は顧到する。それは既に前論説せる如く、國土の優美性ととも、民族精神の優美性に本づかざるものはないのである。この點は中庸の思想が明白に語つて居る。曰く『誠なるものは物の終始なり、誠ならざれば物無し。是の故に君子は、誠を之れ貴しと爲す。』と、物といふものは宇宙に遍滿して居るであらうが、人間の使用に堪ふる物は人間の力が之に關係して來る、然るに其力の本源たるものは何ぞといへば、人間の精神であり、其精神が誠でなければ、人間の關係する物といふものは、人間の本當の役には立たなくなる。今何々の物が不足をして居るといへば、人々は之が獲得の爲めに、あらゆる努力をする。其極或は他人を排斥して、自分のみの利益を圖る。即ち道徳といふものも、物質の支配を受けることを示して居る。けれど更に考へると、精神の悪い者は之に乗じて、勝手な悪い物を、製作したり製造したりする。水の多い酒が出来たり、甚しければ有毒成分の含有さへ起るであらう。斯かるものが多く現れると、眞面目な物は引込んでしまふ。是に於て酒、酒ならず、酒、毒なりといふやうな結果となつて、即ち誠なければ物無しといふ事實を證據立てる。物の無いも困るが、有つても信用出来ぬ眞の物の無いは一層困る茲に矢張り精神といふものが、本だといふことが判る。故に人心が誠を失へば、如何に物のみを苦しめても、人間の生活は安全とならぬ。人間の精神が誠を存する限り、物は正しき姿に於て存在し、其

缺乏に當つてや、又正しき智慧が働き出して、之が創作も不可能ではない。誤魔化しの悪物毒物を以て、多數を傷害するとは異なる。中庸が『唯だ天下の至誠能く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て天地の化育を賛くるを知るを爲す。』といふものは、まことに其通りである。而も單に天地の化育を賛くる位の程度ではない、人間の至誠あつて、天地も其正明を得るのである。誠ならざるもの地に充つれば、地上の人間の行動は、凡て虚偽となり暗黒となり、國土を傷害し、破壊し、遂に之が荒廢を來し、山川其命を失つて沙漠となり、沙漠の熱砂は、天地氣候を異變せしめ、大いなる地球といふものと、人類の生活といふものとの、調和を打壊し去るに至る。

## 第十章 日本精神の根源

### 神を認識するもの

以上國土の優美性といふものも、其本は民族精神の優美性から來ることを、聊か各方面から論證したが、然らば其民族精神の優美性は、何處から來るかといふ問題となるが、それは神から來るといふことに歸着する。然らば其神は何處から來るかとの質問を提起するのであるが、茲に従來の思考法と

いふものゝ、過誤又は不備が存したのである。即ち私共は人間の認識といふものには二つあつて、一つは理論的の認識であり、一つは神に直通の認識であることを主張する。

從來共認識上に此二大別の存在を、或程度に氣づかなかつたではない。種々の呼方に於て、それは區別せられた。けれどもその根本の推究が足らなかつた。之が爲め一つの脳髓の中に、二つの矛盾した認識が存する如き、不可解を生じたのであるが、私共はこれは初めから異つた二つの脳髓から別々に出發するのだといふのである。即ち人間の脳髓には二つの脳髓があり、其一つを私共は第一脳と名づけ、他の一つを第二脳と名づくるのであるが、一方は理論的の認識を掌り、一方は神に直通の認識を掌る。神は何處から來るかといふやうな考方は、第二脳の理論的認識を以て、第一脳の神への直通の認識を推究せんとするもので、それは不可能のことであり、第二脳の能力の限界を超えたものであるのである。神の事は神の認識、即ち第一脳認識を、活動せしめねばならぬ。此事は少々込入つて居るから、茲に詳説の限りではないが、要するに日本民族といふものは、昔から其第一脳の非常に發達した民族であつて、神を尊奉することに於て、實に至純至深なるを得たのである。それが日本民族の行動上に、最も顯著に現れたものは、天の岩戸開きであつて、天の岩戸開きは、天照大御神といふ日本民族中心の神明が、事に因つて岩戸隠れをされたのを、日本民族の知慧と力と情愛との一切を盡してその恢復に努力し、而して首尾能く神明の迎出を得たのであつて、即ち日本民族の中心が、常に神

の光明に率ゐられて居ることを示すものである。日本の國家といふものは、其高天ヶ原の擴大であり發展であり、日本民族の君主に在す天皇は、即ち天照大御神の御直統であり、其故に顯つ神に在し、この顯つ神の指導下に、日本民族といふものは、常に光明に就き、闇黒を排斥し、禍神の誘惑を斷絶するに、勇敢なる民族なのである。

斯様の國民的精神といふものが存在するから、これが國土一切の上に働いて、國土の神性と相抱合して、國土といふものをして、尋常物質以上の優秀性を發揮せしめる。これが爲めに日本國土といふものは、長久に其荒廢を免れて、其生命の若さ、即ち常若といふものを維持し、日本國家の長久性に其健全なる根拠を提供する。日本國土の常若といふことが、決して偶然の仕合などでないことを、深く考思すべきものである。

### 精神界の朝日こそ

日本國土の優美性は、春夏秋冬四季とり／＼に其美を有するも、そのいづれもが日本に於て特に美しき太陽の光りに照らさるゝことに於て、其美の頂上に達することは、前にこれを述べた如くであるまことに春の花の、太陽によつて最上の美觀を得るのみならず、冬の山頭の雪までが、美しき陽光を浴ぶることによつて、み空の大いなる花となる。されば日本民族は古來最も日の出を尊ぶ。山を描い

ては日の出の富士となり、海を描いては、日の出の二見が浦となり、常緑の樹木としての松には、日の出の松があり、長壽の鳥としての鶴には、日の出の鶴があり、いづれも慶たきものゝ表徴とされる日本の國自身を日の出の國と稱し、推古天皇は支那の君主に對し、日出づる所の天子、書を日没する所の君王に致すと仰せた。朝日を國旗として、萬國に輝かさんことを念とするはいふまでもない。臣民は顯つ神天皇を朝日と拜みまつる。明治天皇は其御詠に『さしのほる朝日のごとくさわやかにたまほしきは心なりけり。』と仰せて、天子御親ら、さしのほる朝日を御欽仰になつて居ることを、お示しになつて居る。

斯様にして日本民族は、日本國土に光臨するその美しの朝日を讃仰して居るのであるが、更に其日本民族の美しき精神を、最高の一前に集注せしめ給ふ精神上の大いなる朝日がある。それは即ち顯つ神天皇に在す。日本民族の億兆が、それ〴〵に咲かす精神上の美しき花々、それ等はこの大いなる朝日の光りに浴みすることによつて、何れも其最上の美に達すると同時に、億兆の花々は、其整齊調和の統一點を得るのである。支那民族の如き、久しく天を神として仰いだけれども、其天は茫漠として集中點を存せぬので、段々に其信仰は薄れ崩れ、遂には自然法といふ如き意味ともなつた。同時に其民族の指導中心といふものは不明となつて、民族精神の分裂を致した。日本民族に於ては、絶えざる太陽が萬民を率ゐ給ふ。人民が顯つ神天皇を稱へて「八隅知し我が大君」と申上るのは、太陽の天地

を照らす如く、八隅照らし給はぬなきの意である。この大いなる光明の中心存在によつて、日本民族の優美性は、益々其美を養はるゝと共に、其美は相合聚して、長久の一大花として崩れず破れず、以て世界の上に其光輝を放つことが出来るのである。

他民族に在つては、一時大いに美しき開花を爲す如きことがあつても、忽ちの間にそれは暴風雨の吹散らす所となるか、さらでも色褪せ香退いて、醜きものと化し了るのであるが、日本民族のみが、長久の若さに於て、春光に微笑むを得るものは、全く其中心に大いなる太陽の存して、無限に其美を供給すると共に、其生命の強さを維持させ給ふからである。

### 長久に咲く文明の花

人類歴史の夜明が未だほの暗き頃から、ユーフレート、チグリス河邊には、人類の早期文明の花が咲いたことは、其處の土中から掘らるゝ煉瓦片上の、楔形文字が之を語つて居る。爾來東西の各地にそれ〴〵の文明の花は咲き出でた。或ものは汚泥の中からぬけ出でた蓮花の如くに清く、人をして能く煩惱の痛苦を脱して、永遠の安定に入らしむると謂ひ、或ものは燃ゆる薔薇の花の如く熱烈に、神の大いなる愛もて、萬人相愛する地上の神國を齎はせた。或ものは高山の雪の如く、理智の冷やかなる光輝に、世上の凡ての眞なるものを照し出さんとし、或ものは桃花の天々たるが如く、梅花の馥郁

たるが如く、仁心禮貌、君子の國を實現せんとし、其他大小様々の花は、其特殊の色彩を以て、其香芬を以て、人類の地上に咲き出でたのではあるが、それは能く其一部分々々の人々を喜ばしめ樂しましめ、相當の幸福世界を提供はしたのであるが、而もそれは猶ホンの一部分人等の幸福であり、全人類に取つては、悲哀痛苦、紛争鬭傷、救はれざるの魂のみが多かつた。そうして其等の花達も互に僅花一朝の榮以上の壽命をば保たず、いづれも慌しく開落し去つて、太華山上長久の花とは、詩人の空想のみに止まつた。其等の花達の果敢なく散り去れるのみならず、其等の花の咲き出でた其花園とても、聽ては荒地と化し、遂には沙漠と乾き果てたるも少くはないこと、前述の如くである。多くの優れたる民族等の、血を絞り力を絞つて咲かせた文明の花が、斯くも果敢なきものゝみなるを見て、文明其ものゝ價值を哀むものも少くないのであるが、併しそれは未だ文明の先驅ともいふべき、むだ花仇花と謂はんは酷に失するも、恰も樹木を栽培して、若干時期の間は、其花未だ容易に結實せざる如きものであつて、即ち人類の眞の努力の結果ではないからである。

東方日本が咲かせた文明の花、それこそは初めて人類の全世界に、眞の幸福の結實を與ふべきまことの花たらんものである。従來の花は其畑の耕作も足らなかつたし、其肥料も不完全であつたし、又第一が之を照らすべき太陽の光線が、充分でなかつたのである。故に折角美しき色を見せ、心地好き馨りを放ちつゝも、其花達はあつけなく散り果つるものゝみであつた。日本文明の花は其世界に咲き

出づる迄、三千年の長き星霜が準備の爲めに備へられた。其處には日本民族の神を奉ずる至純の血潮が之を培養し、天照大御神に續きます萬世無窮の顯つ神が、其大なる太陽としての光りを注ぎ給ふ。この文明の花の開發と共に、世界の人類は、初めて人類全體の爲めの春、億兆悉くの麗しき心の開くべき其春、全人類の心の底からなる和ぎの春に遇つて、全世界は恰も日本民族が三千年の昔、天の岩戸を打開いて、天日の光を迎へ、あなさやけ、あなたぬしを歌つた如き、その眞の新しき光りの世界を樂み得るであらう。

日本の國土、敷島の國といものは、左様な文明の花の培養苗圃であることの譽れと、榮えとを持つものであることを思ふ時、其寸土片壤も、あだ疎かには考へられぬのである。明治天皇の御詠「ありとある人をつどへて春ごとに花のうたけをひらきてしがな」と仰せたその全世界のありとある人のたぐるのみなつどひて、日本文明の花下に樂しのうたけに與る如き時代は、必ずや到來の其時はあるであらう。

## 第十一章 結 論

『自然美論』の著者ジョン・ラボックは、セネカの語を引いて言つて居る、

『セネカ云へり、若し或人が諸君に、數多の地面を與へんに、諸君は恩惠を受けたりと云ふなるべし然らば諸君はこの神より與へられたる地球は一大恩惠なることを否定し能はざるなり。又若し諸君に美はしき色を以て飾られ、大理石を以て輝ける家を與へられんに、諸君は此家を目して、小なる恵みとは云はざるべし。神は火災破滅の憂へなき廣大なる家を、諸君の爲めに建てたまへり。其家は晝は太陽、夜は月星を以て輝く屋根を戴けり。諸君が呼吸せる空氣、諸君が中に在つて活動し得る光明、諸君の生命を維持する血液、諸君の餓を満たす食物は、之れ皆何處より來りしや。眞の神は管に數頭の牛のみならず、あらゆる獸類の群を、全世界に渡れる牧場に配布し、且つ又豊かに各種の食物を供し給へり。神は四季の循環を定め、又斯くも多くの技術、種々の音聲、或は樂を作る爲めに、斯くも多くの美音を工夫し給へり。吾人の腦中にはあらゆる時代、あらゆる技術の種子を播き給へり。而して吾等の神は不明の中よりして、吾人の智識を發揚し給ふと。自然の價値は實に斯くの如し。』

人類中の如何なる優れた名文章家をして、其得意の筆を揮はしむるとも、この大いなる地球、其上に輝く日月星、其等の美と其巧妙極まる神の經營について、充分の贊稱を表はするに足るものはないであらう。左様にも美しくして、萬事備はらざるなき大家屋を賜つた人類といふものは、其中に於て果して如何の行動を爲しつゝあつたであらうか。彼等の多數は、恰も我儘なる驕兒等が、父祖の親切

なる教訓をも輕侮して、勝手に増長を爲し、其家屋を打壊し、其庭園を荒廢し、其豊富なる田畑をも不毛に歸し、而して其食糧が不足なりとか、その分配が不公平なりとか、或は誰れか、が狡猾なりとか、様々の理由と名目の下に、醜惡極まる兄弟喧嘩を演出して、親達の悲痛をも敢て意とせず、益々其凶暴を長じなかつたか。甚しきは自分等の不仕鱈を棚に上げて、神の經營を惡口し、或は一層の惡念を醸して神を否定し、この世界は人間の凶暴が、自由自在に處置して、何等の罰も當らぬものなりと、單に口頭に唱道するのみならず、心にも實際左様に思惟するに至らなかつたか。

見よ斯る間に、地球の半ば、或は以上に渡つてすらも、而も其最も人間の生活に格好なりし綠野と清川との地方は、沙漠若くは之に等しき荒地となつたではないか。自然力、それは神の經營から來た已むなき變遷もあつたとしても、前述せる如く大部分は、人間といふ不仕鱈なる動物共の、喰荒しに本づかぬはない。然るにも拘らず是等罪惡增長史を以て、正當なる人類の進歩史たるかの如く誇稱したるもの、何等の驕慢か潜越か、或は愚蒙か、斯くの如くして改むるなく、益々其罪惡を大規模にし、其口實を巧妙化し、人類の良心を抑壓し、神の仁慈を蔽塞して已まなかつたなら、地球の老衰死滅、同時に人類其ものも、恰も害虫等が其枯死せしめた草木上に、其殘骸をこびりつかしむる如く、死滅し去る外はないであらう。

神は人間を愛するが故に、一定範圍の自由を與へた。然るに其自由の爲めに驕慢して、遂に此背神



的大罪惡の造成に至つた。是に於て流石寛容の神も默視に忍びず、人類と地球との救済の爲めに、其斯る時の用意にこそはと、神が豫て東方海中の孤島裡に養成せられた其神國と神民族とを興して、其大事業に従事せしめられたもの、それが今度の日本國家の大奮起といふものである。即ち從來の人類の驕慢が生んだあらゆる邪念妄想と、其産物たる禍神を退治して、人類を神の正純なる思想に返し、以て地球荒廢の修理、又其生命の恢復、即ち若返りの爲めに人類の全力を合集せしめ、兄弟鬩争の愚を罷めて、人類全體の積極的福祉の爲めに猛進せしめん其中心指導の任務をば、之を執らしめ給はん其準備の築成と、其威力の發揚の爲めに、有史未曾有の大戦闘の前に起たしめ給へるもの、これが今度の日本國家と國民の奮起なるものである。

之が爲めには日本國家の兒等は、其紅き血潮を献せねばならぬ。けれども神は其愛する人間の爲めに、實に幾くの血を瀝ぎ給へるか。日本民族は神の眷屬なるが故に、神の如く其尊き血を瀝がねばならぬのである。日本民族の紅き血潮、そのみが全人類の爲めに、正しき歴史を書き直し得た時、それは永遠不滅の譽れではないか。

## 實例篇

日本國土の常若なる所以について、前來其理論めいたものを書陳べたが、續いて其實證を挙げ度いこれに對して私共は高日本地方の風土を、主として記載するものは、それが日本國土の中心にして、最高地方であり、所謂山高く水清くして、日本風土の代表地區たることに於て、多くの資格を具備するからである。高日本地方とは、信濃を中心とする附近各地であるが、太平洋の夜が明けて、蒼茫萬里の浩波に洗はれたあざやかな太陽が、東に上りそめた時、日本島根の大部分は、まだ紫濃き霞の中に夢みつつあるが、その高頂部のみが、早く目覺めて、銀冠を正しながら、之を迎へて居る。その曉の光りに輝く邊りを、私共は高日本と呼ぶのである。橋南谿はその有名な遊記の中に書いて居る。

『日本は一つの島山にして、其島山の絶頂といふは、信濃國なり。それより四方へなだれ下り、東西の國あり、南北の國あり、南面北面、それ／＼の向き／＼あり』と。明治の夙き頃出來た『日本國盡し』といふ本には『龍の背骨の正真中、四方を包む十ヶ國、北は越後に其西は越中飛驒に、美濃の國南は三河遠江、駿河は僅に地を接し、東の方は甲斐武藏、之に加へて上野ぞ。』と信濃の部を歌つて居

る。日本國の絶頂にして、龍の脊骨の正真中に當る地方、これを高日本と呼ぶの應しきを思ふ。世界の廣き中でも、日本の國土位、氣候溫和、風光明媚にして、人間生活に取つて、恰適の所はないのであるが、其中でもこの高日本地方の如きは、山特に高く、水特に清く、大氣飽迄透朗にして、氣象の甚だ雄健なる、これ程の勝地は、他に多く求め難いのである。これに關聯して、北は日本海、南は東海に漫々たる青海白波を湛ふる所、これを此地方に一括する。

この地方は單に日本國土の、最高地方といふに止まらずして、其地理的構造に於て、亦一種獨異なるものを持つて居る。それは地理學者の説く所に據ると、日本國土は、もと亞細亞大陸の、東方に連亘せる一大山脈であつたのが、或る時の地塊運動によつて、大陸と分離して、東方海上にはみ出し、その際彎曲して中央部に裂溝を生じたるもの。今糸魚川から信濃を通じて相模灘の中央に達する一大地裂帯は、その痕跡に屬するのである。一時其處には海水の浸入をも見たのであるが、後に海中火山が隆起し、更に後に富士帶の火山脈が、活動を起したのであると。この説に據れば、この地方は富士帶といふ一大火山脈を以て、日本國土の東西兩翼を熔接するの地位に當るのであるが、此地方は實に日本の左右兩方面を統合するもの、重要中心部を形成して居る。而してこの地理的重要性に伴つて、日本の人文發展の上にも、この地方は亦特殊の役目を働いて居る。

### 高日本地方山水の布置

この地方第一の特色は、高山峻嶺簇々として多きことである。西の方信濃飛驒の間から、越中越後の境に互つて、一大山脈が南北に縦走して居る。これは日本本土を横斷する大山脈であつて、中央山脈と呼ばれ、中部山岳國立公園は、その北部一半である。そこには穂高・槍等一萬尺以上の高山と、之に次ぐ高峰百餘座を數へ、古く日本文學の中に歌はれた越中立山の如きも、其の主なる一つに屬する。其南方には乗鞍・御嶽等の靈嶽を起して居る。この山脈は其高度に於ては、富士山に及ばざるも多數の大嶽巨巒を收容して、複雑なる山嶽美を構成して居る。南方甲斐・駿河と信濃の境に於て一高脈の走るのは、赤石山系と名づけられ、富士に次ぐ高度の赤石山(三、一九〇米)を盟主として、東駒仙丈其他一萬尺以上の高山七座を列ぬる豪壯の一脈である。其間千古斧鉞を知らぬ大森林を蓄へ、稀觀の深山幽谷を爲して居る。中央山脈の南部とこの赤石山系との間に、又一高山脈の挾まつて、南北に走るがあるが、これは木曾山脈と呼ばれ、山姿莊嚴にして、中に八千八谿を藏すと謂はるる西駒ヶ嶽を其首座とする。更に東方上野信濃の境に互つて、那須火山脈が走り、有名な活火山淺間は其間に屹立して盛んに白煙を吐いて居る。又東南信濃と武藏の間には、關東山脈といふが連り、甲武信ヶ嶽金峰山等を起して居る。

是等東西山脈の間に侵入して、國土熔接の任務に當つたのが、富士帶火山脈である。日本々土第一の高山富士を噴出した後、餘勢少しく衰へたるも、信濃の境に入つて、忽ち巖々たる八峰の大嶽八ヶ岳を起し、續いて蓼科を生み、北に延びて、信濃を南北に分つ筑摩山脈を築き、更に北に迫つて戸隠飯綱・黒姫等の名山を起し、越後に入つて妙高・焼山等となる。

高山峻嶺の間到的處清泉を湧かし、湛へては諏訪や野尻や青木三湖や、其他の湖沼となり、注いで犀・千曲・天龍・木曾・黒部・常願寺・神通其他の巨川となり、所謂山高く水長く、幾多の好風光と健勝地を形成し、而して其間又相當の平野の肥沃なるがあつて、嘉穀を産し、以て瑞穂國の瑞穂國たるを證して居るのである。

### 人間生活の最好適處

此地方が如何に人間生活の適處であるかについて、最も有力なる所以の資格を列擧すると、第一には日光の優良、第二には景色の佳絶、第三には空氣の良好、第四には水質の清冽、第五には氣候の快適、第六には温泉の豊富、第七には食料の好佳、等である。第一、日光の優良、此地方の日光は他地方に比して、最も優良なる健康性を持つ。それは紫外線の多量なるからである。紫外線が生理上重要作用を有し、血液の循環を佳良にし、ビタミンDを發生し、病原菌の抵抗力を強くする等の効能

多きは、今日の科學の證明する所、長野縣の調査する所に據るに、此地方の高山高原等は、紫外線の波長最も人體に適し、他の平原低野等の到底企及すべからざる所を有する。第二、景色の佳絶、好き景色を見れば、心自ら樂しむ。心の樂しみは、血液を淨化し健康を上進する。心身同時に益を受くるは、景色の好きより大いなるはない。然るに此地方の景色は、尋常一様の好きではない。山は其崇巖を極め、水は其清瑩を極めて居るのであるから、其効能たるや、亦最大級を使用するの外ないのである。第三、空氣の良好、高山地方であるから、空氣の良好なるは謂ふを要せぬ如くであるが、而もこの地方の空氣たるや、北よりする日本海風と、南よりする太平洋風とが、この日本の高頂部に於て一種の旋回調和を爲し、茲に特別の醇良なる瀨氣を醸造する。科學の實驗も此地方の空氣が、人間の健康に最も適當の陰イオンを發生するの多量なることを證して居る。平原地方の人々が、信州等の高原に入つて、直ちに氣分の爽快を覚え、口を開いて大きな呼吸を試みんとする所以は、このイオンの關係であるといふ。第四、水質の清冽、空氣と同時に人間の身體に取つて、重大の影響を及ぼすものは水である。社會生活の複雑と共に、自然の清水といふものは、甚だ得難くなつた。これは人間の健康に餘程の關係を及ぼして居ることと思ふ。然るに此地方は天然の良水が、山頂山麓到る處に湧いて滾々として居る。第五、氣候の快適、この地方は夏時最も清涼にして、炎熱都塵の客、この地方に至つて初めて濁流を溯つて、清水の邊に達したるの心持を覺える。山高水長の間、綠樹清蔭、萬斛の涼

味を送らぬはない。第六、温泉の豊富、火山脈の多き所、従つて温泉の湧出最も多い。疾患を恢復し健康を増進するに、温泉程有効のものはない。科學は之に對しても、炭酸泉・硫黄泉・其他含有物に因つて種々の區分と効能づけを示し、最近はやラヂウム・エマナチオンの發生等をも説くに至つたが恐くはそれ以上の未發見的理由が、猶多く存在するであらう。一浴すれば心身共に快適にして、殆ど別天地に遊ぶの感がある。第七、食料の好佳、此地方食料品の多くは、美味にして滋養量が多い。これも紫外線の照射の多きに原因するといふ。既に日光・空氣・温泉等に於て、最良の食物を飽喫する上、又普通の所謂食物に於ても、美味にして滋養多きものが得られることは、人間強健増進上最大の要素の具備に當る。

### 此地方と四季の特色

此地方の特色は夏時に、最も發揮せらるるが、此地方は實際に日本國土の夏座敷に當り、或は到る處に聳立する高山大嶽の巔を極めて、其處に千里浩然の氣を吸ふべく、或は深山の懷、長川の畔、自然が湧かす不老の泉に浸つて一年の塵垢悉く之を洗滌し、心寛く體胖かにして、悠然として欄に凭るべく、或は雲樹森々碧殿寒き神社等に詣でて、六根凡て清淨化するも宜く、或は深碧湖上、身を扁舟と爲して、水中の天を渡るも宜く、或は白沫の激流に輕舟を飛ばして、滿袖のしぶきを絞るも悪しか

らざるべく、『木曾の御嶽さん夏でも寒い、拾やりたや足袋添えて』の俚話の、沿く日本全國に傳誦せらるるも、炎熱塵裡の客が、如何に高山清蔭の地に憧憬れつつあるかを語るに外ならぬ。是れ何ぞ木曾の御嶽山に止まらんや、此地方到る處これ有り。秋候の爽快、秋天は更に好い。四時透朗を以て誇りとする此の地方の空氣は、秋に至つて實に玲瓏澄澈、そのすが／＼しさの極に達する。四山は悉く錦繡を着け、高頂は驪て銀冠を被り、紅黃絢爛諸色映發の美觀は、日本一は愚か、今や世界一を以て許されて居る。是に於て仰いで蒼天の窮りなきを觀、俯しては大塊の莊嚴茲に至るを看れば、何人か佇徊願望して、去り能ふものがあらう。冬の絶美、冬となつては寒い。高日本地方は土地の高きだけ寒氣は酷い、雪も多い。北に近き程雪量は多く、信濃の北邊や越後の地方や冬期は都會も人家も雪中に埋れる。けに『山里は冬ぞ寂しさまさりける、人目も草もかれぬと思へば』併し乍ら天の公平なるや、寒き所には又寒さに對する慰藉が與へられて居る。例の温泉こそはそれである。温泉の愉快は四時共に愉快であるが、冬の寒き朝や夕こそ、温泉のうれしさがしみ／＼と身には沁みる。殊に近來はスキーが、盛んになつて來た。スキー程痛快な運動はない。他時登攀に容易でない山嶺原野も、一面の銀嶺銀盤と化して、天馬空を行くが如く、殆ど自由に駛走される。そして其疲れたる身を所在の温泉に浸らすの快味は、蓋しスキー客以外の容易に想像し得ぬ所であらう。山の美はそれが全部白雪を被つた冬期に於て、崇高の極に達することはいふ迄もない。山々が皆白衣となり、而して朝光

が、その一々に金冠をかむらせる時、山は最早地上のものでなくして、神靈そのものである。新緑の秀麗、春は日本國土の最も優美にして愉快なる時、併し高日本地方は土地高くして春の到ること遅い其代りには春信一度到れば梅櫻桃李一時に笑ふ。そうして花雲を透かしての雪嶺の輝きは、又何等の崇美ぞや。初夏に近く新緑となれば、之は最も以て爽快の觀である。紅葉の美は美であるが、新緑には更に別種の美がある。緑中様々の緑ありといふ。其緑りの若さに於て、或は多少の白味、多少の赤味を加へ、若さに伴ふ優しさ艶々しさが相交織して、其の麗しさ、到底形容の及ぶ所ではない。山巒多く樹林多き此地方新緑の美こそは、心ある人々の觀賞に値すべきである。日月の眞光輝、高日本地方の四季の特色を叙して、茲に忘れられぬ一項は、高日本地方と日月の景觀といふことである。日や月や毎日毎夜之を仰がぬはないとしても、その眞に麗しく眞に尊き姿を拜するや、必しも容易ではない。然るに高日本地方に於て、日月は最上最崇の光輝を發揮する。日月の光輝は、天下變るなしとするも、之を受取るべき山川空氣等の状態が様々だからである。姨捨山の觀月、それは古き昔から、名所となつて居た所であるが、單なる傳説に伴ふ名所といふではなくて、實際に月光の清亮無比なる所があつたのである。即ち高日本地方の大和島根の高處なるや、空氣透朗、秋季に於て殊に其最高點に達し、茲に月光をして澄澈玲瓏掬すべきに至らしむるのである。姨捨のみならず、此の頃の高日本地方の好景色の處は、何れも月が美しい。日光に至つては月とは反對に、水分の多き處に於て、色彩

の最も美を呈し、東海の旭日の眞紅にして、日の丸の國旗を、直に天空に染め出せる如きの美觀は、高日本地方に於ては殆ど見られぬ所であるが、而も高山の絶巔に立つて、早且に所謂御來光なるものを拜する時に於て、日光の莊嚴崇美は茲に極まる。これを見ずして、我れ太陽の崇麗を知り得たりといふも、決して許されぬであらう。又冬期から早春にかけて、日本アルプスや其の他の雪嶺が、曉天に眞紅の花を咲かせる時がある。天地は一白皎潔、濃淡の藍色がその陰影を爲すのみ。この時天半に鮮々たる紅るの大花が、燃ゆるなどいふ形容では、その麗しさの到底現れぬ崇美さを以て出現するのである。實に日も月も高日本地方に於て、最上の面目を示す。日本國土の如何に地の崇麗を極むるかは、是に至つて感謝限りなきものがあり、従つて油然たる日本精神は湧く。

### 此地方の優美性と歴史關係

日本の最高地方にして、特に山嶽重疊たる所、若し其處に人間の亂暴性が働いたならば、山は禿け水は涸るゝことに於て、最も地面の荒廢を誘ひ易き土地であるのに、此地方の實際がそれに反して、山緑りにして水碧く、高山の懷にも亦幽美を極むる御花畑は存して、種々の珍花を咲かしむる如き、其處には矢張り、我等の祖先等の、土地に對する大いなる愛護が働いたことを看取出来る。第一に見よ信濃の殆ど中心地方に近き、小縣郡東鹽田村には、國幣中社生島足島神社は祭られて居るが、生島

足島の二柱の神が、日本國土の魂として祭らるゝ神であつて、此神に於て日本民族の國土愛護性の代表せられて居ることは、前述せる如くである。これは更に同神社の部に詳説するが、要するに斯る理想の夙に掛けられたる此地方であることは、此地方の高山大川が、能く其優美性を永久に保存せし所以を解することが出来るであらう。第二には此地方には、天の岩戸開きに關聯する天の手力雄の命を祀つた戸隠神社の存在に於て、其處には最も夙く天孫族の來住を語つて居る。此地方が高天ヶ原の所在地であつたとの説も最近には、行はるゝに至つたが、それは兎に角として、天の岩戸開き關係の諸神が、最も大いなる規模に於て祭らるゝものは、全國中に於て、信濃の戸隠山である。茲に高天ヶ原的理想を以ての國土經營の、夙く行はれたことを、窺知することが出来る。今日でも戸隠神社は武神としての外、農業保護の神であり、毎年其豊凶の御籤は、必ず適中すと信ぜられつゝある如き、古時の信仰と、此神を通じての天孫族の努力を、物語るものである。早魃時の雨乞に、其處の御池の水が、汲み行かるゝなども、其關係に於て、あらう。又信濃の千曲河畔に近き、更級郡八幡村に祭らるゝ八幡社の祭神は武水別神であるが、これは水分の神である。其奥社はもと聖山の頂上に存したと傳へ、其處には近くまで、樹周數間に達する大原始林を存し、清水滾々として、其林樹の間から湧出して居たのである。又諏訪湖畔には、世に知られた官幣大社諏訪神社の上下兩社が存するが、これは古事記に記された健御名方の命を奉祀した古社である。出雲族の土地經營は、天孫族のそれとは、若干

趣を異にするものがあるが、元來は天孫族も出雲族も、其祖を一にする極めて近き血族であり、殊に御名方の命の、天孫族と和ぎをされた以來、天孫族と協力しての經營振りは、傳説等の上にも存して居る。日本書記を見れば次の記載がある『一書に曰く、素盞鳴尊のたまはく、韓郷の島は是れ金銀あり、若し吾兒の御する國に、浮寶あらざらしめば佳からじとのたまひて、乃ち鬚髯を抜きて之を散つ即ち杉となる。又胸毛を抜散つ、是れ檜となる。尻毛は是れ被となる、眉毛は是れ櫛となる。己にしてその用ふべきを定む。乃ち之を稱てのたまはく杉と櫛禪とこの兩つの樹は以て浮寶を爲べし。檜は以て瑞宮の材を爲るべし。被は以て顯しき蒼生の奥津乘戸に將臥さん具に爲るべし。その噉ふへき八十木種皆能く播生よ。時に素盞鳴の尊の子を五十猛命妹。大屋津姫命次に抓津姫命凡てこの三はしらの神も、亦能く木種を分布す。即ち紀伊國に派し奉つる。然る後素盞鳴尊熊成の峰に居て遂に根の國に入りましぬ』この神話を見ても、出雲族の神々が、樹木の尊重、及び之が繁殖について如何に心を用ゐられたかといふことが想像出来る。その出雲族の有力者たる健御名方命の諏訪に鎮まつて、地方を經營せらるゝに當つて、樹木の尊重と其殖成に、大いなる盡力をせられたるべきは疑ひの存せぬ所である。諏訪神社に今も傳ふる御柱曳きなどの神事も、單に神社造營の用材尊重でなく、神の尊重し給へる大材の献納、又其切出しの儀式の莊重なども、樹木伐採の嚴重なる監督を意味したものではなからうかと思ふ。いづれにしても天孫族の樹木神聖觀と伴つて、此地方經營に樹木の擁護の

存したることを窺知するに足ると思ふ。

信濃四大川の一にして、日本第一の長流たる信濃川の前身千曲川は、其源流を八ヶ岳金峰山等の方面に持つが、此地方は諏訪神の經營地方に屬する。他の一川天龍川は、信濃の南部伊那地方を潤して遠江に下るのであるが、其發源は諏訪湖であり、其湖水供給の水流宮川は又八ヶ岳の西方に源泉を持つ。四大川の一つ犀川の上流は、梓川であつて、これは今の上高地から發出して來るが、この上高地には穂高神社の奥社が存し、其處に祭らるゝ穂高見の命は、神武天皇の御叔父に當らせ給ふ。此神は海神海津見命の嫡流に在し、松本平を初め信濃の各地の湖沼を排水整理して、大いに瑞穂國の爲めに美田を開拓された神で、其國土經營上に最も細心の注意が拂はれたことは、傳説等からも想像の出来る所である。其事は前の日本の健勝要地に詳説を試みた如くである。又四大川の一つたる木曾川の上流地方には御嶽山上に御嶽神社が祭られ、原始林の多く保存せられたるは『木曾の御嶽さん夏でも寒い』の俗謡の示す如くである。其他越中方面を見れば黒部や諸川の源流たる立山には、立山神社が祭られ、神通川の上流飛騨高山附近には、水無神社が祭られて居る。是等を以て如何に日本民族の祖先等の奉神思想が、其山川國土の優美性に關係するの深きかを知るべく、其等の詳細に至つては、猶ほ其個々の部に於て、之を記すに努めるであらう。

### 千曲川流域地方

信濃は恰も鬼胡桃を割つたやうな格好に、幾多の山脈が各地を取巻いて、小區劃に分つて居る。其區劃線の最も中央部を走るのが、例の富士帶火山脈で、之が信濃を先づ南北に二分する。千曲川流域は、即ち其北部一半に屬するものである。八ヶ岳の東方面から出發して、北流して、纏て南信濃の方から來る犀川と合して、信濃川となり、越後に入つて日本海に注ぐ。千曲川の東部には又活火山淺間を有する山嶺が、蜿蜒連亘して北に走り、胡桃の一方の外殻を爲して居る。千曲の上流地方を佐久の平と呼び、小諸の町が其中心を爲し、中流地方を小縣の平と爲し、上田市が其中心を爲し、犀千曲二流の合する處を、善光寺平と爲し、長野市を其中心とする。皆若干の區劃を爲す。東京を發して關東平原を北に走れる信越線は、碓氷嶺を貫いて、小諸に出で、上田を経て長野に達し、更に北して越後に入り、日本海濱直江津に東折して、新潟に着する。此間小諸に小海線を分岐し、これは千曲の源流地方に溯り、甲斐に入り、八ヶ岳の南麓高原を経て、小淵澤に中央本線に合する。又犀千曲合流地方に近き篠ノ井驛に、篠ノ井線を分岐し、冠着山を貫いて、南信濃に入り、其中心松本を経て、鹽尻に中央本線に合し、右して名古屋、左して新宿に達する。千曲流域の特徴は東西兩火山脈に挟まれた平原上に、活氣の横溢すること、それは活火山淺間の噴煙を見せつけられて居ると共に、其麓を初

め、上田市の西部、長野市の南部、又東部等に、多くの温泉群を存し、人をして地の温味を感じしむる視面なるに因る。而もこんな胡桃のやうな山川が、若し他民族のやうな御粗末な取扱に置かれたなら、夙くの昔に中味は喰荒されて、外殻のみが骨立するであらうに、東西の山々皆緑り麗しく、其平野は稻桑葱鬱として、嘉穀美蘭を産して已まざるもの、其保つ所を思はねばならぬ。佐久には松原湖邊諏訪神を祭る松原神社があり、小縣には例の國つ魂生島足島の國幣社があり、北の方戸隠山には、天の岩戸開の諸神が祭られて居、又犀千曲合流地方には、海神族の嫡統穗高見の命別名宇津志日金折命縁故の神社日鉋刀賣神社、又御姉君玉依姫命を奉祀した神社が在す。是等の本源に續いて所在の大神社、其他の歴史的諸事項、仔細に検討して、日本國土精神の優秀を證せぬはない。日本佛教渡來の最古の記念物たる善光寺が普通なら殘骸斷礎ともなるべきを、依然として生氣豊かに、今日の東方大復活時代に遭遇せるなどは、是等國土精神生々發育の最好土地に其軀を托したお蔭ではないか。

碓氷嶺、群馬平原から、頭を廻らせば、北の方遠く連なる白雲の上に、翠微の嶺々高く浮んで、さながら天上の國を望む心地がする。古へに高天ヶ原とは、蓋しかゝる所を指して名づけむかと思はるゝ程の眺めである。其中に秀づる一峰の煙を吐くは、淺間が嶽である。淺間の此方、巖山峨々たるこそは碓氷嶺。夙く日本書紀にも記された名だゝる峻嶺。日本のいと強き者を名に負ひ給へる日本武の尊、東方のまつろはぬ者共を伐ち平けての歸途、この山嶺を越え給ふ。頂上に登つて、雲煙漂渺の來

し方を顧み給ひ、走水の瀬戸に、我躬に代つて命を捧げ給へる橋媛を戀ひ給ひつゝ、「我妻はや」と仰せしより、後世東方を『あづま』とは呼ぶに至つたと傳ふる、その剛健勇武、日本民族を代表し給ふ皇子、その優しき御心根、日本民族を代表し給ふ皇子、その皇子を長く此高嶺と共に偲び參らすも如何に應しき大關ぞや。書紀にも『山高く谷深く、翠嶺萬重、人杖に倚るも舛り難し、巖嶮しく磴紆り、長峰數千馬は頓響て進まず。』と記されたる、その難關の儘にして存する幾千載、交通機關の發達したる今日に在りても、大小二十六個の隧道を穿つて汽車はアプト式の喘ぎく上る。洵に神ながらの風吹く高山清川の國の第一關門として、先づ敬意を捧ぐるに足る。汽車は頂上近く停つて、其處に熊の平と名くる一驛が設けられて居る、東京を距る三時間程。車窓を開けば、涼風颯として面を撲つ若し夫れ歩いて山頂を極むれば、關八洲の蒼海煙の如く眼下に迫つて、眞に壯絶美絶、剛健勇武にして心情優美なる日本健兒の血は跳る。輕井澤町、夏時東京の頭腦を、殆ど茲に移してそれをして最銳最利に砥ぎすまさしむるものは、輕井澤の高原である。昔時碓氷嶺下の要驛として、殷賑の巷であつた輕井澤も、鐵道全通の後には、一時うら寂びの町に歸したが、其後外人の此地を絶好の避暑地と撰定してから、次第に内地人も之に做ひ、今日にては外人却て別處に去つて、東京頭腦の競ひ集る避暑地とはなり、往時とは又別種の天地を現出し、世界的に著名な土地とはなつた。現在戸數一千六百、人口七千五百、面積一五方軒海拔三千八十呎の高地に位し、四方山を繞らし中に茫々たる原野を開き、



各所に別荘及町民の住宅が散在して居る。空氣清淨にして酷暑も七十五度を超ゆるは稀れ、水流最も清澄である。避暑の滞在方法は、旅館生活、別荘生活、借間生活の三種であるが、旅館には、つるや油屋、藤屋等あり、洋式には萬平ホテルがある。碓氷の紅葉、碓氷嶺の紅葉は山水の奇と相映て天下の一大美觀とされて居るが、輕井澤より碓氷嶺の絶頂に至れば熊野神社がある。碓氷の溪谷を脚下に妙義の奇峯を始め、秩父甲斐の連山前に聳え、榛名・赤城の諸山東北に連亘し、廣瀨なる關東平野は南に展開し、満山の紅葉裡に透見して何とも云へぬ絶景である。小瀨温泉、輕井澤驛より草津電鐵小瀨驛下車、淺間山の東南麓、海拔一千二百米の高處にあり、眺望開濶。星野温泉、輕井澤驛より五軒五淺間山麓海拔一千米餘の雄大な高原上に位する天然温泉で、弱アルカリ泉・消器化病・リウマチス婦人病等に有効、水空氣共に清澄。附近に千ヶ瀧遊園地あり、避暑又淺間登山準備地として東京其他の浴客が多い。旅館には明星館（電話輕井澤五二番）がある。鹽壺温泉、前記星野温泉横裏にあり、鹽壺温泉旅館がある。輕井澤には草津電氣鐵道株式會社があつて、碓氷高原を経て、輕井澤と草津温泉とを聯ね霧積・新鹿澤・鹿澤・萬座等の諸温泉へも聯絡が出来る。

淺間山『小諸出て見りや淺間の嶽に今日も煙りが三筋立つ』活火山淺間は餘りにも名高い。山容も實に雄偉で、其岳麓の廣大にして、青天高く白氣を吐く所、一種の壯美を感じる。富士・那須兩火山帶の衝に當つて、三重式の火山である。第一次の火山は黒斑山（二四〇五米）と牙山（二二〇〇米）

を連ねた半圓形を爲し、その火口中に第二の火山前掛山（二四九二米）が噴出し、現在火口（二二五四二米）は第三回に生じたものである。火口は俗にお釜と云ひ、ほゞ圓形を爲し、周圍十町餘、深さは八百尺前後、口底の裂罅より噴出する白煙は、猛然として天に叫ぶが如くである。又山の東腹の一小火山は、小淺間と稱して、本山の寄生火山である。登山道は五六あるも、主なるものは小諸口・杵掛口・追分口の三つである。小諸町、淺間岳の麓に在り、西に千曲川を帶ぶ。茲より小海線分岐して、甲州小淵澤に中央線と聯絡す。戸數二千餘、人口一萬五千。舊城址を公園とした懷古園は、老松の間から千曲の清流を俯瞰して趣致深く、園内島崎藤村の小諸古城碑は有名である。

菱野薬師温泉、小諸郊外菱野薬師温泉は、泉質の特効と旅館の設備及風光の佳絶に於て、浴客極めて多い。同温泉の歴史は頗る古く、元和三年小諸城主仙石兵部の息女、難疾を此温泉に治癒したるより堂宇及浴室を建設せしめ、一般民衆の入浴に便したのが、今の温泉旅館薬師館の營業の始である。後小諸城主牧野遠江守も頑固な臆病を此湯に癒し得た。其時の御殿は昭和元年迄残つて居たが、同館の新館は其處に建設された。又薬師館に隣接して常盤館といふ旅館がある。此地東に淺間の噴煙を望み、南西は佐久平を隔て、蓼科・八ヶ岳の雄姿を遠見し、眺望佳絶清水は谷間に流れ、槽氣は室に迫り、春の鶯、夏の杜鵑座らに聴き、秋の紅葉は云ふに及ばず、冬も雪の光り美しく、盛夏八十度を越えずして最好の避暑地たる外、四時皆快適の境である。又從來餘り世に知られなかつたが、淺間山登山に

は此温泉よりするが最も近く、頂上まで二里半、日歸りするに便利である。猶淺間の峯嶺き車坂峠を高峰に出で菱野に還るハイキングコースも最近賑つて居る。菱野薬師、淺間連峰に屬する高峰山の中腹、海拔一千餘米、老松鬱茂の高處に建てらる。如來は弘法大師の作と傳へ、今を距る一千餘年の前攝津の人音羽了源坊なる者茲に來り、窟の中に安置せるものといふ。鎌倉時代の初め、稻室左司といふ武士、負傷遁世して龍洞と號し諸國遍歴、この薬師の窟に宿し、南四町の所に靈泉を發見し、之に浴して多年の創痍を癒し、如來を其地に移し、湯壺を開いて里人に功德を頒つた、之がこの薬師如來及其湯の緣起であるが、兩彼岸の緣日には、附近は勿論、遠く新潟群馬の地方からも參拜の客陸續接踵する。【薬師館】薬師堂の直前にあつて薬師ヶ池に臨み、本館の外數棟の大規模の別館があり、凌雲閣は三層樓、百餘疊の大廣間を有し、客室完備し、寫眞暗室等の諸設備も整つて居る。兩館共附近に櫻數千本を植付たれば、數年後は北信に於る花の名所ともなるであらう。浴場は石造と鐵筋混凝土の合造で、冷温兩湯の入浴法の出来るやう近代式に設備され、温湯豊富に新陳代謝して、自然の温泉と毫も異らぬ。鑛泉の質は磷酸鹽碳酸鹽の外多量の鐵分を含有し、冷性及冷へより生ずる諸病、消渴・痔疾・子宮内膜炎・膾加答兒・疝氣・ロイマチス・外傷・火傷・胃腸病其他に効驗あり、冷症・痔疾等は如何の難症も全治する事從來の經驗の證する所といふ。小諸よりのバスは常盤館前を通り、薬師館に止まる。薬師館主荻原儀助氏村長に推され村務に盡瘁しつゝある。【常盤館】本館より、五號館

迄二層三層の銅板葺、大廣間・食堂等あり。現代式客室五十餘、何れも眺望と衛生に留意しあり、運動其他設備良く寫眞暗室等もある。浴場新築完成、浴槽は大理石を以てし、清淨にして温湯不絶流出温泉と同様である。館前の池には魚釣り等も出来る。諸病特に淋病・消渴・婦人病・痔疾は難病に顯効あり、又子持の湯とも稱し、子無き婦人週日の入浴にて妊娠する由。此地の温泉は從來とても療養本位の温泉場として知られ、最も經濟的にして、一般に喜ばれたるが、時局以來一層厚生方面に努力し貢献を期して居る、宿料は自炊六十錢以上九十錢、半自炊は之に飯代加算伺式は七十錢以上一圓五十錢賄付宿料は一圓五十錢以上四圓五十錢、食費は一食十五錢以上一圓、團體宿料は特に割引がある。高峰スキー場 淺間連峰の一部にして十二軒餘の地點、車坂峠附近一帶を稱し、東は黒斑山西は高峰山を望む鞍部地帯なれば、山岳スキーヤーの登攀者頗る増加し、林間スキー場として名高い。鑛泉より四軒、高峰第一スキー場乙女スロープに達す。ヒュッテ在り收容人員十名、初歩のスキーヤーに適す。乙女ヒュッテより四軒、淺間・黒斑・籠の登連山の尾根に依つて形成されたる大銀盤は、處女地山岳スキーヤーの勇躍に適し、高峰スキー場に達す。中央に天狗ヒュッテ在りて收容人員五十名。北方四軒高原地帯にして新鹿澤温泉に至り、西北方四軒赤ゾレ籠の登二二〇〇米の主峰暗の様な密林中をこぎ抜け、北アルプス・富士の雄大な眺めを見つゝ、舊鹿澤温泉に到る。

松原湖 小諸驛より中央線小淵澤に達する小海線を西に赴けば、岩村田、白田の諸都邑を過ぎ松原

湖驛に近く松原湖がある。湖水は小さいが水が極めて清澄で、周囲の山が鬱蒼として美しく、殊に八ヶ岳の大觀を背景としてゐる。海拔三千七百尺、輕井澤より高きこと六百尺、空氣は冷涼にして清淨酷暑も攝氏二十六度に達せず、最も避暑に適し、非常に健康地である。又八ヶ岳等の登山に適する。冬期は十二月中旬より湖水全面固く結氷し、些の危険個所なく、日本一のスケート場と稱せらる。

**諏訪神社** 猪名湖邊に諏訪神社あつて、健御名方命外二神を祭り、松原の宮と呼ばれる。神功皇后時代の創建と傳へ、松原湖をさながらの全神境として、美しく嚴かなるお宮である。【旅館】には

葛屋、佐久屋、宮本館、たばた鑛泉等がある。海ノ口温泉 同線海ノ口驛直前に所在し、而も空氣

清涼にして天然の風光を具備した海拔四千尺の高原温泉である。【旅館】には和泉屋、湯澤館等が

ある。野邊山原 省線は小海驛から更に千曲川の上流に溯り、所謂野邊山の高原を突過して甲州に出で小淵澤驛に合するが、野邊山原は海拔四千四百尺の高原で、野邊山驛は標高一千三百四十六米、日本鐵道線路中の最高驛である。(九百米以上の驛十七、一千米以上八、二三の甲州に屬する外多く信州にあり、而して一千米以上のものは皆小海線である。)原の廣さ四里北は北佐の盆地を雲霧の底として、淺間の噴煙を望み、西は八ヶ岳の舊噴火口も手に取る如くである。夏の避暑、冬のスキー、此地の如く佳なるは少い。

**上田市** 信越線は小諸驛より滋野、田中、大屋の各驛を経、上田驛となる。千曲川に沿ふ北信の平

野は、善光寺・小縣・佐久の三つに分たれるが、其の中央は小縣で、上田市は其の小縣平野の中心都會である。此地方は最も古く開け、信濃の國司は初め此地方に置かれた。附近には今も國分寺の址がある。天正十一年眞田昌幸この千曲川河岸嶮岨の地に城廓を築き、城下町を建設したのが上田市の起源である。昌幸・幸村の父子は大阪方に屬したが、昌幸の長男信幸は別れて徳川方に屬し、戦後上田城に封ぜられ、元和八年松代に移封した。大正八年市制施行現在戸數九千、人口四萬五千。古來より蠶絲業地として知られ生絲・蠶種の製造多く、長野縣染織講習所・蠶業取締所支所・蠶業試験場支場・小縣蠶業學校の他、國立上田蠶絲専門學校があつて、蠶絲の都たる特徴を示し、附近鹽尻村の如きは古き蠶種業の發展地で、今も藤本蠶業株式會社の如き、大會社其他蠶種業者が多い。此地方又温泉に富み、其他史蹟名勝甚だ多い。【旅館】石森別館、上村館等。上田蠶絲専門學校 同校の存在は上田市の一つの誇りであるが、同校は明治四十四年國立を以て上田市に開校、養蠶・製絲の二科より成り。大正八年新に絹紡織科を加へ、東京高等蠶絲學校、京都高等蠶絲學校と共に、斯學最高の學府で、斯業の發達に貢献したこと甚だ大。大正八年七月今上天皇太子に在した時同校に行啓。上田地方交通 上田市を中心として、電車上田温泉電軌株式會社、丸子鐵道株式會社、の二つがあり、上田温泉電軌は市の東方に赴くものと、西方との二線あつて、西方は上田・田澤温泉を聯絡し、途中上田原より分岐して別所温泉に赴く。東方は上田市より長村眞田に至り、途中本原から岐れて傍陽に

達す。丸子電車は上田市東部を發して、省線大屋驛を經、西行して丸子町に達す。乗合自動車は各方面に通ずる。菅平 上田驛より上田電鐵で眞田に至り(三十八分)、眞田よりバス(溫電)四十分、冬期は菅平口(途中六軒の處)より馬橋の便あり。上信國境に聳ゆる猫岳と四阿山の麓に展開された海拔五千尺の高原スキー場として世に知られてゐるが、春から秋へかけての菅平は、花や紅葉や、又雄大麗美な繪巻物の展開である。菅平スキー場の雄大なるスロープは、斯界の權威である。雪質は粉雪の目が多く、積雪は一米内外、全部芝生の高原であるから極く僅少な雪量でも、完全に滑走出来るのが茲の特色である。海拔二一九五米の猫岳登高は、上り三時間、下り一時間半。頂上には物凄しい樹氷の怪物がある。下り六軒の滑降は豪快無比、スキーの眞の味は此處で初めて味はれる。【旅館】は菅平ホテル、別館望岳莊、鐵道省山の家等がある。

生島足島神社 (國幣中社) 長野縣小縣郡東鹽田村大字下の郷に鎮座、上田驛より(上田電鐵)十六分、下の郷驛下車、南約三〇〇米。我等の生命を托する大和島根の其國土の魂なる神の、みすゝかる信濃の國に祀られ在すことを、日の本の國の人々は忘れてはならぬ。その神ぞ生島足島の神である。生島足島の大神は一に生國魂神と申し、我が大八洲の御魂の神として祀らるゝ神で、神武天皇か御即位の後、皇祖を御祭りになつた折、神籬を樹て、お祀りになつた朝廷御守護の生島足島の神と御同神である。宮中生島の御巫が稱へた延喜式の祝詞の中にも『皇神等の敷き坐す島の八十島は、谷嶮の狭

渡る極み、鹽沫の留る限り、狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、島の八十島墜つることなく、皇神等の依さし奉りて、國の光りを輝かせ給ひ』とある如く、洪大無邊の神徳の神で、天皇が新に都を奠め給ふ時は、必ず此の二柱の大神をその地に鎮座遊ばされ、明治天皇東京遷都の時も、神祇官にて祭られた。この大神等が大八洲の國土の中央なる信濃の地に鎮まり給へること、悠久の昔を語るものである。社傳にも健御名方富命諏訪の地に赴かす時この地に留りて二柱の大神を親しく祀られたと云ひ特殊な神事其他に面影を残して居る。科野の國造である神八井耳命の孫建五百建命が、當國の祭政を掌られた古記に徴しても、本社由緒の古き事が知られる。大銅の年朝廷より神戸一戸を封ぜられしを初め、醍醐天皇の御代、名神大に列せらる等歷朝の崇敬は篤く、武將等の寄進少からず。眞田昌幸は神領を寄進し社殿一部を再建した。爾來地方民崇敬の中心となり、祭祀は續けられ、明治三十二年七月國幣中社に列せらる。例祭は九月十九日だが、古來より傳ふる特殊神事は小祭に多い。神域 境内四千五百三十八坪、境外千九百五十二坪で、境内には大池あり、朱塗の社殿は二つの島の内外に點在し、本殿の御諸造りを初め、中門など古雅なものがある。その配置と參道の方向等總て古社の趣を具へて居る。遠く殿上・獨鈷・夫神・文神の諸山を眺め、鹽田盆地の東隅に位する神域は、杉澤等の老樹鬱蒼として茂り崇嚴の氣を漂はせ、小鳥は枝に囀り、神鳩群れ飛び、池に數百の緋鯉戯るゝ等、眞に神境の感がある。昭和十二年度より五ヶ年に亘り國費十八萬圓を以て本殿以下の改修竣成、神苑

一萬坪を加へて境域莊嚴を増し、美事なる御宮居とはなつた。猶今秋下の郷驛より本社迄五間幅の專用道路が開かれる。

**別所温泉** 上田といへば直ぐ別所温泉が聯想される程、上田と別所はつきものである。上田驛より(上田電鐵)三十一分、男神・女神・愛宕の翠巒三方を圍み、東方開けて、上田市街を隔て、淺間山の噴煙を望む所、最も絶景である。花屋旅館からの眺めなど殊に佳い。海拔五四〇米の高地だけれども、山や森林の調和で氣候中和を得、暑寒共に適す。その地域全體を『名所別所』として、縣から保存の指定を受けて居る。景行天皇の御代、日本武尊御東征の途次この地を通られ、七ヶ所に温泉を開いて『七苦離の湯』と名づけられたに初まると傳へる。湯は無色透明で硫化水素臭を有し、湯量豊富。温度は攝氏四十六度内外、醫學上人體に最適とされる。治効は、慢性胃腸病・神經衰弱・氣管支カタル・婦人病・坐骨神經痛・其他各種の皮膚病には神効あり、更に飲用適應症として肥胖病・上氣道のカタル・喘息・胃腸弛緩症・肝臟鬱血等に特效證明され、又病後恢復期の療養地としては、最も適當なる温泉場。時局以來は各旅館協力して料理の兼業を廢止し、只管厚生療養本位の温泉場たることに全力を盡して居る。浴場に石湯・大師湯・大湯・玄齋湯の四ヶ所の共同浴場と・各旅館に内湯がある

【高温泉試掘】別所温泉組合にては、日本温泉協會の幹旋により昨年十月帝大工學博士加藤武夫氏を聘し地質調査の結果大いなる高温泉脈の存在が明白となつたので、近く温泉協會主催にて一般公衆の

療養に供する爲め試掘を實行することになつて居る。菅平と別所 菅平スキーと別所温泉のつきものなるは勿論、ハイキングコースとしても、菅平と別所とは必ず聯帶的であるのは、温泉を俟つて凡べての風光は其生命を深められるからである。【旅館】には花屋ホテル(電別所一三・三一番)柏屋本館(電別所一一番)柏屋別荘(電二一番)等がある。宿料は一泊二食三圓より五圓五十錢、晝食料は右の半額、滞在一泊三食付二圓二十錢より三圓迄。北向觀音堂 別所温泉に存在する北向觀音堂は、古來厄除觀音として有名であるが、こは淳和天皇天長二年延曆寺の座主慈覺大師勅命を奉じて東下奉安の觀音と傳へ、當時常樂安樂長樂の三寺及び四院を營み、所謂七堂伽藍の地と稱せられたるが、後冷泉天皇の御宇平維茂戸隱鬼女退治の時茲に詣で、其厄年を拂ひ且加護によつて大功を奏したとて寺坊を増建し、爾來厄除觀音として一般の崇仰篤きに至つた。別當常樂寺は天臺宗の巨刹、境内の多寶塔は國寶となつて居る。田澤温泉 上田驛より温電四十分の西方三里、冠者岳の南麓溪谷、閑雅な温泉場。海拔二千二百尺、夏期避暑に適し低廉を主眼とし、心安き保養場所である。旅館は升屋、たまりや。沓掛温泉 田澤から近く、男神山の西麓にある靜寂な温泉上田驛よりバス温電四十五分、湯は稍低温だが、皮膚病や各種の神經痛に特効がある。旅館 おもとや、叶屋等。

**鹿教湯温泉** (長野縣小縣郡西内村) 中央アルプスの東麓、大鹽・靈泉寺温泉等と共に一温泉郷をなす。信越線大屋驛で丸子鐵道に乗り換へ、終點丸子町驛に下車乗合自動車によつて來るを順とする

中央線下諏訪驛より省營バスで、和田嶺を突破して丸子町に来て、それから温泉へ来るも宜い。丸子町驛前から温泉迄自動車凡そ四十分。往昔一獵師が鹿を射損して山谷深く尋ね入りたるに、鹿は矢疵を受けたまゝ、水たまりに浴して居た、其處を調べたら、温泉であつたので、爾來世に知られて鹿教の湯と名づけられたが、其鹿は文珠菩薩の化身であつたとの傳説を持つて居る。無色透明無味無臭の鹽類泉、攝氏四十度、動脈硬化症・中風・リウマチス・神經痛・脚氣の如き腦及神經系に關聯した病氣に卓効がある。特に中風・リウマチス・神經痛等は専門大家の手で癒りかねた人も此温泉で全治した者が少くない。醫界の大家佐多博士は其著『腦溢血の豫防と療養』に此温泉を推賞、委しく記してある。此の外に河原湯と云ふ高温の熱泉も場所を同うして湧出して居り、疝氣・寸白・胃腸・痔疾・婦人病等に特効がある。清幽深谷の溪流のやうな鹿教川に枕んで、この山境に意外な高樓の立竝ぶに會へばさながら龍宮城に來た心地がする。川上高く架する奇古な五臺橋を渡つて、林樹畫も小暗き文珠堂に詣づるあたり、全くの神仙境である。湯の宿司る人々も、純樸親切で、少しも商賣的の壓味なく、まことに伸びやかな、居心地の好い湯治場である。清流の琴の音、それに和する河鹿の歌、涼しき夢に目覺れば、前山には郭公が鳴いて居る。一浴して樓上に苦茗を啜る氣分は何とも云へぬ。大浴場建築 鹿教湯温泉組合は今回村と共同を以て工費一萬圓を計上浴場の改造を爲すことに決した。場所は現在の處。 美しが原 筑摩アルプス高原上、信濃全國の山々から富士をも見渡す壯觀はいふ

迄もなく、其處の躑躅の花盛りは又格別である。茲からは約三里で、手頃な登高地である。附近名勝【文珠堂】 行基菩薩の作を其の弟子圓行阿闍梨が此の清淨境に安置したるに始まる由緒古き堂で入浴者は此の境内を逍遙することを殆ど日課の様にしてゐる。【五臺橋】 文珠堂に到る途中の鹿教湯川に架したるもので、夏季橋上に涼をとらば三伏の炎熱も忽ちに消え失せる。 鹿教湯スキー場 鹿教湯温泉から七町、麗怪な唐松の樹氷群をめぐらす方十萬餘坪の別天地で、一步南に移行すれば、三才山峠を隔て、日本アルプスの展望臺『美ヶ原』高原スキー地帯がある。 旅館は、いづみや旅館（電西内九番甲） 角屋（電西内六番乙）、龜屋（電西内六番甲）、鶴屋、中村屋（電西内二番）、山屋ホテル、藤屋（電西内九番乙）、齋藤（電西内三番甲乙）、鹿教湯温泉スキー俱樂部（電西内六番ノ乙）、【宿料】 旅館（一泊三食賄付）四圓、三圓、二圓五十錢、自炊（一泊、食事なし）一圓二十錢、九十五錢、七十錢、其他蚊帳、コタツ布團、寝巻、薪料若干づゝ、半自炊（何式）御飯、料理は註文に應じ調理。 靈泉寺温泉 丸子町を距る十軒、鹿教湯と同じ西内村地籍にあり、海拔二千三百呎翠巒緑樹の間の自然境一千餘年前平維茂將軍の發見と傳へる。旅館は火災後再建面目を一新したが、出湯は昔の面影を残して床しい旅館には中屋旅館がある。

上山田温泉 信越線戸倉からバスで五分、千曲川を渡つた山紫水明郷。新興三十餘年に過ぎないが交通の至便と明媚幽邃な自然郷に恵まれ、躍進的發展を遂げ、今や戸數約三百、温泉の掘鑿から經營

萬事に盡力せる上山田温泉組合と上山田温泉株式會社が中心となつて、旅館業者を初め各種の商工業者の組合を統制し、理想的強健地帯の完成に努力を續けてゐる。泉質は硫黄泉で諸病に有効だが、就中リウマチス・外傷・火傷・皮膚病・子宮病・腺病・諸般の神經性疾患・胃腸病等に特効がある。陸軍療養所 温泉部落から離れて、近代式の大きな建築物がある。是は上山田村から陸軍へ献納した宇都宮衛戍病院上山田陸軍轉地療養所で、上山田村では風光明媚の郷土と豊富なる温泉を利用し、祖國の爲めに奮闘して名譽の傷痕を蒙れる白衣の勇士等に貢献せんと、昭和九年四月、二千坪の敷地と四萬圓の工費を投じて病舎その他を建設し、軍部に献納した所、陸軍では大に感謝し、更に病舎を増築内部の設備を完成し、翌春より傷病勇士を收容、着々其成績を現はしてゐるのである。【温泉療養相談所】上山田温泉にては温泉と氣象の關係を研究する十年、斯方面造詣深き森茂重氏に委託して、無料療養相談所を設け、浴客の健康増進に資して居る。【浴客安全設備】上山田・戸倉兩温泉合して浴客の安全を期する爲め、名所八王子山の洞窟を利用、工費數萬圓を以て縦七尺五寸幅六尺六寸長さ五十米の完全なる防空壕を築工した。【興亞會館新設】上山田温泉組合にては歸郷傷病兵、歸郷拓十諸氏の爲め、道場兼實費宿泊所を建設せんと工費二十五萬圓、二百人收容の豫算を以て、北村甚兵衛、小出保一郎、若林正春、宮本光儀、荻原甲諸氏を主催に拓務商工二省に運動中であるが、之が出来れば新興温泉療養場として一段の光彩を發揮すること、期待されて居る。【國旗掲揚塔】上山田温泉

組合にては二千六百年記念事業として組合青年會主催にて昭和十五年秋より一人一錢貯金の結果得たる八千圓を以て舊城址にコンクリート二階建の國旗掲揚塔を新設、塔内に大東亞戰爭名譽の戦死者の寫眞を初め温泉開發功勞者の寫眞を掲げてゐる。【旅館】には清風園(電一六・五六番)、圓山莊(電一九番)、龜屋本店(電二・一〇二番)、上山田ホテル(電五番)、荻原館(電一八番)、ねづみや(電二〇番)、みよしや(電三番)、瀧の湯(電三〇番)、有田屋(電六番)、更級館(電三六番)、中央ホテル(電一〇番)、佐久屋(電三五番)、柏屋(電四番)、牡丹屋(電四〇番)、鶴舞館(電一二番)、扇屋(電三一番)、金與館(電三七番)、清風園別館(電一六・五六番)、壽館(電二四番)、大和館(電二七番)、下かめや。【宿料】三圓以上八圓、戸倉温泉 前記上山田温泉と同地域にあれど、郡を異にし村を異にして居る。上山田温泉と同じく新興澁淵たる青春温泉である。【旅館】笹屋ホテル(電戸倉三・一〇)、上山田(電一七)、上田館(戸倉電二七)高津屋(同電一七)、玉屋(同電二四)、千曲館(同電四四)、戸倉ホテル(同電二三)、豊田屋(同電一四)、都屋(同電三九)。【宿料】三圓以上八圓。八幡神社(縣社) 八幡社の存在で其名を得た更級郡八幡村は東方千曲川に沿ひ、戸數一千、人口五千、八幡社附近は町形を爲して居る、八幡社は本名は縣社武水別神社であるが、八幡社として遠近に知られて居る。祭神は武水別命、譽田別命、息長足比賣命、比賣大神を合祀して居る。式内の古社で、孝元天皇御宇の創建と傳へ、境内廣大、老樹鬱葱、南北信に亘つて崇信者多く、參詣絡繹絶えず、信州でも屈指の神社である。毎年十二月一日より十四日迄大

祭で、非常な賑ひを呈する。上山田、戸倉等の温泉にも近くバスがある。姨捨山 月の名所姨捨山は天下に名高い。篠ノ井線姨捨驛の直ぐ下三町程の所にある。汽車中からも一寸姨石の上の方が見えるが、上から見てはさもない所なので、人は多く氣づかずに過ぎてしまふ。けれど下の方から見れば随分大きな岩石で、高さ五丈、横十間餘もあつて、其傍に觀月堂があり、桃の觀世音、放光院長樂寺といふ小寺もある。此邊は馬場嶺の中腹に當り、冠着山を右手に眺め、眼下には善光寺平遠く開け、犀・千曲の二川其合する所の川中島、又遙かに長野善光寺を望み、姨捨停車場からは省線の鐵道驛七つを見るといふ珍しい場所である。仲秋の夜、月は東方山嶺中鏡臺山と稱する其形恰も鏡臺に似た美しい山の、頂の少し中凹みになつた所から上る。此夜は遠近觀月の客集つて非常の賑ひを呈し、文人墨客など、種々の雅會を催す。茲から上山田温泉にバスが聯絡する。篠ノ井町 此町は今日信越中央兩線の分岐點として、重要地位に在る如く、古昔に於ても南北兩勢力の交渉地點として重要であつた。有名な川中島合戦が、此地に近く戦はれたのみならず、木曾義仲の擧兵第一に、越後の城氏の討伐軍と戦つたのも、此地である。歴史の回顧者に取つては重要地區である。今日では春夏秋蠶の飼育が盛んで、又苹果の名産地である。觀覽順路 篠ノ井驛を發着地として、川中島古戰場遊覽個所を三種に別つ。【第一】篠ノ井―康樂寺―長谷觀音―横田河原―雨宮ノ渡―妻女山―松代―典厩寺―洞合橋―八幡原―諸角豊後守墓―陣場河原―戸部大神宮―應永庚申塔(約一日程)。【第二】篠ノ井―

勸助墓―松代―典厩寺―洞合橋―八幡原―戸部大神宮(約三時間程)。【第三】篠ノ井―將軍塚―久米路橋―岩倉壊れ―下平國寶觀音―村山國寶子安觀音―中尾山奇勝(約五時間程)。【大塔合戦古戰場】篠ノ井驛附近。【横田河原】篠ノ井橋附近の千曲川沿岸は、養和元年木曾義仲が平軍の將越後の城資永の討伐軍を打破つた古戰場で、事は源平盛衰記平家物語等に詳である。又橋から下流約一キロの場所が、永祿四年九月十日の朝未明、上杉軍が鞭聲蕭々として渡河した雨宮の渡である。【康樂寺】鹽崎村にある。木曾義仲の軍師として有名な大夫房覺明(西佛)は、義仲戦歿後比叡山に上り、名を淨覺と改め、其後親鸞上人の法弟となり、越後路に従ひ、後こゝに留まつて建曆二年創建したのがこの白鳥山報恩院康樂寺といふ。松代町 (長野縣埴科郡) 信越線屋代驛より長野電鐵十五分松代町がある。昔海津城の築かれた要害、東南は山、西北は開け、千曲川を隔て、川中島を望む。長野市より三里、篠ノ井驛より一里半。共にバスがある。天文六年武田信玄の占領に歸し、山本晴幸城を築き海津城と名づけた。徳川氏に至り、元和八年眞田信幸上田から移封、十萬石を食み、信濃一の大藩であつた。現在戸數二千、人口一萬。製絲・養蠶・養魚等殖産の業に盛んに又多くの人才を出して居る。象山神社 日本開國指導の大元勳として、佐久間象山先生の名を知らぬものはないが、その象山先生は文政八年二月十一日を以て、松代の裏町(今有樂町と書く)に生れた。父は一學、號を神溪と云ひ、松代侯に仕へて五人扶持の小臣であつた。先生の生家は取毀されたが、先生を慕ふ郷國其の他各



方面の人々發起にて、象山神社創設に従事、資金十數萬圓を以て、先生生誕地の地續きに三千坪の地を求め、總檜材桃山式の極めて壯麗なる本殿・社務所・紀念館等を營み、昭和十三年秋竣成、縣社に列す。【象山先生の墓】先生遭難後屍を埋めて京都妙心寺地域に建てられて居るが、大正十一年松代町有志者は更に同町日蓮宗蓮乘寺の佐久間家菩提寺境内に象山先生竝に其息恪氏の墓を建てた。

【聚遠樓址】象山先生が弟子吉田松陰渡海事件に連座し、安政元年から九年の間蟄居の遺跡。善光寺平を一時に收め得るを以て、先生が聚遠樓と名づけたもの、唯だ其建物の現存せぬのは遺憾。【象山】象山先生の號となつて天下に響いた其象山は、先生宅址の直ぐ南方にあつて、急峻な小山である。頂上に象山先生の碑があり、最も眺望に富んで居る。【海津城址】驛の直ぐ向ふ側にある。歴史に名高き名城も、廢藩の際樓閣殿堂或は焼失取壊され、今はたゞ本丸の石疊が残つて居るのみ。【川中島古戰場】川中島合戦は餘りに有名であるが、武田上杉兩者の間の合戦は四回あり、其中永祿四年八月のものが、一番の激戦である。此時越後の謙信は將卒一萬三千を引具して、海津城の南西に當る妻女山に押上つて陣を取つた。それが八月の十六日、二十四日に至り甲斐の信玄は一萬七千餘を率ゐて、更級郡鹽崎に到着、茶臼山に陣し、二十九日海津城に入つた。九月九日信玄兵を二手に分け、一手妻女山を攻撃し、信玄自ら八千の兵を以て、千曲川を渡り八幡原に陣し、越後勢の退却を擁せんとして居た。謙信早くも此計略を覺り、夜中全軍を率ゐ、枚を含んで千曲川を渡り、信玄の陣營近く追つた

夜明けて敵軍の咫尺に現れたるに驚いた武田勢を、越後勢をめぐりて突込み、茲に空前の大激戦となつたのである。謙信は自ら刀を振つて信玄の本營に乘込み、其肩に切りつけた。それが有名な山陽の『鞭聲肅々夜渡河、曉見千兵擁大牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇』である。昔川中島といつたのは廣い範圍で、この地方平地の大部分を包括したのであるが、今川中島といへば、更級郡青木島村丹波島橋の南方、篠ノ井驛の東北方に當る、犀千曲二川の相合する平野地方をいふ。其中八幡原と小島田村附近一帯の地をいふので、永祿四年の激戦は、即ち此地方で行はれたのである。其處に八幡神社の小祠がある。其境内は今縣の保存史蹟となつて居る。其處に立つて南妻女山松代を望み、又右方遙に茶臼山を望めば、當年の形勢を回顧することが出来る。此八幡原は長野市から二里、南からしては篠ノ井驛、共に乗合自動車がある。【妻女山】松代町の西端埴科郡清野村に屬す。登山容易。

【茶臼山】

長野市から二里二十町、更級郡信里村大字有旅地籍。

長野市

長野縣廳所在地、信濃一圓を管す。市の廣さ東西一里二十五町、南北一里二十九町。戶數

一萬六千、人口八萬一千、市の最高所に善光寺あり、佛都と稱せらる。背後に飯綱・戸隠等の名山を負ひ、前面に犀・千曲の大川を繞らし、海拔四五〇米、形勝の地である。佛都として參拜客常に多く又縣政治の中心地として市内殷賑である。明治四年長野縣廳を置き、北信の一部を管し、九年松本なる筑摩縣を廢して長野縣に合併した。善光寺を頭首として、大門町、問御所、新田町、石堂町と一直

に南に下り、停車場近く、一折して之に達し、これを市の中央通りとす。東部に千歳町通り、西部に縣町通りが並行し、他の小街が是等を横に聯ねて居る。縣廳は縣町通りの中途から西折した妻科に在る。驛から善光寺迄十九町、中央通り其他各通りを経て、乗合自動車が行復して居る。一區五錢。又長野電鐵の電車は直ぐ驛の北側から市内を通じて東北走し、善光寺下驛から善光寺近く出られる。重なる機關としては、八十二銀行本店、長野貯蓄銀行、信濃教育會館、長野縣立圖書館、信濃毎日新聞赤十字支部病院、長野電鐵株式會社、長野溫泉自動車株式會社、長野電氣株式會社、其他一般存在の官公署各種機關は皆存在する。【旅館】犀北館（電話四三三五・四三三六・四三三七）縣町に在り、縣廳に近く善光寺に遠からず、建築優雅。貴賓室三棟、和室三十、洋室二、大廣間一、應接室二、浴室四寫眞暗室、理髮化粧室其ノ他完備。當旅館には又有名な象山祠及象山文庫がある。野尻湖ホテルは當店の直營。藤屋旅館（電話四三二八・九番）、扇屋（電話四三三八・九番）、大門町 一泊四圓。【長野電鐵】省線は信越線が南北に通じ、中央線に續く篠ノ井線は茲を發着點とする。又長野驛を中心として長野電鐵株式會社の電鐵が東方一帯に交通網を張つて居る。其長野線は市内を北に進み、吉田から東折して須坂町に達し、河東線は信越線屋代驛から起り、北して松代町、須坂町、中野町を経て飯山町の對岸木島に達し、平穩線は中野町から平穩溫泉地方の入口湯田中に達し、以上三線は聯絡して居る。【善白鐵道】長野から善光寺溫泉まで開通。【飯山鐵道】長野驛の北へ二番目、豊野驛から社線飯山鐵道

が發し、飯山に通ずる所謂谷街道を過ぎて新潟縣に入り、十日町驛に於て省線に合する。乗合自動車は市内及附近各方面に通じて居る。【善光寺】（長野市所在）入皇三十代欽明天皇の十三年冬十月今より一千三百八十餘年の昔、百濟の聖明王佛像及經論等を奉る。天皇蘇我稻目をして試みに禮拜せしむ。稻目小墾田をばたの家に安置す。然るに國に疫癘起る。物部尾輿等奏して、國神の怒りを來せる所以として、遂に寺を燒き佛を難波の堀江に棄つ。（日本書紀）然るに後其佛像を負つて信濃の人吉田善光之を郷里伊奈の麻績に齎したが、家貧しく春の上に安置した。四十一年を経て、皇極天皇の元年、善光之を水内郡芋井郷、即ち今の長野の地に遷す。天皇佛を敬し、善光及其子善佐を禁裡に召し、伽藍建立の勅を賜ひ、甲斐信濃の兩國の田租を以て之に充て給ふ。斯くて巍然たる大伽藍出現して、善光の名に因み、善光寺とは名づけられたといふのである。孝德天皇の白鳳三年佛像を寶龕に納め、秘佛として封じさせ給ふ。善光仍て同型の佛像を鑄造し、これを前立本尊として七年毎に開帳することゝした。これが所謂お開帳なるものである。金堂 現在の善光寺金堂即ち本堂は、元祿十年の建築で高さ十丈二尺八寸、間口十七間餘、奥行二十九間二尺餘、柱の數八千八百十二本、建築の宏壯、構造の精巧、江戸時代建築物の代表と謂はれ、内務省の特別保護建造物となつて居る。【組織】善光寺の組織は大小寺院總て四十一ヶ寺より成り、之を別當職大勸進と、寺務職大本願二寺に統轄して居る。大勸進は天臺宗、大本願は淨土宗で、大勸進に屬するもの衆徒二十ヶ寺、妻戸五坊と云ひ、大本願に屬

するもの中衆十四坊といふ。【大勸進】山門の下西側に蓮池を隔て、寶閣の巍然たるがそれで、善光寺天臺宗直轄寺にして、一山の統領、本多善光（若麻績東人）を開基とし、歴代秘佛寶籠の鎖鑰を握り、餘人の手に委せず、以て一山を統率し來た。住職は東叡山又は比叡山から碩學高德を迎へる慣例である。現住職は清水谷恭順氏。明治十一年明治天皇東北御巡幸の際、茲を行在所に充てさせられ、明治三十五年大正天皇東宮に在した時、共に鶴駕を駐めさせられ、御親子三代に互り恩命を奉じたる如きは他に類例の乏しき所。御座所の跡は平素翠簾を掲げ、雲縹の青疊と相俟ち、拜觀人をして肅然襟を正さしめる。【大本願】淨土宗の別格寺で、仁王門西北筋堀の一廓、皇極天皇の御本願により善光寺伽藍造營の時、蘇我馬子の女都より下向して寺務を掌理したと傳へ、歴世上人と稱す。今の上人は大宮智榮上人と申す。戸隱神社（國幣小社）長野縣上水内郡戸隱村戸隱に鎮座 日本民族活動の第一光明を開きたる天の岩戸開き、その岩戸開き最大の活躍者たる天の手力雄命、天思兼命、天鈿女命等を祭祀する貴重神社は、信濃の國戸隱の山に在る。山は高さ一千九百米の靈嶽、天手力雄命を祀れる戸隱神社奥社は其中腹の所にあり、それから三十町下つて東南に天思兼命を祀つた中社があり、猶十町南に天思兼命の御子天表春命を祀つた寶光社があり、其中間に火の御子社があつて、天鈿女命を祀つた攝社がある。又奥社の側には九頭龍權現が祭つてある。一時戸隱は非常の盛大で主として天臺派の佛僧の勢力に歸し、日本國中一山三千坊なるものは、叡山・高野・戸隱と謂はるゝ程であつたが

明治に及んで兩部禁ぜられ、各坊は皆神官となつた。是より先き三院の別當として朱印千石の中五百石を領した顯光寺は、兩界山勸修院と稱せられたが、此時六十四世慈谿氏は還俗して、久山氏を名乗り、戸隱神社最初の宮司に補せられた。（今の宮司久山淑人氏の家）各坊の後は現在皆改修して參詣客の宿泊に便して居るが、中社に二十一軒、寶光社に十六軒あり、普通旅館と異つて一種の氣品を持つて居る。交通は長野驛前からバスが往復して居り、案内容易である。例祭は八月十四日中社、十五日奥社（供進使參向）、十六日寶光社で講徒は全國三十萬人に達し、各地から代表者を參詣せしめて居る。戸隱山めぐり 戸隱連峰は、奇巖兀立の奥社嶽（一九一一米）、五地藏嶽（一九九五米）を表山と呼び、高妻山（二三三三米）、乙妻山（二三一八米）を裏山と云ひ、登山口は奥社々務所より登るものと牧場口よりの二つである。多くは往きは奥社よりし、牧場口に歸ることにして居る。表山巡りは五十四間長屋・百間長屋・西窟・天狗の露路・髻刺岩・蟻の塔渡り・劔の双渡り等の險を経て八方睨みに達し、峰傳ひに一不動より牧場に下る。裏山をも攀づるには五地藏小屋に一泊、黎明高妻の頂上劔が峰に至り、御來迎を拜し、大日・虚空藏を經、牧場に引返す。戸隱スキー場 【飯綱スキー場】は二王坂より始まり、鐵礦泉を中心として廣大なる好スロープを有し、大平ヒュッテは宿泊・乾燥・食堂・浴場等完全なる設備がある。【泉水平】は瑪璃怪無兩山の間であり、雄大なる好スロープで、高等スキーヤーに適す。其他數ヶ處ある。【神秘の光景】本當に戸隱の神秘的な氣分に浸るには、中社又は

實光社に一泊して、夜明けの鳥の自然の音楽と、神社の朝勤めの樂の音と、神人相和の境に目覺めつゝ、曉の露を踏んで、奥社詣をするにある。奥社道には春は何千となき鶯が歌つて、宛ら音楽國を實現する。そうして名高き老杉の並樹と、原始的樹林との中を奥社に達し、清らかなる朝日に照されつゝ、神前に額づく時、我等は眞に神代の昔に立還り、神々の尊き教訓に涙流るゝものがある。【戸隠と火災復興】本年春不幸火を發して戸隠の中社及神官久山氏の宅は全焼に歸したが、熱心なる講徒を初め、信仰者等は、天の岩戸開き關係の御神々の宮を、此大時代に大一新せしめよと、忽ち新築の運動起り、目下専ら奔走中である。

**須坂町** 長野驛より東方長野電鐵二十五分、上高井郡の中央に位し、海拔三九〇米。東と南とに山岳を繞らし、西と北と善光寺平を控え、戸數四千五百、人口二萬五千。天武天皇白鳳二年大和の墨坂神社を分靈して産土神とし、墨坂郷と稱したるが、後須坂となつた。製絲工業最も盛大で、工場數四十餘、釜數四千、岡谷に次で縣下第二の製絲工場地である。之に伴ひ各種金融機關も發達し、農工業も振ひ、銀行・會社・倉庫等も増加した。町長田中邦治氏は、新進有爲の人物で大に町勢の振興に努め、信望最も篤い。墨坂神社（縣社）須坂町大字須坂にある。祭神は墨坂の神で、日本紀によると崇神天皇の勅祭神に在し、同天皇九年赤楯八枚と赤矛八竿を獻じて祀り給ふ。天武天皇白鳳二年大和國宇陀郡より此地に勸請奉齋、光仁天皇天應元年神領一戸を充奉された延喜式内社である。代々の領

主崇敬篤く、昭和三年宮内省より御大禮大嘗會掌典詰所四十六坪下賜、五年伊勢神宮御遷座後の古殿材料中、正殿棟木二本其他各點多數、造神宮使廳より下附となつた等、縣内稀な由緒を有して居る。【臥龍公園】驛の東南約十町、全山赤土、所々に怪奇の松が生へ、其間櫻樹躑躅を交へて妍を競つて居る。千曲の長流を隔て、善光寺平を望み、風光明媚の一大公園である。【龍ヶ池】臥龍山の南一萬五千坪の大池、池中に辨財天を祀り、池面鏡の如く、短艇を浮ぶべく、春花秋葉四季快適の地、【臥龍梅】臥龍山麓の名刹與國寺にあり、數百年の老樹、開花時は芳香數里の外に聞える。【米子瀧】須坂町の東南約四里米子村にある。二條の飛瀑、一を不動瀧と稱し高さ九十丈、幅七尺。他を權現瀧と云ひ、高さ七十丈、幅八尺、鞆山谷に鳴り壯絶である。【福島正則の墓】小布施驛から東十五町高井村高井寺にある。賤ヶ岳七本鎗の一人正則豊臣氏滅亡後廣島五十萬石から、四萬五千石を以て高井村に配流剃髮して馬齊と號し、居る事六年、寛永七年六十四歳で歿した。【旅館】大光樓、伊賀保。山田温泉 須坂町より東方十二軒、白根火山の西麓海拔一千米の所にある。松川の清流脚下に流れ、到る處數百尺の絶壁を爲す。食鹽泉で、ラヂウム含有量一リットル中一、六五九マツヘ、溫度攝氏四十五度乃至五十度、諸病に效驗あり、就中胃腸病・婦人病・痔疾には最も顯効を稱す。【旅館】山田館、風景館、藤井旅館、湯本旅館等。中野温泉 長野から長野電鐵三十八分、中野町は下高井郡の中心にあり、海拔五二二米土地高燥。信濃源氏高梨氏の居城、徳川氏に至つて幕府直轄地、現在戸數

二千、人口一萬。製絲織物・木製品・柳製品・染物等を以て有名、温泉は湯田中上河原からの引湯。  
關山國師出生地 中野町は關山國師の出生地として名高い。國師は禪宗妙心寺派の總本山京都妙心寺の開祖。

**平穩温泉郷** 平穩は長野縣下高井東山寄りの一村であるが、温泉に於て恵まれ、湯田中・安代・澁上林・地獄谷・發哺・熊の湯の七湯を有し、隣接穂波の角間温泉を加へて平穩八湯と云ひ、更に穂波の穂波温泉を加へて、山の内九湯ともいふ。其の奥地は所謂志賀高原で、岩菅・白根・笠岳・横手・志賀等諸山の麓野・高山・溪谷・湖沼・瀑布を點在する六里餘方の美高原で、春夏秋冬共に勝景を呈す。長野驛より長野電鐵五十分、終點湯田中驛下車。信越線屋代驛より長野電鐵一時間二十分、信越線豊野驛よりバス(川中島自動車)一時間、湯田中驛から安代、澁上林、各温泉いづれもバスがある。地獄谷温泉は澁から歩三軒又は上林から歩二軒、角間温泉は湯田中驛から大佛前でバス下車歩〇七軒、發哺温泉は湯田中驛から志賀高原行バス、發哺口(四十分)下車、歩五軒、熊の湯は湯田中驛から志賀高原行バス終點下車、歩四軒。湯田中温泉 北に山を負ひ、南星川に臨み、明朗な湯の街。十數軒の内湯旅館櫛比し、大湯外九ヶ所の共同浴場散在し、佐久間象山先生遺澤の碑、世界最大の觀音像等見るべきもの多い。泉質は食鹽含有硫黃泉、弱食鹽泉の二種。【旅館】十六軒、収容力一、五〇〇人。望山莊(電二二三)、丁子屋(電四七)、加命の湯(電五三)、萬屋(電四三・六六)、高田屋(電一〇四)、

大正園(電二二八)、中屋(電九)、中見崎(電二七)、裏大和屋(電五七)、おたに(電一〇九)、表大和屋(電四二)、坂木屋(電二〇七)、湯本(電五)、湯田中ホテル(電五九)、見崎屋(電三三)、島屋(電八)。【宿料】一泊二食二圓半以上五圓、團體一泊一圓半より、滞在には御伺自炊式の經濟便法あり。安代温泉 星川の溪流に沿ひ、大湯を中央に風雅な内湯旅館が七軒、山の湯の情緒がある。【泉質効能】石膏含有弱食鹽泉、溫度攝氏六十度、外傷・諸神經病・胃腸病等。【旅館】七軒、収容力六五〇人。萬屋(電一九)、山口屋(電三・一五五)、山崎屋(電二二五)、ます屋(電二二)、安代館(電二一〇)、塵表閣支店(電一〇二)。【宿料】湯田中と同じ。澁温泉 北に山陵を負ひ、南星川の清流に臨み、氣樂な山峽の湯治場。安代と軒つゞき二十數軒の内湯旅館と、大湯外十ヶ所の共同浴場とで、湯街氣分豊かである。温泉寺藥師等遊覽地多く、南星川清流に臨めば、散歩は自然に延びる遊園地あり。【泉質効能】石膏含有弱食鹽泉、單純泉の二種、溫度攝氏七十七度、効能湯田中と同じ。【旅館】二十五軒、収容力二、五〇〇人。いかりや(電一三二)、石の湯(電六四)、西山館(電一五〇)、かどや(電一三)、金具屋(電四三八)、龜屋(電六五)、大丸屋(電一六六)、つばたや(電二八)、小澤屋(電一四四)、熊ヶ谷館(電一五六)、山本館(電一・一三九)、大和屋(電三五)、まる屋(電五四)、まつ屋(電六八)、丸本(電一三四)、こく屋(電二五)、小石屋(電一三六)、さかへ屋(電一六九)、湯本(電三〇)、白銀屋(電一七四)、澁ホテル(電七四)、ひし屋(電七)、もとや(電二一八)、丸善、丸本、初清。【宿料】湯田中と同じ。上林温泉 海拔二八〇〇

尺、三方山に囲まれ、北信の五岳アルプス連峰綽の如く西方に展開し閑雅な地。殊に春櫻秋葉は一入  
樂み深い。志賀高原の探勝門戸で、温泉プール廣業寺等には杖曳くもの多い。【泉質】單純泉、効能  
安代と同じ。【旅館】三軒、收容力五〇〇人。上林ホテル(電一四九二〇〇)、塵表閣(電一〇二)、關屋  
【宿料】一泊二食二圓五十錢以上五圓、中食約半額。地獄谷 上林から溪谷に沿ふて平坦な山路を  
徒歩十五町、河床より濛々と數十丈の湯煙を噴出してゐる。轟々たる音響山溪にこだまして、實に壯  
觀、天然記念物指定である。【泉質】食鹽含有石膏性苦味泉。【旅館】後樂館。發哺温泉 上林か  
ら二里半、海拔五三〇〇尺、上信・信越・信飛・國境の山々バノラマの如く眼前に展開し、景觀頗る  
雄大。附近に火地獄の奇觀あり、岩菅登山の足溜り、スキーマン志賀高原滞在の根據地。【泉質】硫  
黄泉、單純泉の二種、溫度攝氏八十度、効能湯田中に同じ。【旅館】收容力三〇〇人。藥師の湯、天  
狗の湯、一泊二圓五十錢位。熊の湯 上林から二里半、海拔五六〇〇尺、笠岳山麓にあり、志賀高  
原滞在スキーマン活躍の本據。【泉質】苦味性硫黄泉。【旅館】愛山館、收容力二百人。一泊二圓五  
十錢位。角間温泉 澁温泉から六七町、角間川の對岸にあり、閑雅質朴な湯治場。昔から『脚氣角  
間の湯で癒る』との評判を持つ。【泉質】弱鹽類泉、溫度六十度、胃腸病・脚氣・神經衰弱・火傷に  
効あり、眼病にも宜いと謂はれる。【旅館】和泉屋、養田屋、越後屋(内湯あり、電湯田中一五六)、一泊  
二圓五十錢―四圓位。穗波温泉 湯田中から直ぐ近く、横湯川と角間川の落合に近き河床中に湧出

せる新温泉である。【泉質】鹽類泉・胃腸病・疝氣・リウマチス等に効く。【旅館】穗波館。上林  
ホテル・仙壽閣 長野電鐵株式會社の經營に成る大規模の旅館である。【設備】和洋折衷近代式三層  
樓の宏壯な建築を本館とし第一別館、第二別館も亦和洋折衷の瀟灑な三層樓。大廣間、萬人風呂、温  
泉プール、貸切風呂、食堂、談話室等設備凡べて備はり、一日の清遊客の爲めには本館一階・二階の  
廣間が解放せられ、低廉な入園料でラヂオと茶菓のサービスをする。縣營上林青少年宿泊所 長野  
縣の經營として、長野電鐵の引受建設せる三光道場は、建築費五萬圓を以て上林ホテルの直下に近く  
竣成、收容百人、宿泊ベット一人八十錢、食料實費自炊可能、多數は割引あり、團體申込の事。志  
賀高原 熊の湯温泉の東にある志賀山(海拔二、〇三五米)を中心に、東は大沼池、西は琵琶池に至る  
一帯の高原地帯で、樹林・巖石・池沼・温泉等勝件具備の自然境、夏はキャンピング、冬はスキー、  
地として世間に知られた健勝地で、丸池湖畔に縣營觀光ホテルも出來、道路も出來、近く又青年宿泊  
練習所も出來る。此高原から遙かに北信五岳や日本アルプスを望む大觀は繪の如くで、秋の紅葉は又  
一層の眺めである。【旅館】志賀高原温泉ホテル。【ヒュッテ】丸池ヒュッテ、琵琶池ヒュッテ、志  
賀ヒュッテ、石ノ湯山莊。一泊一圓半位。大觀世音 湯田中温泉近く彌勒山建立の護國聖觀世音は  
昭和三年八月起工、地上より合計一百三十一尺の巨體で、銅體觀世音像として世界一といふ。野尻  
湖 柏原驛より四料、バス一二分、長野の北方柏原驛に近く野尻湖がある。諏訪湖に次ぐ湖水で、周

圍一七・五軒(四里強)、面積四・一六ヶ軒、海拔七二〇軒、深さ最深部三十七米、湖水は藍色清澄である。湖中に一小島あつて琵琶島と名づけ、宇賀神社辨財天を祀る。黒姫・妙高・斑尾・戸隠・飯綱等の諸山を周圍に望み、風光悽婉、夏季最も清涼である。謙信の宿將宇佐美駿河守定行、謙信の従弟長尾政景の反心を察し、共に舟を浮べて野尻湖上に遊び、遂に政景を抱いて水中に没し禍根を絶つたといふ史話を傳へて居る。其墓が湖中琵琶島に在る。【湖上遊覽】モーターボート、貸ボート、ヨット、和船等あり、遊覽者の便に供して居る。又湖水一周遊覽船ありて、湖畔名勝地を定期運航する。【水泳場】五十米のプール二ヶ所を設置しあり、一般學生其他自由游泳の便を圖る。【指定キャンプ場】一定の區域を指定し、一般使用者の便を圖り、野尻湖觀光協會にて斡旋する。縣營野尻湖ホテル(電野尻湖一一)長野縣縣營の觀光ホテルは、前年湖畔樅ヶ崎に新建された。經營は長野の犀北館が之に當る。食堂・展望臺・讀書室・浴室モーターボート・ヨット凡て備つて居る。飯山町―長野市を東北に距る八里、千曲川に沿ふ所謂谷道の要衝。冬時には積雪頗る多い。人口一萬。飯山鐵道が茲を起點として十日町に省線に合し、北越後へ方の捷路となつて居る。【正受庵】飯山驛より西へ三町、奈良澤の丘に在る。正受老人惠端藏主の白隠禪師を養つた遺跡として有名。野澤温泉 長野縣下高井郡村郷長野驛より(長野電鐵)一時間、終點木島驛下車、夫よりバス五十分、飯山鐵道野澤温泉驛から東三軒、東に毛無山、南に小菅山、北は鳥屋山を繞らし、西は開けて遙に五岳を見る。海

抜六〇〇米、避暑に適し、又スキー客に賑ふ。【泉質】温泉は遠く天曆年間に開け、湧出口を持つ二十五、アルカリ性硫黄黄泉と弱鹽類泉とあり、溫度攝氏九十度乃至百二十度の高温を有し、胃腸病・リウマチス・皮膚病・神経病・婦人病・痔疾等に効く。大湯・麻釜の湯・川原の湯・眞湯・寺湯・瀧の湯・横落の湯・新田の湯等の各湯がある。野澤スキー場 最好のスキー場で、年々來遊のスキーマンは約三萬人と稱せらる。野澤病院 同病院は醫學士片桐知從氏の經營で、整形外科専門の病院であるが、殊に其家傳たる骨接は有名で、野澤温泉の繁昌も元は其骨接治療者の集れるより初まつたと謂はれて居る。【旅館】野澤温泉ホテル(電野澤一一)、住吉屋(電五)、桐屋(電二〇)、常盤館(電二八)。一泊四圓―七圓位。松の山温泉 飯山鐵道越後丸驛から約二里に松の山温泉がある。七百米の深山だが、今は自動車の便があつて僅に一時間を要するのみである。【泉質】は硫化水素含有鹽類で、濕疹・癩癩質斯・痛風・婦人病・慢性皮膚病・坐骨神經痛其他に適するので、東西の浴客が多い。最近掘鑿の結果更に多量の温泉噴出があり、活氣を増した。和泉屋・千歳館其他數軒の旅館がある。

## 犀川流域地方

南信濃の最大平原松本平を犀川流域とする。西に中央山脈の峻嶺屏立し、東に筑摩山脈連亘し、中に沃野を貯へ、胡桃の一區劃を形成る。此地往古一大湖沼たりしもの、穂高見の命犀川を通じて排水整理して、之を美田と爲し給へりと傳説す。命を祭れる穂高神社は松本平の一都會穂高町に在り、其奥社は上高地穂高嶽の麓に存す。天武天皇此地に帝都を遷さんと志し給ひ、其準備御着手あらせられし旨、日本書紀に見ゆ。松本平の首邑、松本市は信濃全國の中心に當るのみならず、日本全國の略ほ中心に相當する。篠ノ井線は松本より大糸線を分岐し、松本平の諸都會を聯絡して、越後糸魚川に達せんとし、途中若干の未成を残して、完成に近づきつゝある。三驛目の鹽尻に至つて、中央本線に合し東新宿、西名古屋に至る。松本平温泉多く、松本附近に浅間山邊あり。上高地に同地及中の湯白骨あり、有明山下に中房あり。北に葛、小谷等があり、中央山岳國立公園の爲め、好個の健康浴場を提供して居る。

**松本市** 信濃の中心、同時に日本中心に位する有力都會で、東經一三七度、北緯三九度一四分に居る。此地開發頗る古く、聖武天皇の朝以來國司廳置かれ、國府と稱した。鎌倉幕府は小笠原氏を信濃守護に任じ、初め伊那に在つたが、後此地方に移り、小笠原氏種々に消長し、其後裔貞慶大に茲に

築いて、松本城と稱した。徳川氏に入つて水野、戸田各氏交代、明治維新後筑摩縣を置き、南信各郡及飛騨一國を管したが、九年筑摩縣を長野縣に合併し、縣廳は長野のみとなつた。戸數約一万六千人口八万、筑摩縣當時大に新教育を起し、此の地信濃教育興隆の中心であつた。松本中學校、開智學校(國民學校)等は當時の氣象を傳ふるもの、後更に松本高等學校の設立あり、更に大學の建設が希望されて居る。明治四十五年市制施行以來、小里頼永引續き市長に在り、三十年の老市長として、稀有の存在であつたが、前年退隱、昨年死去。今は代議士百瀬渡氏市長の地位に在る。【松本城】舊城天守閣存在して國寶となつて居る。文祿年間城主石川玄蕃光長の建造に係る。五層櫓上眺望最佳。【交通】省線は前記の如くであるが松本電氣鐵道は一方浅間温泉と市を結合し、一方松本平を横斷して、上高地の入口島々に達し、其他私設伊那電氣鐵道は辰野より天龍峽に通じ、三信鐵道と聯絡して三州豊橋に出で、表日本と接續成り、表裏日本貫通線の中央地位を占むることゝなつた。乗合自動車は松本自動車其他の諸線ありて、山間部迄殆ど達せぬ地なく、飛騨國境安房峠に平湯高山線の同地自動車と聯絡し、北は明科驛に白馬自動車の山清路線に聯絡し、山清路に來る川中島自動車の長野線に接續し、南は辰野に赴き、伊那線に接するに至つた。【旅館】飯田屋(電二七・六一四)、飛騨屋(電四〇四)、【運動場】我國內でも有數の大運動場で、縣が今上陛下御成婚記念として設置せるもの、浅間温泉附近にある。【縣社筑摩神社】本殿の構造は室町時代代表的のものと國寶に指定。【縣社深志神社】祭



神は建御名方命・菅原道真、祭日は七月二十五日、市の盛大なる祭りの一つ。【縣社岡宮神社】祭神譽田別命・建御名方命・伊邪那美命。松本城の良鎮、祭日は五月二十三日、南の深志神社と共に盛大のお祭。【四柱神社】天之御中主神・高皇產靈神・神皇產靈神・天照大御神の四柱を祀る。明治五年東京に大教院創立、國體闡明神道興隆の爲め全國各府縣に事務分局を置き、松本神道事務分局は明治七年創設、四柱神殿を建立したのである。市内中樞の繩手にあり、参拜者多く、十月一・二・三の三日神道祭として松本市の最も賑かな御祭りである。【縣社沙田神社】近郊島立村三之宮祭神彦火々出見命外三柱。歴代松本城主の崇敬篤かつた。社内に物臭社あつて物臭太郎を祭る。長野縣護國神社 市北部にある。五千五百餘坪の廣大なる神域に莊嚴なる社殿を建て、縣内最も尊貴の靈域となつた。参拜の人々は、電車は淺間行運動場前下車、自動車は淺間行追分下車を便とする。毎年大祭は十一月六日、現宮司は倉島富次郎氏。淺間温泉 松本市東北郊一里、電車と自動車と絶えず馳せて、事實に市の一延長。犬養山の松林を負ひ海拔二千二百餘尺の高處に居り、松本平を隔て、中部山岳の全銀嶺を一眸に領し、温泉地として稀れなる大觀を有して居る。各旅館は三層四層の新式建築に、浴槽の改善、水道の布設、衛生の注意等文化的設備に力を盡し、登山・療養の諸客に取つて最も適當な温泉場となつた。【旅館】富貴の湯(電松本八七九・一五六)、小柳の湯(電五四八・四〇八)、鷹の湯(電二三八・五六九)、龜の湯(電一六九)、芳の湯(電三〇九)、飯田屋別館(電一五一五)、はやし屋(電一四八二)、葛の湯

(電八二八)、相生の湯(電一八〇二)、きづの湯(電一〇一四)、其他四十數戸皆内湯がある。山邊温泉 松本市東方一里、北方に山を負ひ、西南開けて眺望が好い。古への白糸温泉である。【旅館】和泉屋(電松本二〇四三)、嘉登家(電松本一八四一)、丸中(電松本二二三一)、古家 壽喜本(電松本二二三〇)、御母家温泉 山邊温泉の直ぐ西北にあつて、後へに山丘を負ひ、西南遠く開け、清雅な境。【旅館】牡丹之湯(内湯)、外數館。扉鑛泉と美しが原 山邊温泉から薄川に沿つて東方に溯り、扉峠の麓に達する所、扉(とびら)鑛泉がある。松本驛から十二軒、途中四軒前迄乗合がある。貸切は鑛泉旅館の直ぐ前に達する。清らかなる山溪の奥で、胃腸病に不思議の神効があるので、療養の客遠くより至る旅館は古く群鷹館扉鑛泉があり、少し下つて明神館がある。【スキーと鑛泉】冬は扉峠から美しが原 袴腰諏訪霧ヶ峰方面へかけてのスキー客に、此鑛泉は喜ばれて居る。美しが原 松本市の東方一帯の連山を筑摩山脈と稱し、其處に美しが原といふ一大臺原がある。千五百米乃至二千米前後の山嶺十數峰が連亘して、一高臺を形成り、不思議の別天地を爲し、南北信濃の中央に位する展望臺で、日本アルプスの豪壯を大觀し、富岳の靈容を遠望する。扉鑛泉からは三軒で其處の追平へ上る道がある。入山邊靈泉霞山莊 松本郊外(長野縣東筑摩郡入山邊村)松本驛から乗合三十分程の所に、入山邊靈泉があり、其處に霞山莊といふ温泉旅館が新築された。これは古く其處に湧出して靈効を歌はれた鑛泉であるが、帝大理學部教授木村健二郎理學博士及理學士小穴進兩氏の分拆試験によるに、泉質は石

含有土類炭酸泉に屬し、固形物總量二・八一六、ラドン含量〇・五三マツへ、中硫酸カルシウム〇・七九六重炭酸マグネシウム〇・七五二其他重炭酸カルシウム、硫酸ナトリウム、鹽化ナトリウム、鹽化カリウム、重炭酸第二鐵、硫酸アルミニウム、重炭酸第一鐵、硅酸、遊離炭酸等を含有し、飲用浴用共諸病に特效あり。溫泉博士として世界的に有名な、獨逸のヴォルマン博士は、昭和十四年七月視察、驚嘆を爲して曰く、「日本に來て、特別立派な鑛泉を見たのは、これが始めてある。日本に珍らしい存在のみならず、東洋に珍らしいものである。オーストリアにこの鑛泉に大層似たものがあるが併しこんな便利の土地ではない。鑛泉は非常に澤山の炭酸を含んで居り、又多量のカルシウム、マグネシウムと鐵とを含み、斯様に多量の炭酸を含んで居る爲めに、非常に心臟病に有効である。心臟病に効く鑛泉といふものは、世界にそう澤山はない。實に貴重な存在である。又胃腸病其他神經痛等にも大に有効である。私は東海道から甲州信州と澤山溫泉を案内されたがこれ程立派な鑛泉に會つたのは、日本へ來て初めてある。」と以て其靈泉と稱せらるゝの偶然ならぬを知るであらう。其處で片倉で其立派な鑛泉に相應しき立派な溫泉旅館を新築し公益を進めやうとしたのであるが、流石に完備したものである。土地は薄川に沿つた閑靜の場所、東西北の三方に、武石峰、王ヶ鼻、茶白山、前後鉢伏山など海拔二千米の高峰が聳え、西には四季雪を頂く日本アルプスの連嶺を一望に收め、薄川の清流には河鹿が夜毎に清らかな音を以て歌ふといふ俗塵を脱した境地である。美しが原高臺の眺望に至つては、前記の如く實に一種神秘的な景觀として、世に稱へられて居るが、其登山口は此靈泉の直ぐ手前に當り、茲を根據にすることが、最も便利である。諸病に靈驗ある上、斯の如き便利の地位にあり而も閑寂な氣分と、絶佳の風光とを兼ね有するものは、世に稀有といふべきである。折井庄九郎氏が管理の任に當り、最も懇切に之が經營に従つて居る。宿泊料は部屋代制度で、一人一圓五十錢乃至四圓、二人二圓五十錢乃至六圓、三人三圓乃至七圓、四人四圓五十錢乃至九圓、五人七圓乃至十圓の各種で食料は青白二種に分ち白は朝一圓、晝一圓四十錢、夕は二圓五十錢白は八十錢一圓二十錢二圓である。

一、一般病—糖尿病、バセドウ氏病、アレルギー性諸疾患、佝僂病。

消化器病—胃弱、胃腸障碍、胃腸加答兒、消化不良、便秘。

呼吸器病—喘息、上氣道(鼻、咽頭、喉頭)氣管)加答兒。

循環器病—血管硬化症。

泌尿生殖器病—腎臟病、腎孟炎、腎臟竝ニ尿道結石、尿道加答兒、磷酸鹽尿、尿酸鹽尿、利尿。

一、一般病—ロイマチス、糖尿病、肥胖病、外傷性諸障害、腺病質、消耗性疾患後ノ衰弱竝ニ恢復期。

循環器竝ニ血液病—心臟病、輕度ノ心臟不全、血管障害、高血壓、動脈硬化竝ニ狭心症、腹部多血症、貧血、萎黃病。

神經病—神經痛、神經過敏症、知覺麻痺、中樞性及末梢性麻痺、神經衰弱、ヒステリ、脊髄炎、脊髄癆。

泌尿生殖器病—陰萎、攝護腺炎、婦人生殖器病、月經閉止期ノ障害。

皮膚病—諸種ノ皮膚病、濕潤性皮膚發疹、濕疹、皮膚剝離、化膿性鈍性潰瘍。

**鹽尻町** 松本市の南一三軒八、松本平の南端、鹽尻嶺の麓。中央線の東西兩線及、篠ノ井線の分岐點に位する。昔中仙道の一要驛であつたが、新時代に入り更に盛んとなり、又鹽尻嶺を初め觀光地多く町長法學士堀内信一氏長く町政に努力して居る。【阿禮神社】同町にあり、式内大社、素盞鳴命を祀

る。〔御野立所記念碑〕鹽尻峠舊道頂上に立つ。明治十三年六月廿四日明治天皇御巡幸御野立の聖蹟。  
・桔梗ヶ原葡萄園 鹽尻峠北古戰場桔梗ヶ原は、今廣大なる葡萄園となり、年數十萬貫を産し、生葡萄酒の醸造高も日本一に達し、元老林五一氏の如き、醇良一千石を醸造す。又北原名田造氏の山羊飼育も、日本で有名。差切峽山清路 松本市の北篠ノ井線坂北驛より西方五軒の山間、麻績川の犀川に合流せんとする里餘の前、大巖山を突破して、兩岸絶壁を爲し、奇岩怪石水と相激して、其風光の妙遙に耶馬溪以上と稱せらるゝ、差切峽がある。坂北村では村長山本世喜夫氏を初め、大にこれが勝景發揚に努めて居る。其處を過ぎて山村を行くこと約四軒、又生坂村に有名な山清路がある。犀川の巨龍山を割いて、北に下る所、傳説の所謂泉小太郎犀龍に乗つて此山を斷切り、松本の海を北方に落したといふ其の處、巖壁峩々、飛流踏鞮、極めて奇觀。山清路から明科驛まで十六軒、乗合自動車がある。聖山と馬場峠 舊善光寺街道の一名所に馬場峠がある。篠ノ井線麻績驛の東北里餘、夏時の避暑、冬期スキーの適地である。其處から西聖山への尾根を上つて、滿洲國獨立の元勳たる川島浪速氏の山莊無聖庵がある。聖山の頂上には聖山神社がある。祭神は楯幣間戸神。

### 國立中部山岳公園（上高地）

昭和九年國立公園に指定された中部山岳國立公園は、中央山脈十七萬千二百町歩の山岳地帯で、北南

乗鞍から、北白馬、立山に至り、地籍は長野、岐阜、富山、新潟四縣に亘つて居る。中央山脈は南の方乗鞍（三〇二六米）に起り、北上して安房山、及此山脈唯一の活火山焼岳となり、梓の溪流を挟んで六百山及霞澤岳を對せしめ、主脈は北走して、穂高の連峰となり、此山脈第一の高峰奥穂高（三一九二）を擁立し、續いて峻峰槍を天上高く閃起し、主脈は益々北進して、樺澤岳、雙六岳を経て三股連峰となり、茲に二條に分岐し、東北に走るものは鷲羽岳、野口五郎岳となり、更に針ノ木岳を経て、後立山系を以て呼ばるゝ鹿島鏈・五龍・唐松・不歸岳等を起し、白馬岳（一九三三米）に最後の奮躍を爲し、小蓮華・雪倉岳に至つて、餘勢盡きて日本海に入る。其の前が即ち親不知の嶮である。一方三股連峰を起点として西北走するものは、立山山系と呼ばれ、黒部五郎岳・上ノ岳となり、薬師岳（二九二六米）の雄偉な山稜を起し、五色ヶ原の高原を抱く鷲岳附近に至つて一旦衰へ、佐良峠に至つて再び振起して、立山連嶺を形成する。其他著名なる支脈として、信州方面に穂高・劍・烏帽子に併行して、前衛を爲す縦走山脈がある。即ち蝶・常念・東天井・大天井から燕に亘るもので、松本平から見える高山脈一帯である。上高地 國立公園の心臓ともいふべき上高地は、松本驛から西方約五二軒、中央山脈最高峰穂高嶽の南麓に在る。途中島々までは松本電鐵の電車があり、それから先は乗合自動車が、上高地の中心なる河童橋まで上る。所要時間二時間半。松本島々間電車は十五軒九、上高地はそれ自身優勝であるが、島々から梓川の溪谷を溯る其の長き途中の景色が、又格別である。〔島

々」梓川と島々川の合流地にあつて、上高地を含む安曇村の中樞、役場・學校等あり、國立公園發展について此村の有力者及び一般村人達の苦心努力を忘れてはならぬ。徳本峠を越しての上高地行は茲から入る。【鵬雲崎】道は高く上つて、眼下に二百米六百六十尺の絶壁を見る。梓川の溪谷美は、此處から初まる。此邊紅葉時最も見事である。【奈川渡】島々から十二軒、旅館賣店等がある。奈川に沿つて行く道が、奈川スキー場を経て、飛驒の高山に通ずる野麥街道である。奈川渡から四軒で【前川渡】茲を西に入つて大野川・番所ヶ原、又乗鞍岳へ通ずる。乗鞍まで十哩、徒歩で約六時間。前川渡から三軒で【澤渡】茲から白骨温泉への道が岐れる。【中の湯温泉】向ふ側の山腹木の間がくれに中の湯温泉が見える。乗合は茲で小憩する。茲から安房峠を越えて飛驒の平湯温泉を經、高山及船津方面へ出る縣道が完成した。平湯迄六哩。茲は又燒岳の登山口に當る。茲から二三分にして延長一、千餘尺の隧道があり、出づれば眼界頓に明朗、碧水躍つて、早くも上高地の水の美しくさに驚く。左方の中空に、白煙を濛々と吐くは名だゝる【燒岳】進んで【大正池】池中に無數の枯木の立てるが眼につく。更に進んで左に【田代池】それから林間に見える赤色煉瓦が縣營山岳ホテル、即ち【帝國ホテル】。其處から西して川を渡つて【温泉ホテル】、【清水屋旅館】ホテルの所から自動車は眞直ぐに【河童橋】に着く。橋の左右に位置して【旅舎五千尺】。上高地の中心目標。西糸屋旅館、丸西旅館等も其處である。徳本峠越え島々から分岐して徳本峠を越えての上高地道は、島々から河童橋ま

で二十六軒(六里半)昔時は専ら此道によつたものである。道極めて急峻だが、頂上に達し、松樹の間から、銀雪斑らな明神岳の崇美に接した時の気分は、亦言語の及ばぬ壯快さである。頂上から河童橋まで四軒。上高地の特色 萬山重疊の奥に、こんな別乾坤の存在することは不思議と謂はんよりも寧ろ神秘的な感じである。神秘境上高地の首座は穂高岳であるが、穂高岳は幾つかの連峰で、中心が奥穂高岳(三二九二米)第一の高峰である。西穂高(二九〇八米)東穂高、又の名前穂高(三〇九〇米)が東西相對し、其前に明神岳(二二六三米)が立つ。更に北に北穂高(三〇三三米)が控えてゐる。穂高の後方に連なる槍ヶ岳から發した梓の流れが、この穂高連峰の東側から、西に向いて南面に廻り、更に南折し東折し、長溪谷を作つて松本平に降る。穂高は其高度に於て此山脈の首座たるのみならず、其威容に於ても、實に比類が少ない。燒岳は是等諸山に敵ぐる大香爐の如く、山の崇美は既に極まつて居る。水に至つては梓の清流が、花崗岩の白砂中を走ることゝて、些の濁りを加へず、澄澈玲瓏、留まつては深碧に、躍つては雪白に、純の純、粹の粹、而してこの山の胸腹、河の左右、種々の原始の樹林、或は天女の肌を想ふ白樺を交へ、其間には種々の珍禽が、幽韻の調を奏で、其下には高山の草花が妙麗の袖を聯ねる。實に自然美茲に極まるを思ふ。而も上高地の神秘を味はんには、其早曉の光景に接せねばならぬ。日出の頃の上高地は、全く天の岩戸開き其ものゝ再現、眼これを見て、自ら肯づくの外はない。新緑と秋葉 高山の懷、碧水の瀟、夏の涼しきことは言ふまでもなく、多數の登山

客亦夏時に群臻するのであるが、上高地の美は秋の萬山錦繡に至つて、絢爛の極に達する。山水の絶美と相映つて、世界第一の美觀と稱せられる。殊に其三十軒の長溪谷は、上高地・中の湯・澤渡・白骨・奈川渡・稻核・島々と順序に錦の織物を延べて、多日に續く。國幣社穂高神社奥社 上高地の奥、明神岳の麓、明神池の秀麗を占めて穂高神社の奥社が存する。穂高神社は里宮が、松本平なる南安曇郡穂高町に在り、奥社が茲にあるのである。祭神は穂高見命、又の御名は宇都志日金拆命、海神綿津見神の御子で、神武天皇の御母玉依比賣命と御兄弟、即ち神武天皇の叔父神に當らせらる。安曇の海即ち今の松本平は湖水で、穂高見命は之を開拓され子孫安曇族となつた其關係で、松本平の中心地方に命の御社があり、奥社は命垂跡の根據地として、上高地に存するのだと傳へる。奥社例祭は十月八日、里宮は九月二十六・七兩日。上高地に遊び、又同地を経て登山に就くものは、必ず同社奥社に参拜することになつて居るが、河童橋から小梨平を北方に三軒餘、吉城屋の側を北に折れて参道がある。奥社は老樹の間の檜造りの小祠であるが、上高地の魂が茲に存する如き心地がして尊い。奥社の後が一の池、其れが落ちて二の池三の池となる。澄み切つた水の中には明神岳の頂が倒懸し、小さい島が唐檜・白樺等の小樹を載せつゝ、幾つも浮んで居る様、細緻の美である。燒岳登山 燒岳は鐘狀火山で、此種火山で現に噴火しつゝあるものは他に存せず、學術上極めて貴重火山とされて居る。登路は上高地から頂上まで六軒、往復半日、婦女子にも容易。但し霧深き時は路に迷ふから注意

すべきである。上高地と登山各路 上高地はそれ自身が獨立の一大勝區である上に、中央山脈登山の最も有力な根據地であり、當面の穂高各峰は勿論槍ヶ岳及それを経ての燕方面への縦走、更に立山其他の方面への分岐、或は他方面からの歸路、皆この地に落合つて、恰も茲を往來の一大關門とする。されば茲には登山時期には、郵便局（爲替・小荷物も取扱ひ、電話各地方へ通ずる）駐在所・赤十字病院・東京醫專五千尺協同の無料診療所、其他の設備が出来、各旅館は登山に關してあらゆる世話を爲し、相談に應じ、準備に當る。新しき登山者は其處で虚心に注意に従ふが上分別であり、熟練者とも、新コース或は異なる時季等の登山に際しては、一應相談することが、賢明にして安全の道である。上高地旅館 田代池に近く 【帝國ホテル】（電話上高地一・二・三番）がある。之は長野縣が特に外人客其他に對する便宜を圖る爲め其幹旋の下に、帝國ホテルをして建設せしめた山岳ホテルで、内容は洋式。【旅舎五千尺】（電話上高地五番）河童橋の左右に屋舎を持ち、本館は六百山を背景とし、梓の清流を隔て、眞正面に穂高岳に對し、最も觀望の優勝と又交通の便を占めて居る。此國立公園開發に一生の心血を献けた丸山尙氏の經營。前年多くの新室を増築し、一面に上高地發達初期の素朴時代を語ると共に、一面に國立公園の新機運に乗せんと努力を見る。【清水屋ホテル】（電話上高地九番）梓川の西岸霞澤岳に對する所にある。同旅館はもと温泉ホテルと一所で、之も上高地の元老加藤惣言氏が經營の任に當つたのを、氏歿後子息の純一氏が獨立して清水屋旅館を起したものの豊富の温泉

湧出し、清麗な内湯浴室あり、心地好き温泉旅館となつた。【温泉ホテル】(電話上高地八番) 上高地温泉會社の經營で、此會社はもと古き温泉の發見者の一族や、其他有力者を集めて居る。古く温泉のあることが特徴である。青柳堯次郎氏社長。【西糸屋旅館】(電話上高地六番) 瀟洒な旅館で食堂も備はつて居り、案内人組合の聯絡事務所がある。經營者は奥原英男氏。其他 【丸西旅館】(電話上高地三番) 明神池に近く、吉城屋、明神館等がある。中の湯温泉 上高地道と飛騨側平湯道との分岐點にあり、梓の川流に架して、古への足一つ騰りとも云つた風情に、高樓が設けられ、浴後欄に凭れば高岳の翠、清流の碧、心身全く仙化を覺える。【泉質】炭酸鐵を含む鐵泉と、硫化水素泉の二種あり、いづれも湧出量豊富、諸病に有効、この外瀧温泉・野天温泉・仙人窟温泉などの原始的なものもある。【登山】半日で焼岳の頂上を極めて下山出来る。登山期上高地混雜の時などは、特に此處を根據に、槍・穂高又乗鞍其他の登山を爲す人々も少くない。茲は冬期でも又温泉で開業して居るから、スキーヤーには好都合である。【飛騨方面】此地は飛騨の平湯への道であるが、道路改修され乗合自動車も通ずる。同方面又は蒲田温泉等への聯絡點として、此の温泉を足場とするものが多い。白骨温泉 梓川筋の上高地道澤渡から西方山道一里程の所にある。途中まで乗合が通ずる。温泉宿は東西離れて數軒、山の湯には似ぬ大きな構へ、泉質炭酸泉で溫度九度八、最も胃腸病に効がある。温泉は四月に初まり、十一月一ぱいは營業して居る。【乗鞍登山】乗鞍登山は此温泉から最も便利、絶頂まで四里、

一日にして往復、歸來浴槽に勞を癒すことが出来る。【旅館】湯本、新湯、柳屋、大石屋。【乗鞍スキー場】乗鞍岳は山岳スキー場として定評あり、廣袤一萬餘町歩の一大銀盤は、多種多様なスロップに恵まれ、雪量又極めて豊富、十一月の新雪より八月の残雪に到る迄年中スキー可能。松本驛から松本電鐵島々驛下車、上高地方面行乗合自動車に乗替へ、前川渡下車、大野川番所を経て乗鞍山麓金山平に到る。中央山脈の登山 登山可能の諸峰百座を數へ、彼此連亘して、各種の縦走路があり、無盡藏であるが、今其の代表的のものを掲ぐれば、穂高岳 此山脈最高を持つ丈、展望雄大で、南は脚トに上高地の谷を瞰下し、本州中央部の高山大岳皆眼中に收まる。【登山路】上高地から日歸りに出来る。登山路は多種多様で殊にロッククライミングに到つては、隨所に登路を見出すことが出来るが、穂高登山は頗る困難の場所があるから、登山者は確實な案内者によるべきである。槍ヶ岳 上高地から槍ヶ岳へ登るには、吉城屋の前を通り、徳澤、一ノ俣、二ノ俣、赤澤を経て槍ヶ岳大雪溪尻に着く。梓川の源流で仰けば高く萬年雪が身に迫つて、急斜面をなし、槍の穂先が、尖端を現はして居る。こゝで金カンチキを穿き、ピッケルに力をこめて登る。約二時間半で、大槍小屋。小屋の上は、所謂槍の御花畑で夏期は百花咲き亂れて居る。それから約十町殺生小屋更に七・八町で槍の鞍部に達す。こゝに肩の山莊がある。槍ヶ岳には大槍・殺生・肩の三つの小屋があるのだ。【頂上】肩の小屋から右手に、尖端高く天を突いて居るのが、槍の穂先で、頂上を極めるには、約三十分を要する

その一角に牙の如く峙立するを小槍と稱し、其頂上は僅に二十名内外の足跡を入れるに過ぎず、槍ヶ岳神社の小祠がある。何處を瞰下するも、削るが如き千尋の谷底、再視に堪へず、悽壯の極である。槍ヶ岳から常念岳・燕岳へ、槍ヶ岳から東鎌尾根の喜作新道を降つて、西岳小屋があり、大天井岳まで凡そ二時間半常念岳へのコースが岐れ、凡そ一時間で常念岳に登れる。常念へ登らずに行けば燕岳での、縦走は、最も一般的な而も雄大な眺めで、登山者の多いもの、所謂山の銀座通りなるものである。中房温泉から有明驛まで二時間半で出られる。槍ヶ岳から他の諸道、槍ヶ岳から西鎌尾根を経て椈澤岳(二七五四米)を降ると、約六軒で双六ノ池がある。この一帯は高原帯で、御花畑が擴がり、キャシピングの最も優れた地域である。双六池から南へ尾根傳ひ、抜戸岳(二八一二米)を経て、笠ヶ岳(二八九七米)に出、蒲田温泉に下る縦走路がある。双六池から更に北へ三俣蓮華岳(二八四一米)に到ると、路は二分して一つは東北へ、一つは西北へ向ふ。東北なるものは三俣蓮華小屋を經、鷲羽岳(二〇二四米)に至り、更に野口五郎岳(二九二四米)三ッ岳(二八四五米)烏帽子岳(二六六四米)に至つて、高瀬川の谷に下り、葛温泉を經て、大町に出る。西北向するものは黒部五郎小屋を經、上ノ岳(二六六四米)から太郎岳(二七三三米)藥師岳(二九二六米)を經、スゴノリ越を越し、五色小屋を經、立山に至る。槍ヶ岳から上ノ岳小屋迄凡そ一日行程、この間大部分草木帯で、お花畑多く又上ノ岳から太郎

兵衛平を經、藥師岳に至る間は、悠揚たる高原帯の花畑が續き、好景である。大糸南線の勝地豊科町、長野縣南安曇郡の中心都邑、人口六千餘。山登りとしては常念岳から槍ヶ岳の正面口である。穂高町、南安曇郡北部の都邑、人口六千餘、街道を通して北方爺諸峰の雪嶺を眺むる所、風趣ある町。山葵の名産地。國幣社穂高神社、穂高神社に就ては、同社與社上高地の部に記せる如くであるが、穂高町なる里宮は、神苑廣大、社殿幽嚴、國幣社昇格と共に社殿の増改築其他諸設備の建設を爲し、規模宏大の神社となつた。同社遷宮式の人形飾りは、社域の森林を其儘の背景に化し、其豪華さに於て遠近に嘆稱せられて居る。大町、長野縣北安曇郡の中央に位し、土地平坦肥沃、東西好山、南北清水の美境、古への仁科の里、承久の役の仁科盛遠は此地の産。現在戸數三千、人口一萬六千。若一王子神社、町の西北方にあり、祭神伊弉册尊外五柱、中古以來仁科氏崇敬深く、承久三年盛遠院宣を奉じ従士を集むる爲め、流鏑馬を本神社前に奏せしより、爾後流鏑馬は本神社の舊典となり、現今に至るも毎年例祭には之を行ひ大町の一呼物となつて居る。本殿は國寶に指定。【旅館】對山館(電二三)いり山(電五四)、錢屋(電二)、松葉屋旅館(電五八)、有成館(電五五)、口屋北澤みさを(電四四)。仁科三湖、長野縣北安曇郡平村役場は木崎驛にある。大町から四軒、稀有の山水村で、仁科三湖と呼ばる、木崎・中綱・青木の三湖は此村に屬する。木崎湖は信濃木崎驛の北五町より、海の口驛の北方迄連なる狭長な湖で、面積一、四一三千方軒、周回六、五二軒、最深二九五米、海拔七六四米。爺・鹿島・

鎗等の鋭峰が影を映し、風光麗美、夏期の水泳舟遊に適し、冬期のスケートにも宜い。春の晩から赤魚が美味其の他諸魚が獲れる。中綱は築場驛の前に横たはる閑雅な小湖で、三湖中最も氷結し、スケート場として知られる。諸魚の産も多い。青木湖は最も大で、築場驛の北一町、面積一、八六三平方糎、周回六、六七糎、最深六二米に達し、本邦有数の深湖である。海拔高く八二二米。深碧水邊杜鵑啼き、幽寂の趣、前二湖と異なる。西岸エビスマ原はキャンプに適する。湖には姫鱒・赤魚・公魚等が多い。三湖とも釣魚の樂多く、漁業組合あつて、何れも引網の需めに應ずる。【學者村】海ノ口驛の西十町、木崎湖の西にある。學者の別荘地帯で、小熊山麓翠綠の間に小白壘を點綴し、閑靜高雅の場所である。【森城址】木崎湖の西南岸にあつて、湖面より高きこと十米、本丸二ノ丸ともはつきり判る。仁科氏累世の居城。今公園となつて櫻が多い。對岸に『信濃公會堂』があつて、我國夏期大學の元祖。漁業組合の計畫 木崎湖漁業協同組合は北澤茂利榮氏を組合長として、大に陣容を整へ、木崎湖開發上に従ひ、養魚場を設け、公魚・赤魚・鯉・鮒・鰻其他の養殖を行ひ、同時に多くの釣舟を設備し、大に四方の來客を吸集して居る。木崎湖ホテル 湖畔建立の夏期大學信濃公會堂を其儘のホテルに修練道場として開放、宿泊に供す。道の家の經營である。臨水莊道の家 は湖畔の勝地にあつて旅館割烹を兼ね、湖産の新鮮を材料に美味を供する。宿料三圓以上五圓。名産常盤蘋果 北安曇郡常盤村地方の蘋果は品質の佳良を以て知られて居るが、就中清水鎮雄氏息千春氏の蘋果園は

日本一とも云ふべき名聲を博し、前年も帝國農會主催の全國優秀果物品評會に於て、特別優等賞並に農林大臣賞を獲得した。園は面積七町歩、年産二萬五千貫に及び、東京・大阪・京都・名古屋・西宮岡山等より、競争的の注文を受けて居る。因に氏は生産品の捌口及品質向上等の爲め常盤共同果出荷組合を組織したが、同地の栽培家舉つて加入し、現在五十町歩六十餘名を超えて居る。此組合は大町なる北安曇果販賣購買組合と統合の協議中といふ。九月より十一月に至る秋天に於ては、中央山脈の好景を眺めながら、名果の佳味を稱すべく、同園に曳杖の客も少くない。白馬登山口と北城村 北安曇郡の北部、白馬岳の登山口として重要地である。北城村長横澤勇氏は觀光事業にも非常に熱心努力し先年は數萬圓を以て白馬頂上に村營小屋を設けたが、今は同村の白馬館と協定經營して居る。大系線信濃四ツ谷驛の所在地、松本から電車・汽車合せて二時間、大町からはアルプス自動車が運轉してゐる。登山委細は別項に記す。アルプス東方登山口 南方豊科を中心として、南には小倉方面より大瀧登山口。中央には烏川・須砂渡よりする常念登山口。北には有明驛より中房に至る燕登山口がある。大瀧連峰 大瀧は常念や蝶の連脈で、海拔二六一四米、展望美とお花畑と森林美と、凡ての調和美を持ち、槍ヶ岳・穂高岳は直前に峙ち、上高地の溪谷は眼下に見え、中央山脈の各峰は一眸の中にある。登山は極めて平易で、松本市方面からは六、七時間、上高地からは五、六時間で登り得られる。學生團體、殊に女學生團體のコースとして此上もない。山頂には數ヶ所に自然の池あり、キ



キャンプ生活も自由に出来る。大瀧小屋は槍岳殺生小屋経営の中村喜代三郎氏で宿泊に便利。【登山口】大系線一日市場から南安曇郡小倉村役場まで自動車小倉より尾根つたひのみで、鍋冠山を経て大瀧山に至る。行程六、七時間。『豊科口』豊科驛或は柏矢町驛下車、自動車にて三田村役場（電話豊科一五三番）を訪れるがよい。行程六時間。常念岳 松本平から一番高く、一番格好よく見えるのは常念岳である。標高は二八六〇米、松本驛より電車に乗換へ約二十分豊科又は柏矢驛で下車、豊科から自動車約二十分、終點に着して、愈々登山の第一歩。直ぐ烏川の架橋を渡り約三町、一ノ澤登山道に合す。七八時間で常念小屋に着す。【御來光と大雲海】起床午前三時半、常念の頂上に行く。脚下より漠々たる大雲海、そこに浮び出たるアルプスの主峰凡そ六十座、瞬時にしてこれを五彩に染めて、金輪その上に轉出する御來光の大偉觀に至つては壯美の極。中房温泉 上高地を南方の登山口とすれば、中房温泉は中央部の登山口に當る。有明山の後ろにあり、古くから開けた温泉で、南安曇郡有明村地籍である。大系線有明驛から信濃坂まで乗合、四軒徒歩、中房温泉に着。海拔一四六二米、燕岳と有明山の中間、中房川が北から南に走る狭い溪谷地にある。【燕岳登山】燕岳は標高二七六三米登躋容易で、中房温泉から頂上まで上り三時間、下り一時間半である。山は花崗石より成りて端麗。お花畑も廣い。大町及平村方面 大町西方の連嶺は黒部溪谷を隔て、立山山脈と對立して居るので、又これを後立山脈とも稱へる。北方白馬から數へて、杓子・鐘・唐松・五龍・鹿島館・爺・鳴澤

赤澤等の高峻を聯ねて四十五軒、それから針ノ木・蓮華となり、不動・烏帽子・三ツ岳・野口五郎から三又蓮華に續き、鎗に歸着するのである。針ノ木越え 後立山脈を横斷する針ノ木越えはもと富山方面と大町を聯絡せんとする道路の開鑿された所であるが、餘りの峻嶮に崩壊し勝ちであつた所、今は道路の改修、山小屋の準備等も出來、比較的平安な路となつた。第一日を大町又は木崎から出發して、籠川入りの大澤の小屋泊り、對山館の經營及平村の村營小舎がある。峠から四時間半。【平の小屋】に着、此處は數年前まで籠の渡しで有名であつたが、今は吊橋によつて完全に黒部を渡る事が出来る。下流猿飛方面から、同所によつて作られた下廊下の貫通路は黒部の秘勝を探らんとする登山者に取つては、大町からする此コースが一番の捷路となつた譯である。葛温泉 大町から西方八軒槍への縣道が出來、乗合がある。槍や三俣蓮華の北側から發源して來る高瀬川中流の處にあつて、清冽なる溪流に臨み、峰巒圍繞地境幽邃、避暑の好適地で、秋色亦絶佳。温泉豊富各所に湧出し、各色特長あり、橋本ノ湯・元湯・櫻ノ湯・五倫ノ湯・金壺の湯など呼ぶ。炭酸泉あり、硫黄泉あり、無色透明にして温度概ね四十五度内外。諸病に効あり。【旅館】嵐翠樓と呼ぶ葛温泉株式會社經營の旅館があり、設備整ひ、宿泊料も低廉で、自炊も出来る。北安曇郡平村に屬す。【登山路】此温泉から飯鬼岳・烏帽子岳・槍ヶ岳への登山路がある。【平村の觀光設備】大町の北に續く北安曇郡平村は自然の豊富なる所有者たることに於て、南安の安曇村等と共に稀有の村である、即ち水には青木・中綱・

木崎の三湖を有し、山には北アルプス連峰中、北部の主軸を爲す高山は概ね此村の地籍に屬して居る。同村は村長矢崎純氏を初め、何れも觀光事業に熱心で、大いに設備其他の方面に力を注ぎつゝある。登山口としても、針ノ木より立山方面高瀬川溪谷方面等は主として木崎口より、鹿島鎗は築場口方面よりし、何れも縦走に適す。村では登山案内組合を設けて之を統一し、又充分の親切を盡すやう注意してゐる。【アルプススキー場】信濃木崎驛の西南二里高瀬川第二發電所の近くにある。設備整ひ、絶好のスキー場である。白馬登山口 中央山脈の中心槍に次いで、人氣の焦點となれるは白馬である。後立の盟主で、標高二九三〇米。萬年の雪を被つて、北天高く拔んづる壯姿は崇仰に値ひする。而も登山は容易で、婦女子も難儀を感ぜぬ。途中の勝景多く、【大雪溪】【御花畑】あり、【頂上の展望】雲海を隔て、朦朧然たる立山連峰、怒濤重疊の北アルプス・南アルプス。雄姿八ヶ岳を撫する芙蓉。燃ゆる火の淺間・戸隠連山・頸城アルプスは指呼の間にあり、北より西に蒼茫たる越の海・佐渡ヶ島・能登半島は蛾眉より淡い。更に雲海に浮ぶ朝暾、西海に沈む夕暉に至つては、筆舌の盡す能はざる所。【白馬温泉】鍵ヶ岳東面の中腹にあり、本邦最高の温泉で、湯は絶壁巨岩の割目より多量に湧出して居る。【白馬大池】白馬頂上より北約六軒、清冽水晶の如き水を湛へ、高山植物一面に咲き、キャンプ指定地。北城村觀光設備 御花畑の樂園から仰ぎ見る頂上近くに、山麓北城村經營の宿泊所がある。鐵筋建のもので、昭和九年に二階建モダン小屋を増設した。村營頂上小屋には白馬郵

便局の併設あり、又無線電話も開設され、何處とも通話自在である。物價低廉従業者も懇切である。

【旅館】四ツ谷には旅館白馬館があり、諸般の設備あり、村と協力して居る。糸魚川町 大糸線は糸魚川から北方十三軒六を小瀧まで開通し、信濃側は大町から中土まで開通し、此間の峠路には乗合の聯絡がある。北陸本線は西方から來て、越後に入つて市振・親不知・青海の三驛を経て、糸魚川となる。縣西部の最有力都市で、信濃から南下して來た姫川の河口に位し、日本海に面し、戸數は二千人一萬餘。海岸は白砂で、遠く佐渡・能登を眺め、此地から能生海濱にかけては漁獵多く、晩春から夏にかけて魚釣りも面白い。【旅館】高尾館(電一三六)、かんのや(電三)、ゑびや(電六七)、さしも(電二二)、平安堂(電八)、大黒屋(電一九)、鶴來家(電二三)。【大蓮華岳】白馬山を越後の方では、大蓮華岳と稱へて居る。糸魚川から姫川の溪谷を北に溯つて、【蓮華温泉】に達し、茲を根據地として、一路白馬の頂上に上る。

## 諏訪湖地方

富士火山帯は信濃に入つて、八ヶ岳の大嶽を起し、其廣大なる西麓下に、一湖を湛へて、諏訪湖と呼ばれて居る。これを發源として、天龍川が南下して、東海掛塚の湊に入るのので、其流域伊那地方と共に、これは天龍川流域中に屬せしむべきであるが、湖水を繞つて別荘區を爲し、殊に日本神代史に

有名な健御名方の神の鎮座地に在るから、之を一區域と立てる。この地方の特色は、山水の極めて明媚なる上に、出雲族得意の殖産精神を傳へて、産業の大興、日本一に達したことである。即ち人力と天然と相得て、最も調和の宜しきを得た天地である。此地方又温泉極めて豊富、諏訪市及下諏訪町の如き、都會地を以てしながら、有力な温泉自在、泉都と稱せられて居る。

**八ヶ岳と諏訪湖** 新宿からの中央線は、甲府盆地を過ぎ、葦崎邊から急角度に富士見驛に向つて上高するのであるが、此邊の車窓ほど、嶺嶽の歡迎豊かなるはない。北には八ヶ岳の大嶺、その嶽々たる八頂を並べて、我れを迎へ、西には甲斐駒山脈が、首領駒を初めとし、朝與、鳳凰、觀音、地藏、藥師の諸峰、袖を聯ねて立禮しつゝある。日の春あたり願れば、富士の靈峰は、未だに我れを見送つて居る。旅する者の胸は躍らざらんや。先づ八ヶ岳を訪ふ。日本の國土を構成せる東西大山系の斷濶間に噴出したといふ富士火山系の、最秀の鑄造物富士に次いで、其最も魁麗の産出物は、この八ヶ岳火山叢である。主座を赤岳と呼び、海拔二八九九米、西に第二の高峰阿彌陀岳(二八〇七米)が聳え、兩者は中岳の細き山背を以て連なり、南に西岳・編笠岳・旭岳、北に横岳・硫黄岳を起して居る。最高赤岳の峰に立つて四顧すれば、北方蓼科山に至る連峰蜿蜒し、淺間の噴煙手に掬ふべく、東に荒船・茂木・金峰と相對し、西は遙に中央山脈の諸嶺を一眸の中に收め、南は甲駿の諸秀峰、富嶽も指呼の間にある。三方に展開せる廣漠たる裾野の美觀は、他に多く見る能はざる所。佐久・甲斐・諏訪各方

面に登山口あり、佐久は小海線松原よりし、諏訪方面は信濃境・富士見・茅野の諸驛各其口を持つ。

**諏訪湖** 中央線は諏訪の地に入つて、信濃境・富士見・青柳の各驛を經、茅野驛に至る。茲は寒天の名産地、又蓼科八ヶ岳山麓各温泉地への起點である。茅野を過ぎて漸く湖光に接する。諏訪湖ほど世に知られた湖水はない。日本の歴史に於て、最も夙く記された湖水は實にこれである。周圍一八、一八九米、面積五〇四、一〇八方米、深度平均四米強。最深處七米餘。富士帶火山脈と、赤石山系の群岳重疊間の、盆地に湛へられた淡水湖で、諸山の水は、上川宮川其他の流水となりて湖に注ぎ、北西端から天龍川となつて太平洋に注ぐ。舟によりて湖心に出んか、南に守矢の山、東に八ヶ岳の連峰聳え、兩山袖を開くの間麗婉たる芙蓉は、其雪の顔せを示す。風光の明媚無雙、夏時の涼味萬斛なるは言はず冬期は又堅氷湖面を鎖して半米に及び、所謂神渡りの神事があり、スケートの最好場所である

**官幣大社諏訪神社** 上社は長野縣諏訪郡中洲村鎮座、下社は長野縣諏訪郡下諏訪町鎮座。神代の昔健御名方の命。洲羽に來つて、武御甕槌の命と和ぎをされ、爾來長く茲に留まつて開拓に従事された。それは古事記に記された史傳であるが、後健御名方命は湖の南方上社に祀られ妃八坂刀賣命は湖北諏訪神社下社に祭られた。上下を合して諏訪神社とは申す。諏訪神社は我國最古の神社の一つで、古來信濃一ノ宮、諏訪大明神、南宮大明神、諏訪南宮法性大明神など、稱へ、俗にお諏訪様と尊び、天下の崇敬厚く、又日本第一大軍神とあがめ、武家の守護神と尊ばる。祭神前記二柱の外に、御子神十三

柱を併せ祀る。神德崇高皇室のため外敵を降し、賊夷を誅滅し、神功皇后の三韓征伐に、御先を守護し、文久弘安の役には、元寇蒙賊を亡し、日清・日露の兩役にも、軍艦の先導を守護し給ひし事、世人の知る所である。【例祭】四月十五日(上社)供進使参向、例祭執行後、古式の祭典がある。【御射山祭】八月二十七日(上社)(下社)【式年御柱祭】諏訪の御柱祭は非常に有名で、七年目に一回行ふ。神殿の四隅に五丈餘の大丸木(樅)を建つ。上社は八ヶ岳の麓の御小屋林より、十八ヶ村にて之を曳き、下社は東俣御料林より曳き出し、二町四ヶ村之に當る例である。祭事の壯烈盛大なること、他にその比を見ぬ。今回は昭和十九年五月初旬。上社は諏訪市からバスがあり、下社は下諏訪驛から直ぐ近い。諏訪市(中央線上諏訪驛)湖の東岸平坦部に在り、東北方霧ヶ峰に接続す。昔高島城と名づけ、諏訪氏の所領であつた。現在戸數六千、人口三萬、郡の政治的商業的中心地。諏訪湖の佳景に兼ねて、温泉豊富、霧ヶ峰のスキー等もありて、観光にも有力の都會。昨年八月より市制施行。諏訪温泉 湖岸一帯を中心として、到る處に温泉湧出し、其數五百餘を算し、旅館・料理屋等内湯を有せざるはなく、一日の湧出量三萬四千石に上る。温度は平均六十度、泉質は大體含鐵鹽類泉・硫黃泉の二種に屬し、稀に單純泉もある。主として消化不良・神經衰弱等に有効。昔から温泉の都會として神話傳説等に名高く、旅館は宏大なるもの多く、設備完全、諏訪湖の利用と共に、稀有の健勝地である。費用も比較的低廉である。スケート 諏訪湖は十二月下旬頃より結氷し所謂御神渡りから、朝

々厚さを増し、一月下旬より二月上旬に至れば、七八寸の堅氷となり。稀に一尺以上に及び、湖面は一大運動場となり、日本一のスケート場として知られて居る。霧ヶ峰スキー場 上諏訪驛前から自動車の便があり、角間新田・一ノ瀬を経て科の木に到着。一軒程で池のくるみスロープに達する。此處から廣い霧ヶ峰スキー場は展開される。霧ヶ峰の地域は八ヶ岳・蓼科と連る海拔一五〇〇米乃至二〇〇〇米の高原で、東西三里、南北五里、なごやかな傾斜面を持ち、面積凡そ二十五平方里に及ぶ。緩急自在のスロープ縦横に連り、玄人にも初心者にもよきスキー場である。同地は又大日本飛行協會のグライダー指定地となつて居り、壯大な眺望を楽しみながらグライダーの飛びかふを眺むるも夏期の好保養である。霧ヶ峰池のくるみには十餘軒グライダー村には二軒の宿泊設備がある

【旅館】 布半別荘(電三〇・三一〇・五三三) 油屋別館(電五一〇・五一一) 鶯乃湯(電二五九・七一四) 牡丹屋(電一三) (一泊四圓一八圓) たかの湯(電三三〇) 成田屋(電二〇五・二〇九) 吉田屋別館(電七三・三四八) 柳澤旅館(電二四四・七五〇) 蓼科別館詩ホテル(電七) 靜柳館(電三〇一) 諏訪ホテル(電二〇) 鐵鑛泉(電六七・八四一) 富貴の湯(電三五六) 三宜館(電八〇三) 龍東館(電二三八) 松の湯(電一七〇) 寶生閣(電九八三) 富士屋(電一六) 草津温泉(電六二三) 大和屋(電三〇八) 高島館(電一四九) 澁の湯(電四四七) 越後屋(電四一二) 鶴遊館(電二二四) 湖月館(電五四) つるの湯(電八四〇) 吉野館(電二二一) 玉川館(電三四三) 瀧の湯(電五三八) 山本屋(電八三七) 千代の湯(電四〇二) 松の湯(電三七二) 小島旅館(電六二一) 篠原館(電七一六) 竹の湯(電五二〇) 森本屋(電三二五) 若松屋(電二四一) 綿屋(電一七三) 桐の湯、ふたの屋、小倉旅館、稻本館、藥師の湯(電七〇六)